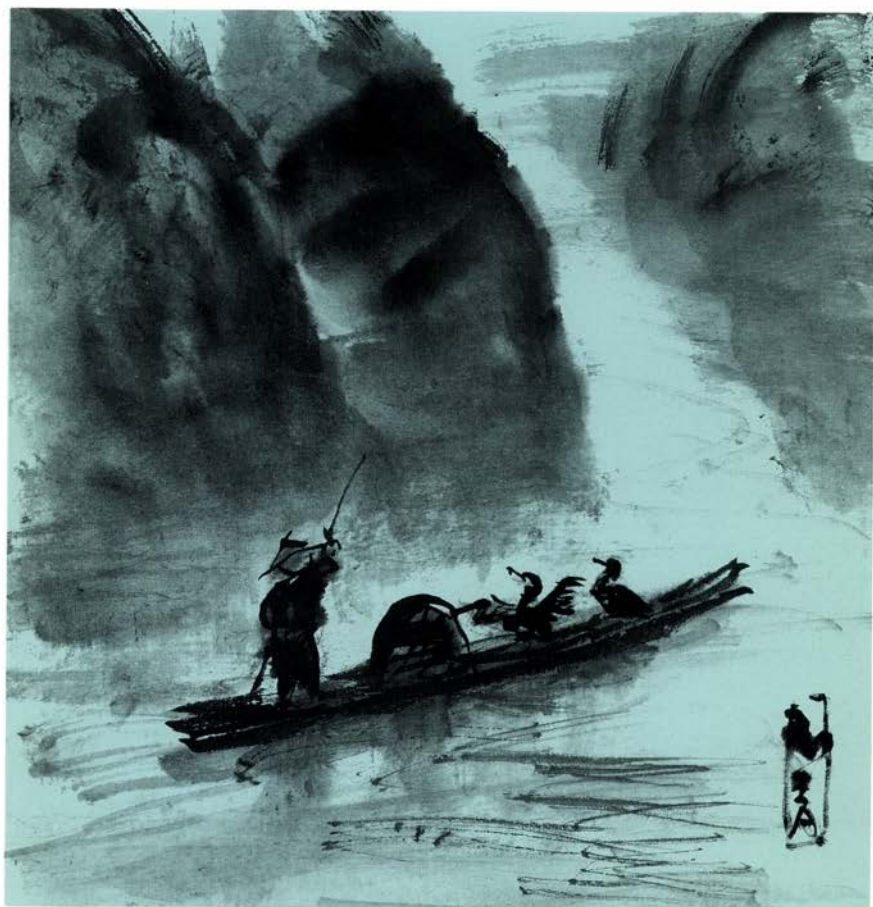


川柳塔

創刊大正十三年
通卷八二九号



日川協加盟

No. 829

六月号

竹原川柳会40周年記念大会

とき 9月8日(日) 午前9時開場
ところ たけはら美術館内「文化創造ホール」
(竹原市中央5-6-28)

交通便 JR呉線・竹原駅下車徒歩7分

兼題と選者(各題2句・午前11時半締切)

「頭」 林 荒介選

「虫」 三浦 宏選

「愛」 寺尾 俊平選

「海」 石原 伯峯選

「森」 橋高 薫風選

◎席題なし 投句拝辞

特別課題「酒」 小島 蘭幸選

◎特別課題は出席予定のみ葉書に2句

連記、8月20日までに句願います

会費 2000円(昼食・発表誌・池田コ

レクシヨニ鑑賞)

宿泊 希望者は早目にご連絡ください

宿は駅から車で15分 温泉あり

出句および連絡先

竹原市竹原町453515 小島 蘭幸

(電話084612216626)

主催 竹原川柳会

定本 西尾 栞句集

橋高薫風・東野大八序文

B6判・248頁・布装上製本

頒価 3000円(〒340円)

柳歴六十五年 西尾 栞川柳の決定版

発行 川柳塔社

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を左記により募集いたします。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/2頁六、〇〇〇円 ③3/4頁一二、〇〇〇円

②半頁九、〇〇〇円 ④一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

川柳塔社

出 会 い

橘 高 薫 風

今年の春は高知佐川町と津軽弘前城の観桜句会に招かれた。深尾氏一万石、津軽氏十万石の城の桜で日本の桜百選に選ばれている。

佐川城は明治の始め廃城となったが、小規模ながら石垣や奥土居が残っていて田中光顯の青山文庫や牧野富太郎ゆかりの牧野公園など、文化的遺産に富んだところ。満開の桜とみやまつつじ、連翹の色彩豊かな競演が見事であった。

弘前へは東京盛岡経由にしたのは北上市の日本詩歌文学館を見学したかったからである。

弘前の桜はまだ蕾で、翌日にやっと開花宣言が出たのだが、それでも夜桜の下で宴をたのしむグループがそここに見られた。そぞろ歩きの川柳塔みちのくの仲間が屋台の飲み屋に上がり込んだ。お

化け屋敷やサーカス小屋からの呼び込みの声とオートバイのエンジンの音の中で地酒の酔いを深めて行った。

不本意な城の桜とは違い、後の二日間は岩木山、八甲田山の雪とグルメ、それに工藤甲吉さんをはじめとする川柳仲間との出会いに充実した時を持ったが、それらは詳しく述べず、ここで北上市に引き返すことにする。

日本詩歌文学館では常設展「水の旅」を見た。湧きいずる水、流れゆく水、波のうねり、そして雨・露・霧……など水の生態を分類して、多数の詩歌作品が半截、色紙、短冊、原稿に作者の個性を豊かに展観されていた。そして、クールベの「波」の絵や北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」のパネル等で、海の舞台をひき立たせているのだった。

詩は井上靖や三好達治、有名な達治の

太郎をねむらせ

太郎の屋根に雪ふりつむ

次郎をねむらせ

次郎の屋根に雪ふりつむ

があり、短歌は空穂、茂吉、晶子、牧水、

かにかくに祇園はこひし寝るときも

枕の下を水のながるる 勇

が目を引き、俳句は

瀧の上に水現れて落ちにけり 夜半

水枕ガバリと寒い海がある 三鬼

などで、川柳は古句と現代川柳二句ずつ、

深川は蚊帳をまくるとすぐに船

舟嫌い一人は川のへりを行き

これには武蔵第一名所角田河絵図並故

跡附の絵が参考資料として掛かる。

人恋し人わずらわし波のおと 栗

はたん雪別れた人のこと思ふ 放浪児

T・S・エリオット、サトウハチロー、

中也、白秋、鉄幹、山頭火、秋桜子、誓

子、蕪村と名だたる名作家の中に、わが

西尾栗先生が寂然とおられる。この偶然

の感動は大きかった。水鶏庵栗の落款

も、見覚えのある酔心化大空の遊印もな

つかしく、いつまでも立ち去り難しの思

いで、先生は生きておられると一人だけ

の広い部屋で叫びたかった。

出会いは感動である。川柳は出会いで

ある。出会いはやはり動かねば得られぬ

と、震える思いの中で感じたのであった。

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

(薫風)

私の句

残照に夢取り立てて生き急ぐ

山本半銭

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 出合い

寝ごととは本気

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 大矢十郎

古川柳 柳籠裏二篇研究(三十―三十一丁)

大空のこころ(65)

水煙抄

秀句鑑賞「同人吟」
水煙抄

渺湖抄

茴香の花

橘高薫風…(1)

八木千代…(2)

橘高薫風選…(4)

東野大八…(42)

橘高薫風…(45)

西田柳宏子選…(52)

林 荒介…(50)

瀬戸まさよ…(79)

小出智子選…(76)

八木千代選…(80)

寝ごととは本気

八木千代



かねがね人間がいまわの
きわに何を言つて旅立つの
か、たとえ言葉にならなく
ても言い残したい思いは誰
にでもあるはずと、関心を

持ち続けていた私でした。

今まで伝えきいた偉い人の言葉のなかには
どうも本音だとは考えられないのもあって、
疑うわけではないけれど、自分で聞いたこと
しか信じられないと思うのです。

その点、臨終にたちあつた人たちの言葉は
忘れることはなく、母は「さびしい」と唇の
かたちで読みとれました。もつとも常日頃か
ら死ぬときはみんな一人だけれど、どんなに
寂しいことだろうと、折りにつけては言つて
いましたから。信心深い母も最後のさびしさ
には勝てなかつたようでした。

今でも時折こんな一生だけは過ごすまいと
胸の底から熱くなつてしまふのは「こんなは
ずではなかつた」と、働きづめ褒められつめ
で頑張り通して五十七歳で亡くなられたのは
嫁のお母さんのこと。かすかな声でしたが、

「庭」	寺澤みど里選	(82)
一路集「履く」	浅田隆樹選	(82)
「マンガ」	内海幸生選	(83)
初歩教室「散る」	吐田公一	(84)
各地柳壇(佳句地十選/平松かすみ)		(86)
路郎賞・川柳塔賞中間発表(一、四月)		(99)
五月本社句会		(102)
■句集紹介		
『西尾 栞句集』を読む	小出 智子	(106)
浄土への手紙	波多野五楽庵	(107)
江原とみおさんが亡くなりました	新家 完司	(108)
三宅一郎さんを悼む	桜井 千秀	(109)
柳界展望		(110)
六月各地句会案内		(111)
■編集後記		(112)

座右の句
私の句

にこやかに殺してるのは腹の虫
虹かけた橋 黄昏る気のあせり

西村 黙 光

(太茂津)

それは痛切な本音の叫びでした。
さて本題にもどりまして、この春筑波山の宿で、久しぶりに息子と同室の短い旅をした夜の事です。

「母さんのそばで寝るのは幼稚園の頃以来」
だとしんみりしているのを、出るが出るまで働いて、ぎりぎりに「やくも」に飛び乗った私はちよつとした慶事のビールになやられて彼の話しかけにも生返事で、あろうことが、寝息をたておまけに軽いいびきまで聞こえては、旅情に浸るところではなかったと、朝が明けてからの会話。そのうえ寝ことには参つたと彼。

「今日は疲れたなあ」

「でも、よかったよかった」

ここまでは無理もない、まあよしとするかと、これも疲れた息子も寝入りかけたそのはなに、「よいしょ」それに「ハイ」と大声で返事までしたと言うのです。

これで決まりです。つまり、私の終わりの挨拶は「ありがたう」でもなく「さようなら」でもなく「ヨイショ：ハイ」なんです。猫が腕立て伏せをし、やおら背を伸ばし出てゆくように、私もいつもの通り掛け声かけて、居心地も満更ではなかったわたくしの晩年に、きつぱり別れを告げたいと念じています。

一応は明るく「ハイ」と返事をしましてね。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

鳥取県 土 橋 螢

涅槃西風 雲日輪に吸いこまれ

ちちははの寂光 蜃気楼となり

息子から母に手紙がくる頃だ

ちよつと待っていま鶯が啼いている

転勤がいやならやめるほかはない

劣性を整えてから古稀の坂

豊中市 田 中 正 坊

もくれんを仰ぎ亡き父おもうなり

失せ物は妻がさがせばきつと出る

我が家には妻という名のボランテア

山頭火きらい新子嫌いの定型詩

定型を少しくずして生きている

春の異動だれも縁なき人ばかり

和歌山市 池 永 正 雄

湯の音と下駄の音聞く宿の朝

ファックスで召集令がもし来たら

たんまにはぶらり瓢箪真似てみる

ワープロで有頂天だと書いてみる

カチンコで千騎万騎が走り出す

無事平穩 牙もだんだん錆びて来る

吹田市 山 本 希 久 子

ひとりで歩くあくまで歩く夕陽の中

てのひらの小鳥と遊ぶ春は鬱

私の最後のパフォーマンスだ遺言書

流行はすたれる赤い自転車よ

ひとり旅の独りは楽しみかんむく

花に風 今日の仕事は今日すまず

伊丹市 山崎君子

水ぬるむ目高のデートきらきらと

川の町お好み食べて待つている

客を待つ花にまぎれる蝶を見て

白い皿 苺の自信のせてくる

里帰り一夜泊りの笛太鼓

コーヒーを娘とのんでいる花疲れ

西宮市 亀岡哲子

駅まで十分 歳時記のあり坂の道

好きなもの 鬼風 鷗わけもなく

立ち止まる花屋 焼きたてパンの店

立ち読みの本屋で花の旅拾う

花冷えのお茶漬 熱いほうじ茶で

制服の袖の短さ卒業す

鳥取市 武田帆雀

誘惑の埧塙が置いてあるお店

手が組める男が焚火の中に居る

活劇を観てから果し状を書く

文才に秀でて浮浪人でいる

血走っている能面の穴二つ

かたくなに蓋する貝に酒を注ぐ

弘前市 斉藤 効

農高の瞳へ最後の講話なり

法律で来たり定年退職日

振り向けば野球部員も脱帽す

路の臺 校長住宅とも別れ

今朝からは無職名残雪となる

肩書きは川柳塔社同人や

尼崎市 春城 武庫坊

母百ヶ日 彼岸ははるか遠くなり

次々と明治が消えて寒い春

節にかけて何も残らぬ僕の言葉

通勤の流れに乗って我無職

森がつぶれてカタカナの街出現

政情不安 野暮なドラマのロングラン

東大阪市 森下 愛 論

宴会で自席動かず野心無し

なんとなく春待つ心ひとり酌む

残り火の人生心気入れ替える

柔 剛を制す偽善が笑う

色即是空 邪魔する振り子の音

春の土素足の温み総身に

仙台市 川村 映 輝

長生きも痛し痒しの昨日今日

やめられぬ煙草売るなと訴える

懇談会禿と白髪にリードされ

このダルマ何時起きられるのか七転び
花粉症 花にかずかず怨みあり
あん蜜を食べたい時は妻をつれ

鳥根県 小砂 白汀

わが命 敗者復活五十年

老妻病んで大技小技使い分け

花作り病んでおります花粉症

また誰かうわさしてくれているくしゃみ

高らかにラッパ水仙ファンファーレ

振り逃げという手もありちつともうろたえぬ

大阪市 渡部 さと美

陽当りに咲いて陽あたりしかしらず

それからをどこへ隠した雪柳

ここはぐつと踏んぱり通そなあ蛙

まず自慢 先手を打って後がある

春の池 平和そうだな水の上は

移り気なまだら椿に御用心

鳥取県 岩崎 みさ江

ふり返る道に転んだ跡がある

無為不待 野に咲く花に教えられ

耳付きの壺に聴かれた独りごと

王様の気ままを民が許さない

灰色はやっぱり黒の側だろう

故郷恋し気ままに生きたちぎれ雲

鳥取県 故江 原とみお
父はやはり手の鳴る方へ背を向けた
枕から三角波が湧いてくる
月の雫欠けた器でうけている

湧き口のないままノサツプまでいった

ひっそりと火を噴く準備しています

青森県 田中 叶

むこうがわホームに鳥のごとく佇つ

深夜バス マネキンの前通過する

いい女終点ひとつ前で降り

神を説く列信号に来て止まり

なにもかも変わった鳥の巢を残し

堺市 桑原 道夫

裏門の開けっぱなしや桜散る

千匹の蝶の腹式呼吸かな

堤防へ足を垂らしに通いけり

遠景に桜を置いてさようなら

かなしみに果てのありける近江かな

鳥取県 新家 完司

大よりも愚かに街を徘徊す

翼にも鱗にも劣る腕かな

若者とあたりさわりのない話

真つ黒な腹にお神酒が突き刺さる

晩年は不遇だったと言われそう

弘前市 高瀬霜石

豊中市 三宅つえ子

紙鉄砲なんて平和な音だろう
善人はどう転んでも怪我をする
仲の良い夫婦で今日も金がない
またひとつ発見がある朝の靴
結局は金かすんなり受け入れる

尼崎市 田中 薫

竹原市 小島 蘭 幸

奈落に沈んでいる写楽の首絵
面明かりのなかに役者の恍惚
昏い眼のならば義太夫の女たち
悪人ぶってブラットホームから落ちる
あれも暮らしの国道は渋滞

和歌山市 西山 幸

世の中が眩暈している観覧車
毎日がほろほろ苦い珈琲よ
長生きはしたくないのに薬いろいろ
釘を打つ音を忘れるはずがない
自画像がときどき半跏思惟になる

八戸市 佐治 千加子

明窓浄机あるじ亡しとて春の花
行く心帰るころの桜花名所
電子音 人工音の人嫌い
鶯の声に驚くラーメン屋
母の忌や 夫の忌 春のもどり雪

桜の下 今年も一病抱いたまま
生きたとは空を仰いで車椅子
達磨はん わては座って十五年
車椅子で出掛ける数を余命とす
車椅子肩をすばめて仁王門

間違いだらけのこの世と思う答案用紙
笑わすことも怒らすことももう出来ぬ
カラオケへ家族が行ったことがない
父ほどに酒を飲まずに生きている
明け方の雨も知らずに寝ていたか

藤井寺市 吉岡 美房

歯医者出て迷わず桜見て帰り
さくら咲き悲しいほどの今がある
散るときに散る幸せを見たさくら
木蓮と出会い桜の酔い醒ます
春雨にひとりで濡れるあほらしさ

米子市 林 荒介

占有権がある一本ずつの杭
去年からまだ塞がらぬ 蟬の穴
無雑作に使われているガムテープ
足跡がある丸山三内の遺跡
十人で嘘だ嘘だと嘘にする

富山市 舟渡杏花

赤いバラ届く見事な刺客だな
手弱女の大きな欠伸気を許す
官官踊りボクにも憶えあります
ルス電がつまらぬことを自白する
散り際の啖呵そろそろ用意する

鳥取県 谷口次男

人間に怒り西から陽が昇る
ミサイルに弓矢で向かうマサイ族
悪知恵がブツブツ湧いて離婚する
一芸もないがメシ食い税払う
このゴミがやがて埋められ夢の島

米子市 川上より子

日本の空にいるね司馬遼太郎の鳥
猿よりも貧しくアフリカ避難民
停年の夫に燕の巣をみせる
起きて芸 眠って芸のサクランボ
米寿を祝う母に笑顔の芸がある

出雲市 伊藤寿美

檀山を遠景さくらんぼが熟れる
蠢くか我が胸にある活断層
鐘三つ鳴らして村に嫁が来る
十五階雛ちゃんまりと瞳を見張る
落味噺の苦さ甘さよ亡姉の忌

西宮市 奥田みつ子

うぬぼれてまた気落ちして今日が行く
駅のマイク キンケイコさん呼んでいる
読経耳に花の散るのを見ていたり
嘘のかけら集め真実見えてくる
菜の花の海に浮かんだ亡兄の軍帽

唐津市 久保正剣

奇っ怪な政治の国に馴れて住む
前例に頼る判事の目が曇り
春愁や隙間だらけの手風琴
守銭奴が殺人製剤知って売る
俺の掌を逃げた蛍が光ってる

唐津市 仁部四郎

病人としての自覚でよく眠る
政治家のあだ名にあった裏の役
人数で押して正義に近づける
自販機を押せばガチャンと欲が出る
片隅に水では消せぬボヤがある

唐津市 山口高明

冥土から方向音痴の夫が呼ぶ
女なら惚れて見せます土佐の海
舞姫がチューしてくれたかぶり付き
本業はそっち除けて竿を持ち
防人の土塁に独り郷土史家

唐津市 浜本ちよ

橋に立ち白鷺の群心和ぐ

うどん嫌いすぎ焼きうどん平げる

足腰が達者であれば一人良し

川柳と水墨 老いの身だしなみ

親馬鹿を見て親馬鹿を反省し

熊本市 永田俊子

涅槃図の百姿百態みな嘆く

涅槃図で鬼が泣いている真実

葬儀屋が繁昌している冬の月

殉教の島に落ちてた紅椿

ちちははの雲かより添い流れゆく

香川県 木村あきら

すりこ木も老母の背も丸うなり

ササヤカナ足跡のこし八十路ゆく

医者の手を借りて細々生きのびる

六地藏お隣同士仲がよい

被災地に復興の陽がサンサンと

香川県 工藤吟笑

執念が動かぬ足をモミ続け

卒寿まで後一息と粘ってる

ノド一つ鳴らしてからに栓を抜く

バアさんは俺より長生きしてほしい

大風呂敷広げて票を狙ってる(選挙戦)

香川県 池内かおり

かも知れぬ百武すい星だと思っ

押しつけでない親切を頂きぬ

うっかりの家系を変える嫁が来た

極秘です赤い肌着の八十五

のこのこと従いて行ったら席がない

松山市 白石春嶺

カマキリが拝む姿勢で身構える

旧道の茂みに駄馬の塚を見た

せっかちが餌をやり過ぎた金魚の死

詮策をすれば嫉妬になる迷い

作戦を練るコーヒーに味が無い

松山市 丹下美津子

血糖値 後もどりする花のころ

メンバーは去年と同じ花の句座

父母がしたように転勤花のころ

金婚へ子らひそひそとプラン練る

ばあちゃんも一肌脱ぐよ孫の恋

今治市 越智一水

さくら さくら ああ外孫のランドセル

野良着 着たとき正直にものが言え

花も実も香りもウメはほめられる

生き方をローカル線の旅で変え

合掌へ心の窓をみな開き

今治市 矢野佳雲

履歴書の十行ほどを生きて死ぬ
娘の電話うしろで孫の笑い声
少年の不満けしゴム切り刻む
光みな当てられ僕の影がない
金になる楽な仕事に性にあい

今治市 野村京子

使い捨てカイロに自分重ねみる
喪の膳で相手がいない箸枕
掬われた足の形を忘れない
諸行無常あすも曼陀羅絵と歩く
長生きのつらさを知らずめでたがり

高知市 北川竹萌

始祖の徳僂び佐川の花見酒
駅前の喫茶 従姉妹の店を訪う
乗り合わせ家内の里の女と掛け
今日の幸 屈託のない話しあい
行動は狭くて広い今日一日

岡山市 時末一灯

削られて雪崩となった山の憎
健忘症 貯金が目減りするおもい
いま背中どんな貌しているのかな
時折りの敬語に尻尾みえかくれ
洗剤で米を洗って炊いたとき

岡山市 井上柳五郎

春雨へ人恋しさが老いつつむ
ギャンブルは嫌うが宝くじは買い
さっぱりとする負け方を味わう日
削られた山の痛みの此処もあり
春らんまん咲いて根へも返す恩

岡山市 川端柳子

人間臭い犬で時々クシャミする
花に目鼻 愛しい人を呼び止める
「ヤア」で会い「ジャア」で別れて今日終わる
かっこよく散る相談の去年今年
まあいいかで何時もすませる70点

倉敷市 田辺灸六

生き細る節目節目の句読点
同居する三面鏡の鬼仏
金持ちの財布は口を緩めない
鯛を釣る秘訣は金の餌らしい
窮鼠猫嚙まぬ世代となり申す

岡山県 二宗吟平

河掃除すんで瀬音が春の曲
春不順 日の出を拝む久し振り
亡弟の墓で寒かろはだれ雪
瀬の音につられ船頭小唄出る
雛祭 忠義桜を朗詠す

岡山県 萩野 鮫虎狼

大笑いして独り旅左遷の地
双眼鏡 夜空を覗く暇があり
修身の通り老いらくの恋進む
軍服のままの亡父は笑わない
旅プラン妻の意見とく違ひ

岡山県 岩道 博友

帰る灯が待つから遠い道も好き
点滴をしている腕も神経痛
不器用にアンテナ替える春の屋根
粗食した昔の茶碗備前焼
お彼岸が過ぎても去年の人が来ず

岡山県 小林 妻子

浮き枕 欝泣の声もとぎれがち
最前線まだまだ忘れないピエロ
うどん一杯 別に野心はなさそう
パン食が笑う味噌汁の悲しい目
騙し舟 信号だけは確か青

岡山県 矢内 寿恵子

九条も平和もゆるる世紀末
万歩計小さな春のそこかしこ
鉛筆を尖らせ詩囊突いてみる
縋れ糸 私の業もこのように
突然が好きな神様ほとけ様

岡山県 大石 あすなろ

七癖のなかのひとつにひと目惚れ
噂から縁は異なもの結ばれる
海老で鯛やっぱり母は有難い
春が来て春のおしゃれを考える
手のひらに渦を巻いてる過去未来

竹原市 古谷 節夫

国会はどうあれサクラ見事咲き
孫の書く森は童話が聞こえそう
自画像へ付けひげ付けて見たくなる
無位無官手酌の酒が性に合う
書道展ハートだけでは出せぬ線

廿日市市 林野 甦光

通勤車で踏まれる靴をまた磨く
ペンパルの便り些事で有難し
痛み止め貼って明日のスケジュール
世の中は落差がきつい村おこし
長い目で見てろと子から便り来る

広島県 藤解 静風

情熱の袋を持ち歩く詩人
予備校で遊び大学でも遊び
卒業式 仕送り済んだ親が泣く
政治不信 銀行不信 テレビ不信
年金の生活にどうも芯がない

柳井市 弘津柳慶

勤労者の向こうを張って座りこみ
税金から国会延期のお手当金
退職に老人会から勧めが来
税務署へ八十過ぎてもお呼出し
テレビの桜便りに爛をつけ

宇部市 平田実男

親と子の絆がお金とは淋し
イヤリングされて驚く妻の耳
道真がにが笑いする絵馬の誤字
税金を素直に掛けた阿呆らしさ
天下り黒いパイプを太くする

下関市 石川侃流洞

ビール出す気だなコップが伏せてある
景気上向くニュースを湯割り飲みながら
包丁は持たぬ平成新世帯
空しさと没句供養のワンカップ
まだ飲める幸せがある老いの膳

鳥取市 両川洋々

過労死の蟻よ我慢をしすぎたな
ゲンマンで鬼と約束してしまふ
正直な梅で亡父の忌待って咲く
リストラの渦にこの首やるもんか
老木よ神戸の地獄見ていたか

鳥取市 西村黙光

総身に癌 弥陀の慈愛へ掌を合わす
告知され絆が耐える生き地獄
鳥の声身の毛のよだつ夜明け前
病室でこっそりお経口ずさむ
どの神に祈ると届く安楽死

鳥取市 美田旋風

流し雛 春の序曲に涙する
止まり木で青春語る友が減る
超ミニが若返らせる春の街
あの道をひよっと曲った運の尽き
子の介護受けないように散歩する

倉吉市 野中御前

燃えつきて普通の灰になるのです
猫語犬語を訳す二十一世紀
芸の道 親子を超えて鬼になる
弓なりの恰好だけはする影だ
嘘つかぬ鏡にうその顔つくる

倉吉市 野口節子

完熟のトマトが熱い息を吐く
或る日突然温度の違う水を飲む
あったかな庭を小鳥にかしたげる
身の内に鳩の千羽を住まわせる
手をそっと触れてくださるだけで好い

倉吉市 松本 よしえ

芸の無い男と映画見て帰る
幸せが溢れて母乳ほとばしる
若かった頃の日記がこそばゆい
快速の止まらぬ駅で待っている
公園の孔雀が羽を広げない

米子市 林 瑞 枝

一寸した晴れ間がチャンス夢買いに
情熱のカンナ見詰めている微熱
川の水 詩の母胎となっている
生み立ての卵で今日を光らせる
恋をして親のてのひらから離れ

米子市 田 中 亜 弥

昨日から今日と噂が褪せてくる
物知りのカラスが今日も屋根にいる
豆腐切る音がわたしに伝わるよ
流木の芸は流れるたびに深くなる
極楽は広くて場所とりに迷う

米子市 政 岡 日 枝 子

ぎりぎりの処で叫ぶ開けゴマ
時が移ると日記多弁になってくる
内緒だといえど日記も黙ってる
生き下手で発破を運ぶ役ばかり
喜劇役者のいのち知ってるのはピエロ

米子市 茂 理 高 代

雪解水走れわたしもついてゆく
風に弓引いた若さはもどらない
泣き砂が泣くな泣くなと付いてくる
草の香をかぐと目の裏に描く里の地図
糸口が見えて来たから立上がる

米子市 光 井 玲 子

充電してもやっぱりわたし蛍光灯
沈黙は金と信じている父よ
普通では買えぬ極楽ゆきのキップ
私には漕げぬ男の海がある
インターホン鬼の誘いか身構える

米子市 白 根 ふ み

讃美歌をうたえば悔いが美しい
背中合せのしあわせをいとおしむ
少年の準備 大樹を仰ぎだす
合掌の中でふくらむ煩惱が
ひと雫しぼりあなたと語りあう

米子市 中 井 ゆ き

桜散るさくらの花のある限り
七草も雑草になる春なかば
赤ひとはけ原風景がよみがえる
潮の路別れて行った魚家族
龍宮も墓場も抱いて深い海

米子市 寺 沢 みど里

満潮の怖さを知らぬ養殖魚
掘り終えて穴の深さにたじろいだ
穴かがりしながら余生埋めていく
終焉は独りと怖いこと思う
機上から見る雲海に掌を合わす

米子市 木 村 富美子

お迎えの準備百歳までしない
平凡がやっぱり似合う山の芋
期待した娘が専業主婦でいる
漫才で笑える今日のありがたし
矢を放つ弓に邪心はなかったか

鳥取県 石 尾 かつ乃

情熱は昔のまんま農を継ぐ
遮断機の向うの犬と顔が合い
豊かさの中で隣へもらい水
風の駅出たらじっくり読む便り
ひびきあう音に祭りが盛り上がる

鳥取県 田 村 きみ子

マロニエの陰に忘れてきた帽子
お隣のことを気になる袋小路
借用書 弓は引くよと書いてある
堂々とお金を借りにくる憎さ
裏道を大きな欠伸して帰る

鳥取県 土 橋 はるお

寺子屋に孫の補習をさせにゆく
真面目腐ったばかりの顔がアルバムに
傘差して一升びんがやって来た
生きのびて種粳蒔ける幸せよ
食道に赤信号が点いている

鳥取県 上 田 俊 路

白鳥の飛び立つ日から水ぬるむ
亡父の齡越えた彼岸のよもぎ餅
好きだった酒を墓前で酌む彼岸
節目ごとつけたけじめが生きてくる
イチローが打って走って風に乗る

鳥取県 石 谷 美恵子

レンタルのお洒落で妻は翔んでいる
我慢した涙が終い風呂に浮く
今流の婦唱夫随でつつがない
鍬をもつ手には弓矢など要らぬ
大物が雑魚が何事にも平気

鳥取県 乾 喜 与 志

桜爛漫 誕生会を盛り上げる
悔いも湧く喜びも湧く九十歳
晩酌に詩の若返る刻がある
童心に返りひとり身を楽しむ
誕生会やがて散る日を識っている

鳥取県 幸家單車

家出した妻から届く離縁状
ふる里の選手に光る金メダル
督促が届くまでには夜逃げする
お見合いの顔もレンタル出来まいか
父の瞳に涙が光る娘の門出

鳥取県 乾隆風

母の忌を迎えて木蓮が匂う
住職もやはり刺身を召しあがる
一升ビンを据えて電話をかけてみる
一皮むけば偏屈ものの類いです
寝たきりになれば一本気は捨てる

鳥取県 津村八重子

咲きそう花と内証ばなしする
すこやかな幸せ何もかもうまい
高のぞみよそう行く先見えている
銀河まではるかにひびけわが吟声
民謡を歌えば足もういてくる

鳥取県 林露杖

夜桜に寡黙な友と地酒酌む
花の下 先のことなど思うまい
梨交配 蝶の役目を老夫婦
逆縁の五十回忌の墓詣り
八十年生きた証が見当らぬ

鳥取県 さえきやえ

みじかい花のいのちに畑をかしてやる
一年生にメダカすくいをさせたいな
いい腕を殺してしまおう口八丁
おせんど山のさくらが来いといっている
良心が知らないふりをさせませぬ

松江市 舟木与根一

四月馬鹿 天気予報も雪と言う
バツイチで男勝りで泣き上戸
本音聞くつもりが先に酔いつぶれ
明くる朝にする冷静な日記帳
雑草が旧家を占領し始める

松江市 柳楽鶴丸

夫婦別姓で迎えた珊瑚婚
男女差別を是認している女がいる
女の黒髪 死語になりそうだ
日本の体質トカゲの尻尾切り
魚が泣いたら生きづくりは出来ぬ

出雲市 尼れいじ

三浪へ父の臍 骨粗鬆症
年功序列虚しい風が吹く窓辺
故郷に私の殻が干してある
夢風船五月の風に乗らなんだ
弱虫でないよでんでん虫が言う

出雲市 板垣草丘

花びらの五枚かぞえた頃の指

母さんは普通 父さん変わり者

税金で建物道楽してるよう

中毒ははしりどころを露のとう

咎めだてしたくないけど警備員

出雲市 小玉満江

神様にお出まし願う渡り初め

逃げ道は煙草一服つけてから

人知れず咲く野大根春を告げ

前に行くライバルの傘大き過ぎ

万円の竿に魚は寄りつかず

出雲市 岸桂子

病院に不幸な靴の一家族

母見舞うこぶしの花も三度咲く

針の穴わたしの自信通さない

冴えない頭にポケットベルがなる

騙されて泣いた涙は忘れない

出雲市 石倉芙佐子

菜の花の深い吐息が零れそう

菜の花を孤独にさせる白い道

レモンティー風も一息したときに

あの世この世と忙しそうない師

轟々と刻は流れる神戸川

出雲市 園山多賀子

嗚呼と書くこの世は夢か幻か

陽が沈む未だ納得のいかぬこと

マンネリの転び癖から起ち上がる

不即不離 平行線のまま味方

両の掌のバランスに未だ欲がある

出雲市 吉岡きみえ

人生浮沈 春だ春だと浮かれてる

春陽気あせり始めた葱坊主

めしを炊く普通の嫁さん探してる

日に三度おなじこと言う癖がある

肉ジャガが食べたいホームシックとか

出雲市 竹治ちかし

まだ欲を持って不惑の齢を越え

子のいない分だけ広いマイホーム

苦勞とは言えぬ苦勞をしています

肩書きが変わると変わる風の向き

駆け足が出来る若さに気が付かず

出雲市 久谷まこと

たてまえも平成らしく日々あらた

もうすでに時効の噂ころも替え

思い出をすっぱり脱いで故郷発つ

不本意な結果 詰腹など御免

花時計忘れていないティータイム

島根県 堀江正朗

くじけずに生きよ白杖音清し
音を頼りに生きて音にも血が通う
幸せは心ひとつの置きどころ
手に触れて青葉若葉に湧く生命
見えた日があつて苛立つ恥ずかしさ

島根県 堀江芳子

真夜中を刻む点字を打つ氣迫
考えずもうおやすみと言う枕
道のりの一日ずつはみなドラマ
老いて子に従う良さと寂しさと
寂しさを見せまいとして冗談

島根県 松本文子

又出会いあるからさくら散っていく
彗星も見えた桜にも会えた
握りこぶし開き青空を見せる
雪雲が去れば緑がワツと来る
爽やかに白いマフラー出て行つた

島根県 藤原鈴江

永らえて憂きこと多し春なれど
生きんなかな神のおわすを信じつつ
趣味ひとつ抱いてこの世をしかと生き
いのちある限り生き抜く再入院
沈みゆく心引立て花の下

島根県 西村早苗

誰かの足音だふと箸が止み
井戸掘つて井戸の深さを子に聞かす
花ひらく音によろめくこともある
笹巻きを母がしてきたようにする
少し騙し合つて愛はいつでもこんなもの

島根県 佐々木鳳笙

観音の笑み貰いつつ古都の旅
この歳へ鼓動をくれた日の出会い
シャッターへ最後列にいて背伸び
振り返る話ばかりでお茶が済み
黒髪も乳房もいのち仕舞い風呂

京都市 都倉求芽

夕桜どこかの枝に羽衣が
砂時計よ空には黄砂がとんでいる
今の世におとぎ噺は残せるか
ひとり発つ春の港が明けてくる
毒舌も老いて刃こぼれが目立つ

京都府 稲葉冬葉

雑草の新芽に負けていられない
なせばなる事を大切に生きている
お風呂にも妻の気分の入浴剤
まろやかに霞のように消えた愛
四つ葉のクローバーを買っている女

奈良市 宮口笛生

夢一ぱい一年生のランドセル（孫一年生）

おばあちゃん行つて来まーす一年生

春の雨天氣予報がよく当る

世渡りの下手年金でちと足らず

酒うまい間は妻も安心し

奈良市 天正千梢

引き出しをあけるうつり香こいしくて

心の重み聞いてもらつて深呼吸

地獄です楽しみましよう露天風呂

美意識の源泉たりし城桜

乱世も咲き誇りしや山桜

生駒市 北山悟郎

古い二人昔を思慕の桜咲く

若桜散華の墓に春巡る

金婚式 目出度さ併せ桜咲く

爺ちゃんが戦の話背を伸ばす

気ゆるせば火の粉を浴びる老いの坂

大和高田市 岸本豊平次

達者なら何処かでひよつこりまた会える

梅林に行かんでも庭の一本で

足許を見抜いた値札と知りながら

狂牛症 妻が牛肉避けだした

桜を見 牡丹に来よう当麻寺

大和郡山市 坊農柳弘

だらりの帯解けば無邪気な舞妓はん

かんできの炭火なんともホルモン屋

振り向けばそこは菜の花十勝にて

紫陽花に甘えて昼寝カタツムリ

たらい舟 佐渡へゆつくりフルムーン

奈良県 長谷川春蘭

うららかさどうにも思い出せぬこと

ポスターに心さそわれ春の旅

上向いて口あけて観る通り抜け

ひげそつて父も出てゆく桜見に

花に酔う老いにさびしい軍歌あり

奈良県 上田翠光

侵略と言われ老兵小さく居る

自社さ連立 靖国の戦友化けて来い

金々々 使い込みさえ億の金

住専に思う偽造もしたくなる

橋龍さんやがて一丁上がりなり

和歌山市 堀端三男

捨てたものでない花見に誘われる

自主性の美名で梓を越えたがり

掛け替えない人生恥もまた楽し

陽光燦々老いには老いの青写真

性懲りもなく四季報を眺めてる

和歌山市 山田 高夫

日の目みるまでには長い長い冬
神仏味方につけた自己暗示

働いているからこそのうまいめし
最初はグー次は相手の裏をかき

目に入れて痛くないのが手にあまり

和歌山市 青枝 鉄治

見学のある日国会騒がない

政治家の言うことだから信じない

使途不明の真相知っている女将

木に竹を接いだかたちの政治劇

就職難 大学院で待機する

和歌山市 福本 英子

独り住むわたしへ丹波屋のおはぎ

戻り寒 法事の僧も施主も風邪

一合に慣れてしまった炊飯器

住専に係わり椅子が温もらぬ

吉宗ブーム去って報恩寺のさくら

和歌山市 桜井 千秀

勝者と敗者 社会に仕組ある限り

準備オーケーまた一からのやり直し

速度計よりも持ちたい羅針盤

老人の知恵より情報重視され

座右の銘 私を責めてばかりいる

和歌山市 山口 三千子

衣替え身辺整理しておこう

やりとりはするものでなしちぎれ雲

趣味の輪の中で学んだ人間味

子の将来考え途中下車出来ず

娘が嫁ぐまではと馬鹿になっている

和歌山市 宮口 克子

うつつふ おでことおでこ こつつんこ

臍のない蛙の腹が愛おしい

人は皆ないものねだりして踊き

明確でやさしい亡父の処方箋

受話器から漏れる女の恋の唄

和歌山市 福井 桂香

記念日を飾るチューリップは真紅

入園の児にばあちゃんの詩を贈る

パンジーもこっちはかりを向きたがる

退屈なときに器を変えてみる

足の裏きょうの売上げほど痛し

和歌山市 細川 稚代

如才ない口で墓穴を掘っている

美しい手で美しく盛る御仏飯

からさわぎ好きで愛に飢えている

クリークの絵葉書亡兄の絶筆だ

本当の山を越したと未だ言えず

和歌山市 田 中 み ね

実はなあと来たら話が長くなる

そのへんの事よう判らない雑魚である

人のこと言えた義理かと思うこと

責任の転嫁とやらの慣らされる

その時は多分あなたに付いてゆく

海南市 三 宅 保 州

静かなるドンに男は憧れる

そろばんも俺もどっこい生きている

エレベーターみんな黙って上を見る

タクシーが教えてくれた回り道

忘れたと言えぬ形状記憶シャツ

和歌山県 小 倉 ア サ

満願日ご都合主義も消えていた

参考までの言葉に乗ってきた釣書

同行二人 孤独の匂い消えてゆく

返し針貰うほどでもないのだが

春らしい風に出逢うた七回忌

神戸市 山 口 美 穂

ペランダの花の間にバセリ葱

残り時間気になりながらのマイペース

花冷えも予定通りの宴にする

愚痴は言うまいじめな老女の顔になる

日向ぼこ本当の母今どこに

神戸市 木 村 貴代子

泣く笑う小さきいのちのほとばしり

亡父をほめ子をほめ法事しめくくる

首切りをすませ突然首になる

嘘ひとつ自らおちた蟻地獄

雨の朝三つ葉の伸びる音を聞く

尼崎市 春 城 年 代

うすれゆく熱意に打つ手見つからず

身のまわりに侍らしているメモ用紙

山越えて地獄極楽確かめに

フレームの花ただようていて至福

佳人ぶって蘭の花束包ませて

西宮市 門 谷 たず子

枯野残照 絵ハガキの子が遠ざかる

春の乱 片方残るイヤリング

そうねそうねといつかお世話になる嫁に

老いるとは指を零れてゆく月日

缶を蹴るあの子も重い塾かばん

西宮市 菊 池 トミエ

幸せは小さくて良い実南天

突然は電話口からやってくる

十三回忌もうだれも来ぬ家族だけ

人生の余白に似合う夢を抱く

万歩計つけてベンチで日向ぼこ

西宮市 池田善守

知らぬ間に万歩をこえた花堤
学び舎に植え来し桜今思う
花見酒隣の境いつかなし
人生の仕上げ楽しむ老夫婦
子供から内輪の話 外に洩れ

伊丹市 檜谷寿馬

代筆を杖に句作へ午後の旅
前線の三日遅れが咲く窓辺
マンションに遠野のカップと成り住う
大脳の中で震災一周忌
同じ師を持った時から敵と視る

伊丹市 小熊江美

やわ肌にそつと触れたい孫のほほ
大阪城 化粧直しの桜日和
スーパ一の袋を開けて主婦になる
朝ご飯おいしく食べて今日も良し
片方の肩だけ濡らし夫婦る

宝塚市 吉田笑女

二人しか居ない子の年忘れがち
亡き子等を今も心にだきつづけ
叱られて孫いっぱいしの理屈こね
ため息をまたもらして一人者
夢に見るやさしい友の笑い声

宝塚市 上田佳秋

片手鍋男ひとりの粥を煮る
ひとり居の男へ重い春の闇
前略とあるが久しく逢つてない
影のない友が子連れで借りに来る
紳士録立派な人が見当らぬ

宝塚市 中田純次

号砲の如し奮に春一番
啓蟄のあと矢つぎばや花だより
西行に憧れ辿る花の寺
東京の人に見せたい通り抜け
歩かずに座つてみたい通り抜け

川西市 松本ただし

公平といつも思えぬあみだくじ
言葉より医者 of 瞳を読む癖がつき
寸劇の台詞楽しむ老いふたり
マネキンが歩いていそうなフレッシユマン
沖縄の握りこぶしが宙に浮く

加古川市 吐田公一

たそがれを味わっている長い影
背くらべ親父を越してから自信
口一ぱい風を吸い込む父の鯉
避けようもなくこの道ひた走る
川柳が突いて出そうなのど仏

相生市 中塚礎石

骨董屋 値切れば値打ち下がります

爪丸く切つて会議へ靴の音

無口から出た一言が火をつける

貧乏が一人前にして育て

説教へただうなずいて目を閉じる

大阪市 河井庸佑

逆らつて見たい日もある風見鶏

煽てられ昇り梯子を外される

冗談に皮肉が混じり疎まれる

釣り人の意地で外道に目もくれず

年金の暮しへ門口広過ぎる

大阪市 板東倫子

旅の縁 船上川柳同好会（飛鳥船上より）

デッキに立てば水平線は三百六十度

朝は曼陀羅 夕は涅槃の雲の彩（インド洋）

海に夜光虫 天には南十字星

鎮魂のクルーズ旧海軍の男づれ

大阪市 榊本落児

菜の花は思索の人にふさわしい

こんぺい糖 主張はじけている姿

いい椅子だ座ると睡くなってくる

四十のヌードさがは女優なり

どちらかと言うと悪女の方が好き

大阪市 西出楓楽

妻ですもの裏金と使途不明金

句読点の位置ずれている嫁姑

一生のお願い何度したことか

ど忘れは夕陽がきれい過ぎたから

会ったたびに健康法の変わる人

大阪市 本間満津子

小さな家 日の出陽の入り一人じめ

誰も皆やさし過ぎるのがふと淋し

信じよと子供に教えねばならず

惜しまれて散るとき散りたし美しく

喧嘩相手がまだ幾人か居て嬉し

大阪市 神夏磯典子

散るものは散つて輝く五月の陽

梅実る妻の仕事がたとある

薬待つ病人なのに急からしい

片隅に言い足りぬこと詰つてる

いつも少し戸を開けていて客絶えず

大阪市 清水絹子

マルビルをかいでそれから梅田地図

蜂の巣をつついたように本社ビル

留守電話つづいたあとのバリ土産

子に頼らぬときめて狙洗いあげ

さくら咲くあの日あの道一周忌

大阪市 川 端 一 步

散歩道 静雄の詩碑でひと休み

酒の詩書き写し休肝日ゆらぐ

三十で捨てた本 六十で買うてくる

定年に国語元年の計立てる

駅員と握手よろこぶ園児たち

堺市 板 尾 岳 人

貧富の差 神も仏も同居する (ハンコク)

懺悔すること多かりし神の国 (タイ)

父さんと呼ばれて紳士ラマ九世 (マ)

朽ちていく歴史を刻んでいる廃墟 (ラッカ)

大丸もそごうも開店しています (クアランブル)

堺市 山 本 半 銭

夏木立 迦陵頻伽の薄衣

浮き沈みわたしの胸の深いところ

マンネリと闘う 堂堂巡りして

不協和音息子がとんで来てくれた

年金になだめられてる独り言

堺市 中 野 樺 子

いい電話うれしさがまだ耳の奥

こだわりて終止符打てず七ころび

何くその鬼ずい分小さくなったらし

我が儘気まま霧に包んで生きている

生き生き新芽何だか夢が又一つ

豊中市 井 上 直 次

偏差値へ塾三遷の効もなし

吊皮で読書三昧片手読み

くぎ煮きのおう明石の目ざめ時

きつと咲く花を信じている更地

気がねなく泣くも笑うもこの茶の間

豊中市 滝 北 博 史

ウグイスも河内なまりか道明寺

沖に出て声上げて泣く流しびな

申告に来て置いて行くひどい咳

明日掘る古墳の上をほうき星

マイハート眼科の女医に覗かれる

箕面市 岩 津 ようじ

昔から負け犬主義のいい男

いい上司だったと思う辞めてから

さわやかに負けて見せるも芸のうち

しゃべってる方も分かってない理屈

どないしよう うっかり押しただけの印

池田市 金 崎 峰 子

仲直りどちらが先に口をきる

仲直りでできず無視とてできずいる

公園は今花を待ち人待つ

三日留守よくも伸びたね庭の草

この寒さうつむき加減に椿咲く

吹田市 栗谷 春子

うぐいすのひと声あつとふり向きぬ
迷ふことすくのうなつてはて淋し
けわしくはない八十路の坂は有難し
待ちかねた四月の声も雪まじり
凜とした文章読みし日のほてり

茨木市 藤井 正雄

大阪の味を大阪弁でほめ
妻の留守白子干しとの昼の酒
草野球三振の子に蝶が舞う
風ピタリ止まる社長の襟が飛ぶ
教養が邪魔して裏へ回れない

高槻市 川島 諷云児

聞きたくもあり聞きたくもない噂
ぬるま湯に慣れて打てない句読点
想い出を積んでは崩す夜長かな
父の背をいつかは越える越えてやる
晩学は根気がないと続かない

高槻市 井上 照子

好きだった努力の二字を抱いている
一言居士 冷や汗拭いたこともある
OB会 職名すっかり生きている
調法な口だが始末むずかしい
書道展読めぬが流れ美しい

守口市 森川 まさお

到来の初物 手刀切ってから
幹伝う雨湧いてくるうた心
クロバー甘くて苦い記憶あり
入学式アツケラカンと桜咲く
曙の鴉 微妙な色になり

寝屋川市 堀江 光子

ひっそりと花浴びている招魂碑
噴水を浴びてみたいと風見鶏
小公園 隅にうれしいたこやき屋
公園の植木市からおつき合い
陪席の椅子は端から埋められ

寝屋川市 岸野 あやめ

慰霊碑を建てられたって眠れない
葱生姜にんにく食べて風邪退治
見るもののすべて愛しく眼の手術
お化粧は満点御縁整わず
眉と紅それも濃からず薄からず

枚方市 海老池 洋

春風に目をこすつてゐる閻魔様
制御盤のように点滅 団地窓
平成の花見 携帯電話鳴る
夫婦相和しには遠くまだ夫婦
しずしずとポツクリ寺に散る桜

東大阪市 指宿 千枝子

お花見にドレスアップはしないこと
齢百ひともさくらも見事なり

大好きな日本の風四季の風
少年の口笛風を呼んでいる

そのシャトル サラリーマンの姿かな

藤井寺市 中島 志洋

人の道説く先生に粹な過去

赤を着てちよつと照れてる首の皺

愛妻がマークしている飲み仲間

いざこざをささり忘れて走らんか

古稀すぎて求人欄を見るフアイト

松原市 小池 しげお

結論を出さずに散ってゆく桜

七福神喧嘩した日もあったはず

一流でないからみんな寄ってくる

間違いを正す男の咳払い

青空がきれいで今日は騙せない

松原市 玉置 重人

することがない恐ろしい拷問だ

ごはんが美味しいからまだ大丈夫

改札機があかん言うてるからあかん

太閤はんのファンが多いお堀端

することもないのに肩が凝ってくる

羽曳野市 榎本 吐来

万策のどこのつまりの梯子酒

都落ち天狗の鼻はまだ折れず

春宵や酒がわたしに従いてくる

一期一会を互いに知っている晴着

厨房の男に今日もある自嘲

八尾市 吉村 一風

野仏の横で無人の野菜買う

幸せそうに飲みますなあと酌いでくれ

老いた母可愛くなつてよくもてる

歩幅ふと妻に合うつてるなと思う

そろばんに合わぬ話をまた受ける

八尾市 宮西 弥生

怖さ知らぬ町をきれいに見る少女

咲いて散る姿 迷いからさめる

歳月に元氣をもううて生きている

働いた足 基地反対の列にいる

先のこと見えない今日に花の種

八尾市 高杉 千歩

長寿切手いたたく住専予算通過

生活大学 孫の真似して一年生

どうもどうもローマで聞いたニッポン語

モンマルトル絵かきになつて歩くだけ

ユトリロの街ユトリロの彩に昏れ

岸和田市 芳 地 狸 村

出迎えのレイに照れてる老夫婦

(ホノルル空港)

見るだけでブランド品に手が出ない (アラモアナ・ショッピング)

スコールでカメハメハ王がお身拭い (カメハメハ大王)

沈みゆく夕日のロマンに酔っている (サンセット・クルージング)

肌焼きの美女のビキニに目が困る (ワイキキビーチ)

岸和田市 高須賀 金 太

春光やすべての物が光る朝

満ち潮の激しき音を聴いている

私のコピィのように息子寝る

学習院みたいな顔でクラス会

ふるさと思う温かき稜線

岸和田市 島 崎 富志子

住専も座り込みにも腹が立つ

女でも一人や二人敵はいる

人間臭いそんな弱さの彼が好き

返事せぬ亡き子と語り二十年

サランラップで今日の悲しみ包みます

岸和田市 井 齋 一 齋

拗ねて見て彼の出かたを確かめる

冗談で痛いところを突いて見る

ばやいてるあいだに亀に追越され

話し上手 見分けのつかぬ嘘をつく

お早うで昨夜のことは忘れとこ

岸和田市 寺 田 甚 一

火の酒にしばらく夢を見させられ

アメリカに子が赴任して時差身近

アメリカ行き手ぐすねひいて妻が待ち

譲られた席にとまどう若い古希

気取る人苦手素顔のままが好き

岸和田市 古 野 ひ で

ブライドが何時か驕りになる恐さ

ひとしきり花を愛であい別れ来る

花に酔う四月はわたしの生れ月

優しさに飢えて反旗を振るのかも

南無阿弥陀唱えて頭からつぽに

岸和田市 原 さよ子

古稀なおも心に刻む師のことば

孫という祖父に名刺の顔がない

信号が青 青 青と今日の運

一人旅ぶらり立ち寄る博物館

春うらら籠の小鳥に天がない

岸和田市 岩 佐 ダン吉

冷めた目の子どもが塾に走ってる

責任を問われ一介などという

中立が嫌な男の傷の数

楽らくと母さん裁きつけはった

見栄ばかり写った僕のレントゲン

富田林市 片岡 智恵子

身に覚えある相談を娘から
溜めた家事せかされている青い空
おもちゃ並べ歓迎をしてくれる孫
ころの奥 丸腰になり見えてくる
約束を守れぬ悔いを拭く鏡

河内長野市 井上 喜 醉

退屈な日課で健康だけ確保
酒の味覚え付き合い広くする
この時ぞ日頃のうつぶん酒に乗せ
でしゃばりの舵とる役は難しい
気が抜けた政治の罪は先送り

静岡市 安 本 晃 授

一びきの男を飼っている鼻毛
飽食の席に一人の鬼もいる
悠々と漫画読んでる旅ごころ
八十路越えまだまだ座る席がない
逆光を浴びる男の不動心

静岡県 蘭 田 模 杏

永い目で見て下さい冬木立
ハイキングの一団と逢う古い道
花壇からお芋を掘ったこともある
満開の花より蕾大切に
極上茶 湯呑み磨いて水を撰る

町田市 竹 内 紫 靖

万歩して手帳に五けた記す幸
山を下り孫に合わせたハンバーグ
電話なき暮らし 達筆のこす亡母
兄と逆に家庭教師をした家運
ポリーフ写真貼ったカルテがまた恐い

横浜市 菱 田 満 秋

飲むとすぐ寝るから少し飲まされる
年老いて見せる八重歯は牙に見え
公園の鳥へ人の法を科し
ダイレクトメールごめんよ金がない
目くばせの端をおんなに捉えられ

弘前市 中 山 雅 城

ステッキの先で物言うチャップリン
石鹼がツルツル滑る玉の肌
潮風で風味が増したスルメ鳥賊
新緑の頃に生れて名はミドリ
今月もまた新聞紙だけたまる

弘前市 相 馬 銀 波

消雪期 二週遅れの鉄の汗
たね蒔きは素足で地温確かめる
恋泥棒苦肉の策は屹度ある
向き直るための反抗とも採れる
自己主張背伸びばかりの負け将棋

弘前市 一戸ツネ

黄楊の櫛 欠けてつらつら無常感

通夜の席 置き替えた身に雪が降る

逝く人の背なを見せる仏の灯

仏の灯 過去世の夢を惜しみなく

春の命いっばい駆ける野のうさぎ

弘前市 小寺花峯

働いているから正義蟻の列

子の嘘を軽く包んだオブラート

口下手な奴ほど軽い酒になる

すれ違ふ喪服の女風悲し

青春の色 青りんごから貰う

弘前市 須郷井蛙

忙しく深夜に犬を散歩させ

機械化に昭和一桁溢れ出す

半額の車ブレーキ確かめる

いい腕を持って定年惜しまれる

寄せ鍋の鯛の目玉が僕を見る

黒石市 相馬一花

貸本を寝そべり捲るゴマ煎餅

詭弁家の得意技です保身術

女房にときどき土下座する夫

受売りの説法を聴く膝頭

石臼の団子並べている老舗

青森県 諏訪柳々

川の瀬で雑魚も陽射しをいただきますぬ

桜咲きまだ淋しきは浄閑寺

牛の声 全身全霊かたむけて

理に合わぬ事にも慣れて出世魚

万歩計足いっばいに春を踏む

青森県 西谷大吾

肩車 叶わぬ夢を子に託す

念仏は己の供養百万遍

数珠の輪に人の和を描き百万遍

遠い世の祖霊に語る百万遍

鉦の音に姫を刻む百万遍

八戸市 島田昭治

癌に勝つ口ぐせだったよ妻が逝く

六十一愛した僕を置いて逝く

手遅れと言ってる医師が機械めく

妻の分生きろと友が言ってくれ

見えないが心きれいな佳子さん

砂川市 大橋政良

靴下の穴に過労の声がする

空っぽの壺の中味を推理する

玉音を聞いたラジオもゴミになる

慢心のうろこが落ちて眠くなる

茶にしよう電気ポットが呟いた

唐津市

田口虹汀

高知県

小澤幸泉

子や孫に学ぶこと多々ある米寿

ばんぱりがシテの桜を盛りあげる

おにぎりを提げて土筆に会いに行く

たんぽぽもヨットも風が大好きで

北九州市

梅田宣司

そのまさかまさかが生んだ火の車

父の振る旗がだんだん白くなる

太陽を押し上げ海の朝が来る

泥舟に尻ごみしてるのは男

香川県

成重放任

大の字で一度ゆっくり寝てみたい

仲介も立場忘れて押し問答

しあわせかい小さくなった母の背に

のび盛り少し大きいものがよい

香川県

山地マツエ

忙しい息子よ父親してますか

成績表たった一つの5をはめる

おふくろの味に孤独が寄って来る

税金をきっちり払って小市民

松山市

宮尾みのり

カカカナの職を飛び石してるよう

手術台 企業戦士が横たわる

夢たたむ男の背をポンと押す

妻よ子よ許せ郷里に老母がいる

上阪の息子にたくす父の意地

贖罪を幾度重ねた復活祭

二人無言のままになつかしいジャズ

ふるさとを創る桜が咲き乱れ

高知県

赤川菊野

ひとりには一人のままで桜が散り

孤の部屋を太宰治が来てのぞく

遠花火 亡夫の影が見えかくれ

桜百選 我が古里は桜の町

鳥取市

春木圭一郎

生真面目で札束とんと縁がない

嫁ぐ娘へ株券少し持たせとく

子供らへ金の効果は教えない

生きているうちにお金は使い切る

鳥取市

前田一枝

鳥になりとんで行きたい北の国

美人ではないが妻だけ横に居る

岩清水 待つ人もなくこんこんと

何かある今日のばあちゃんよく動く

鳥取市

小谷美ツ千

欲情の去らぬ枕の人臭し

我慢くらべは花が咲いたら止めにする

大根を煮る花冷えの身のあかし

着ぶくれて四月の闇をさまよえり

鳥取市 岩原 喬水

堂々と前チャック開け闊歩する
くされ縁 昨日も会った今日も会う
三度目の浮気ドキドキもうしない
老骨も美人に会うとまだ燃える

倉吉市 淡路 ゆり子

反対があつて事件が表沙汰
不本意に乗ってしまったエスカレーター
真っ直ぐに歩けと石になじられる
侘び住まい鳥も優しくしてくれる

倉吉市 米田 幸子

このごろは僕より猫を可愛がる
豊かさの裏で地球が吠えている
鍋磨く日課を嫁が継いでくれ
ぬるま湯にトップの首が浮いている

倉吉市 最上 和枝

詫びを言いながら山椒の新芽摘む
うど わらび 山椒 竹の子 春貰う
手を繋ぐ輪の真ん中に水が湧く
それからは一寸自信の隠し芸

米子市 石垣 花子

隣り合う店それぞれに客がつき
人間が出来 拙筆に味も出る
損を損と思わず通う競馬場
輪の中で昭和の話通じない

米子市 青戸 田鶴

少しずつ心うるおす春の雨
粉飾の海ばかりなり桜散る
幸せをよびそう春の袋買う
そのうちにどう変るのか手の平よ

米子市 金山 夕子

深々と並の頭を下げている
遊んでくれる風と楽しく遊んでいる
流行に横一列の日本人
尾根を見る瞳おしゃれな岸恵子

米子市 澤田 千春

人間になったインコは空翔べぬ
乾杯が挨拶がわりの若者だ
朝の鏡 私を笑顔で送り出す
現代の普通とはどのあたりかな

米子市 野坂 なみ

手のり文鳥いえいこれは青い鳥
森の中もう仙人はいないのか
文庫本 視力が落ちてから楽し
ビニール袋の軽さ余りに慣れすぎた

鳥取県 西原 艶子

パレットの準備も春の色にする
スキップで帰る真つ赤なランドセル
姑の腹いつも仏がいるらしい
夫より姑がしっかりして困る

鳥取県 羽津川 公乃

O型に似合わぬ弱気洩れだした

まだ内緒 暗証番号 貸金庫

公表の背丈は若い時のまま

ジェット機のコースの下に娘が暮らす

鳥取県 太田 幸枝

豊かさの心に不安つきまとう

婚約の指輪わくわく震えてる

亡夫と妻固くつないだ赤い糸

高い酒飲んで浮く人愚痴る人

鳥取県 土橋 睦子

花が咲くブライバシーに触れないで

仏壇へ新茶一杯召しあがれ

フラッシュに驚いている紅い梅

イヤリング落して恋が冷めてゆく

鳥取県 西川 和子

電話口おじょうさんと間違える

おじいさんが古い普通を押し通す

お付合い普通がとて難しい

何事もおこらなかつたペーじ繰る

鳥取県 黒田 くに子

番の鳥この家の夫婦子が居ない

郷愁の泉が湧いているコケシ

レオタードそれは見事なブームだな

祝日の日の丸見えぬ春のうつ

出雲市 板垣 夢醉

皺隠すおしゃれ宝石輝かせ

いつ見ても仁王優しい顔でなし

香煙にいい泣き言が出てしま

好きですと素直に言えぬ恋ごころ

出雲市 小白金 房子

門札に遠い恩師の温み抱く

遙山亭 亡師囲んだ春こたつ

変る絵を車窓に貫う夫婦旅

嫁となる娘も招くまつりすし

出雲市 富田 蘭水

えんどうの蔓もいじめの世界です

栄転の朝の味噌汁かみしめる

サングラス外すと狂った世の目見え

心まで染める緑の大連休

島根県 榎原 秀子

母の味思い起して摘むつくし

仕方なくやさしい顔で負けておく

うたたねでも出来たらいいに生欠伸

玄関へもう履くことのない夫の下駄

岡山市 花田 たけ志

ゆく道を妻に指されてつむじ曲げ

友の訃に厳しくなった向かい風

わが道を行けば緩やか老いの坂

被災地の孫に涙は見せられぬ

倉敷市 小野 克枝

前向きに生きて手垢のしみた辞書

子の心嬉しく貰う六十路坂

この人を宥し私も許される

亡き母の小言を想うあしたを思う

倉敷市 井上 富子

ストレスがバツと薄れた花の下

故郷に実家があつて慈姉がいて

腕一本 景気の波を潜り抜け

城山の桜演歌を聞かされる

岡山県 江口 有一朗

昨訶訶訶三世諸仏の笑い声（梅原猛著「空海の思想について」より）

胸開き仏を見せる菩薩像

新築の家見てくれる亡父の夢

補聴器をはずして天の声を聞く

岡山県 山本 玉恵

どん尻を待つてくれる指定席

虹の雫を掬い切れないまま冬に

叱ってくれる人もう居ない冬花火

ボロボロの私をつつむかくれ蓑

岡山県 福原 悦子

物忘れしたつもりして嫁と和す

少年の涙拳で拭いて春

野良の宴こんなに美味しいにぎり飯

ただ歩く主語も述語も空にして

岡山県 池田 半仙

石地藏 類笑む春の日向ぼこ

山茶花よ何時まで咲くかだらしな

万歩計 四季の青空市を見る

明治から生きてても残すものが無い

岡山県 福原 辰江

音よりもやさしく包んでくれる手話

円い乳房女の武器の温かさ

男の噂 女の噂 風が好き

少年よ命のスベア無いんだよ

広島市 森田 文

母の忌や楽しいはずの祭りの日

頑張つてわたしも口にしたことば

気負わずに大きな皿を用意する

何年もかかって気付く夜の祈り

竹原市 森井 菁居

少しならゴルフ用語を知っている

疑問符を持ちライバルも進化する

石仏の貌を見飽きることはない

タカラジェンヌの顔が見えない立見席

竹原市 時 広一路

弾みたい毬なら外へ出してやろ

群れているだけで安心できる雑魚

骨壺の最後へぎこちない箸だ

欲しくない肩書が来て肩が凝る

竹原市 岩 本 笑 子

たんぽぽもいっぱい咲いて子が巣立つ
ツクシツクシ今年は一人で摘んでます
美しい足跡だった恋だった
変身願望 男だったらなと思ひ

竹原市 石 原 淑 子

ながき日や堪忍袋を縫い直す
春うららカバはいつでも平常心
春風や五十を前に深呼吸
長風邪をもて余してる花吹雪

美禰市 安 平 次 弘 道

傍観者になって兎に角生き伸びる
落ちるだけ落ちると明日が見えてくる
謎ときが下手で乾電池が切れる
すぐ顎を出すから未来図が描けぬ

奈良市 米 田 恭 昌

ノンボリの日の丸締める受験生
愚弟賢兄いつも引き立て役の僕
歌謡曲三分の中にもあるドラマ
脳内革命 凡人にはままならず

大和郡山市 榊 原 慧 心

貯めた金 出すにもカメラ監視する
貧しさを肌に感じて虹仰ぐ
やっとかさ友達呼べる家が建つ
フンフンと愚痴を聞けるママが好き

和歌山市 垂 井 千 寿 子

伝言板 長いドラマが伏せてある
動脈硬化透視生々しく迫る
黙秘権 仲間があると見てる母
大阪城の桜も秀吉ブームなり

和歌山市 木 本 朱 夏

さくらさくら愉しい悪に手を染める
夜桜の闇をめくれば魑魅魍魎
いつからわたし腐りつづける写真帳
山吹きの寺に思い出捨てました

和歌山市 玉 井 豊 太

再生紙いちにんに肩並べ
さあここで一気に詰める時である
ややこしい話のつづき夢に出る
待つ人へ時間がにくい電車である

和歌山市 北 山 好 笑

七回忌 自由をくれて有難う
にぶい光で鈍い私もあぶり出す
自分のことを考えている時嘘はない
やさしさよ酔えぬ話も酔って聞く

和歌山市 堀 畑 靖 子

メシにフロだけはきちんと言う相手
わたくしのモニター募集しています
純粹な愛を求めるれんげ草
わたくしの演技大衆向きになる

和歌山市 玉置当代

住み慣れた町と別れて来た寒さ

知らぬ間に夫婦茶碗にひびが入り

価値観の違いがレール交わらず

不発弾 抱えた旅がまだ続く

和歌山県 西口忠雄

露天風呂 隣の旦那に見られたわ

ことばだけでもと母から教えられ

班旅行 奥さんあんな芸するの

女的美ボタン外してからのこと

西宮市 西口 いわゑ

老いたるか子が頼もしく見えるとき

大ジョッキだんだん自信ついてくる

花遍路 亡母が混じっているような

花いかなだ友禅ながしみるような

西宮市 秋元 てる

身に余る肩書貰うボケ除けと

五十回忌 兄妹共に亡父母を越え

ジェラシーの海でのたうつのは男

暇潰しは辞書に限ると宣うた

西宮市 刈田泰司

影法師おまえの背なも曲ったね

長風呂を孫がのぞきに來てくれる

血圧を鎮める水墨画のすすき

薄味で夫婦の絆深くする

西宮市 牧 潤 富喜子

合せなくとも老母のテンポに近くなる

点滴の老母から春が冷えてくる

よく耐えた姑九十二の春なれば

先々を思う辺りで白み出す

西宮市 久保 まさお

春一番 友の更地に棟上がる

去年聞かず鶯の声よみがえる

戻り寒 風邪ひくまいぞ紅枝垂れ

退院の知らせ届かぬ戻り寒

西宮市 山本 義子

昆陽池は遠来の客去り春に

手抜き料理 自分にかえる嫌悪感

里の道ちよつぱり詩人ぶってみる

風邪抜けず鏡のなかは老いばかり

芦屋市 黒田 能子

桜もち食べて待つてる花だより

いつわりのない顔ばかり花の下

明日の風 忘れないこと忘れます

突然に花束届く春です

宝塚市 丸山 よし津

野辺に咲く草花焦りなど知らぬ

普通の子に育って胸を撫でおろす

活字だけが楽しめと言う定年後

終章ではつきり打てぬ句読点

宝塚市 嵯峨根 保子

北帰行 菜の花漬けて聞いてます
亡母の旅なんと最後があつたやら
ゆつくりと歩くりズムに鈴の音
裏窓に哀愁があるオフィス街

大阪市 上田 柳影

どてやきの味を覚えためしのまち
字を選ぶ字典の中に一句あり
また来たと孫のひと言抱きしめる
ローンまだすまず中流の意識のみ

大阪市 清水 利武

寒くても桜見ながら缶ビール
デートする相手がほしい花の下
結婚をしない女が増えている
雨三日続いてストレスためている

大阪市 松尾 柳右子

集金の新任連れて来るバンク
雨の中朝刊一礼念入りに
傘持つて駅へ迎えに行った頃
家近し相合傘を抜け駆ける

大阪市 津守 柳伸

素直さが取り得よく食べよく眠る
付き合いの良さ折り折りに愛でる花
集印帳一番札所また増える
バイブベル リモコン亭主恙無し

大阪市 大塚 節子

一年振り逢えるよろこび花無心
もうここで拝んどくわとハイヒール
もう古希よ一寸はまるうなんなはれ
多数決 日和見してる自己嫌悪

大阪市 町田 達子

春ですな昨夜の月が霞んでた
生誕一〇〇年 賢治の世界無限なり
ラストからつとアメリカ映画のよさを観る
公園の画家へ雀がよく通う

大阪市 稲本 凡子

一気にくめる三月のカレンダー
思い出し笑い止まらぬ帰り道
手話習う指をきれいに洗っている
ぬるま湯でゆつくり充電しています

大阪市 井上 白峰

目の高さ変えて広げた老いの視野
路地裏の生活にもある雪月花
ここだけの話が千里駆け巡る
一言が過ぎて残した悔いの数

大阪市 北 勝美

銘無いが茶釜に匠の技が生き
美しい花を見過す不仕合せ
春の膳木の芽が香る九谷焼
塩漬けにされる花あり花名所

大阪市 玉置 英子

愛してる言わず聞かずに夫逝き
彼女とは一樹の陰の縁程度
無遠慮な視線に顔を撫でてみる
ためらいがあると妻だけ知っている

大阪市 小糸 昭子

終電車二人の世界始まった
一瞬で空気が変わるスキャンダル
生活の中へ土足で電話鳴り
いと優し心持つ時花を買う

大阪市 大河 未佐子

一言の重みに落ちる紅椿
三番叟 肩でいきする主遣い
おそい恋 紫にじむ花桔梗
空っぽのこの身を砕けつむじ風

大阪市 奥田 良子

一人酒 猫を相手に夜の底
風見鶏見えるところに君が住む
正直に話すことから子を躰け
青々と山連なりてつらなりて

堺市 吉本 菁風

幸せでないので女嘘を言う
年金を親に仕送りする長寿
七十を過ぎて禁煙すると言う
会長に診れない人を座らせる

堺市 柿花 紀美女

きらめいた遠い日思う日向ぼこ
レントゲン私の骨をしかと見る
巢立つ子へどこまでも助走したい母
降り立った古里の駅顔を変え

堺市 一瀬 福一

新聞の知恵を集めて靴をはく
酔いざめの水が妻にも分かりかけ
二身一体やつと解って来た夫婦
それだけは言うなと酒を注いでくれ

堺市 近藤 豊子

第三の男が笑う広告塔
長嶺ヤス子さくら鯛のはねるよう
コスモタワー二人ずつ見る夕陽かな
児の髪に触れてたん瘤みつたり

高石市 浅野 房子

夜桜を浅いえにしの人と見る
泡銭ないよりはましかも知れぬ
真夜中に雑魚の雄叫び聞いている
落ちてから君の毘だと知る迂闊

豊中市 安藤 寿美子

花の滝しだれ桜がゆれ止まず
ポリウムをしぼって下さい花が散る
雨止んだとこから今日が始まれり
桜散る身辺整理しなさいと

嘘の世へ四月馬鹿など色褪せる

豊中市 吉田 あずき

素手素足まかせて春の肌ざわり

グリアガスンほんのり潤む遠い春

彗星と会いたいのをいとおしむ

豊中市 江口 明光

老体が落ち葉しぐれに耐えて行く

器からしみ出る味を持つもの

飯の世と結ぶ仏の水を替え

住専とエイズで嘘が良く判る

豊中市 湯浅 馬洗

秀吉のイベント頼る町おこし

リストラの悔しさ混せて粘土捏ね

新学期白い土曜の時間割(学校週休二日制)

サクラサク孫の笑顔について気張る

豊中市 月原 方郎

障子張り終えて間もなく祖母は逝き

人の世も花冷えきびし失業率

もう少し媚びてよいのに梅の花

相続の度に売りさるる土地

豊中市 稲葉 眞郎

生も死も捨てた知覧の観音像

笑顔も凍る特攻隊の写真室

洗濯機 洗濯済みと唄い出す

大っぴらに四月馬鹿言うユートピア

買えるなら買って見たいなその若さ

箕面市 椎江 清芳

長い道互いに言えぬ過去を持ち

湯上がりの気分を満たす妻の酌

誘われた女に呪文かけられる

吹田市 瀬戸 まさよ

つきつめて思う友への長電話

キスしたいさくら微かに揺れている

夜独り何か空しい定年後

マンションに電気煌々独り住む

吹田市 茂見 よ志子

何度目か修羅場を越えて腕残る

朝夕に太陽の塔見て癒える

ふっきれた心に好きな花咲かそ

太陽の下で花見る果報かな

茨木市 堀 良江

忠告のついでに知恵をつけておく

処分する決心つかぬ古日記

尾を引いて星ひたひとおぼろなり

竣工式花の蕾は紅を差し

茨木市 島元 ふみ

順風満帆 行きつく先はみな同じ

爛漫の桜 命をありがとう

花の下顔ぶれ少しずつ変わり

せめて風呂くらいとお湯を溢れさせ

摂津市 井上源一

三十年やつと都会の水に染む
カタカナ語の掛声知らぬ戦中派
春うらら紅茶に落とすブランドー
据膳は神に誓って箸付けぬ

守口市 結城君子

ありがとう乙女椿が咲き終り
さくら餅 淡い色から減ってゆく
菜種梅雨 青木玉の本二冊
ニューヨークに大阪弁を置いていに(息子旅立ち)

寝屋川市 江口度

千の辛夷も灯をともし墓参り
三軒ならぶ寿司屋一軒だけ流行り
被害ゼロ空巢の顔を見なくなる
汚れてますと今着たシャツを脱がされる

寝屋川市 平松かすみ

時雨してお汁粉などはいかがです
赤い実へやつと小鳥が来てくれた
ときどきはやさしいスポット当ててくれ
いやです無人くんからお誘いが

寝屋川市 富山ルイ子

最後かも知れぬ桜を母と見る(母九十五歳)
泣いて泣いて泣いてばかりの母を置き
心細き傘寿傘寿となお深し
充分に生きた思いがする自分

枚方市 八田敏

古雛が娘から孫へと主を替え
唯の一日 独りが欲しい世話の日々
孫来ればゴミは隣の倍を出し
この頃は食べてる割に力抜け

枚方市 前たもつ

水田に蛙が鳴いて安堵する
どの酒も飲みすぎなどは書いてない
近所には内緒にしてる教育者
テレビの前 娘妻僕笑う順

交野市 福崎しげお

もの足りぬ倅の髭が立派過ぎ
七転びもつと転んだ過去がある
スイミングほどの世渡りしてみたい
反論のトーンを落すひと呼吸

東大阪市 安永暁子

情熱もほどほどがよい老いの坂
陽光の引く波のあと犬はしゃぐ
挨拶まわり新婚さんのベア帽子
ぐんぐんと風 幸せそうに風に乗る

藤井寺市 田中透太

葉書一枚 春の便りがまだ出せぬ
折り紙の折り目に冬の日を重ね
周平の残日録の中に亡父
この人とならばと思う花の下

藤井寺市 福元みのる

公園で考える人はしゃぐ人

灰皿が文鎮となる暮し向き

思い出す度 込み上げてくる笑い

戦争の思い出とわに切って捨て

藤井寺市 高田美代子

ボロボロの尻尾を捨てられないでいる

また鉛筆を削ってる寒い春

価値観は違うが同じものを見る

土砂降りで濡れてしまった愛その後

羽曳野市 吉川寿美

どの花も自分の彩で咲き競う

桜花吹雪 忘れ上手に老いぬべし

満ちて来た潮に男の夢をのせ

糸切り歯きりりあなたを許せない

羽曳野市 酒井一壺

ペンシルビルよく建っているなと思う

ビルラッシュ好きな夕焼けだめになる

花の下ゆつくり歩く一人旅

フルムーン二泊三日が頃合いだ

八尾市 山下美津留

ゆつたりと過去を童話にして聞かす

かりかりとおかき噛んでる素敵な歯

ナイヤガラ テープで音を持ち帰る

腹の皮ゆるめ漫才開きに行く

八尾市 宮崎シマ子

ストレスを溶く歌ならば大声で

鈴蘭のリンリン嬉し誕生日

人気上昇 上手な嘘をついたら

ああ言うてしまった返してはくれぬだろ

八尾市 高橋夕花

通院のルンルン気分バス電車

お隣の桜はいつも独りボチ

どの人も春を纏うて眠そうだ

夕ざくら幻を追う夢去らぬ

岸和田市 三輪通彦

考えておくとは先ずは望みない

言わずとも阿吽の呼吸合う夫婦

役職の手前批判もままならず

和解でもエイズ患者の固い顔

岸和田市 田中文時

久し振り花と対話の旅帰り

生き甲斐の趣味喜びとスランプと

窓際でこれも時世と掌を眺め

初夏の風 人の振り見て衣替え

岸和田市 長谷川 呂 万

春宵をのどかと思う定年後

婦人物下着売場にすくむ足

胃が痛むほどの仕事がなつかしい

痛いとは言えず我慢の孫の剣

岸和田市 藪野 けい子

目的があつてなしの衝動買い
CDが紀州備長炭でする演奏

コンピュータで墓と対話する寺がある（高蔵寺）
名声に子のしつげまでほめられる

貝塚市 池田 寿美子

やっと就職 真一文字に春が来る

A席の隣 話せる人を選ぶ

一人はいい小鳥のさえずり聞いている
春愁や他人の傷を思いやる

富田林市 池森 子

筋書きを変えて生きたい春一夜

三角形の頂点に乗せている貌

これからを静かに乗せる白い皿
ぶつかってしまった恋の真ん中に

河内長野市 植村 喜代

母もまた気になる娘いて逝きづらし

春の川 春だ春だと誘惑す

思い出の雪はいつも美しい
アメ一つで泣きやむ頃は手がかかり

和泉市 西岡 洛醉

年金の今日を三食昼寝付き

雨三日カレンダーに無いしるし
やじろべえ少し狂った日の夫婦

電話帳から転げ落ちたは友の訃

和泉市 岡井 やすお

中国の演習砲の向き注意
当選をすればばったも胸を張り

選良と官僚 主導権競う
人の世の汚れ問わじと花笑う

大阪府 榎山 隆

薬害エイズ致命命

青年の港は海図なき船出

仏壇と電子レンジを並べてる
雪の下萌える草あり寒立馬

大阪府 八十田 洞庵

水子地藏 派手目の人が祈り居り

幕あいにピエロ入試の子を案じ

花の下 天下を取ったほどの酔い
明石の架橋 鯛の悲鳴は聞こえぬか

富山市 酒井 輝

父母 祖父母 みな夢がある適齡期

金婚に疲れる旅を子がくれる

力増すごとにこぶしを漏れる砂
古里をアルトが懐かしくさせる

富山市 島 ひかる

道の駅辿り独りの駅に着く

宝石の光は虚飾かも知れず
夢の中 彼はいつでも後ろ向き

庭石を眺めて誰も継がぬ家

富士宮市

渥美弧秀

和歌山市 岩本美智子

病み上がり雑草の勁さに教えられ
ネジリ草見つけた富士の散歩道

省略の言葉に迷う老夫婦

七・三で割る酒類の常備菜

弘前市

蒔苗果林

戦争の想い出話吐き捨てて

どの道も桜散り初めそよぐ風

闇の愛 無断満喫深夜行く

銭に手を引かれる老いは停まらぬ

弘前市

岡本花匠

墓碑洗ひ浮き出た顔はちちのかお

掌の胼胝に愛着がある自負の詩

雪の回廊 春の息吹きへバスツアー

さくら波愛でる六十路の凡夫婦

黒石市

千葉風樹

えん罪のりんごの皮を吊る画鋏

シャワーが冷えてゆく割られないりんご

歯をみがきひとつひとつとスイツチ消す

つまらない時計返事もしてくれぬ

十和田市

阿部進

檀山へ通じる道へ花を植え

はやる心押えて話聞くゆとり

雑魚だけど人の痛みがよくわかる

喜寿迎え頑固おやじが丸くなり

夫婦箸春をたしかなものにする

米櫃に米のない夢古稀かし

不眠の友へ祈り重ねるラベンダー

大阪市 寺井東雲

オーケストラまとめるタクト大きく振る

うちの人居そうな予感パチンコや

ジョッキのグラス並べたオヤジギヤル

大阪市 藤田頂留子

うちとけるほどに垣根も低うなり

雨天中止でてる坊主もうなだれて

海外事故 日本人は居ないよう

池田市 岡本吉太郎

偏差値の秀才国家を危うくす

人間は不意くった時真価出る

力抜くすべを覚えて下り坂

豊中市 松岡久留美

雑草も取るに忍びぬ花咲かせ

手放してや々と母子の絆知る

窓開けて鶯の声仏前へ

枚方市 二宮山久

雨音をわかる目覚めの四季変り

降る雨に季節を感じる床の中

嫁に行き少し慣れたか電話ベル

自選集

月原宵明

胎動へ編棒とまる日向ぼこ
お寺にも人の暮しがある煙
瞑想に入ってもうろうろする迷い
中流を意識し彩の湯に浸る
菩提寺へ一足先に建った句碑

兎島与呂志

スランプを初夏の素足が呼吸する
久し振りにやっぱりよく食べよく喋り
女にはダイヤが光る大ジョッキ
偽りの夢を仰いだ夜の空
顔色をほめてぼちぼちやりなはれ

工藤甲吉

侘びの日も寂の日もある人になり
しゃべらせておけば果てないのも女
死んだ子の齢を数える青りんご
独り者ふとんをかぶるくせがあり
ダイヤモンド貧しい者を貧しくし

小林由多香

逆転の力こつこつ溜めておく
一枚の名刺でわたし売ってくる
不覚にも流行すぎた風邪をひき
根回しも種まきもして実り待つ
天下り顔と肩書さげてゆく

有働芳仙

コンピューター親父が不利な世に変わり
世渡りへ金で買えない嘘をくれ
振出しへもう戻れない車椅子
生きて行く鬱をのれんの酒で消す
目をつむり蒲公英 風の背にのり

辻白溪子

ペンキ屋の筆 気の長い人が持つ
ゴキブリを怖がり女傑見なおされ
物知りやさかい間違ひまで信じ
残業へ飲ませる店が街に出来
学歴の差がはつきり出た左遷

八木千代

大きな檻に机と花を置く自由
まわりに人がいない自由と思わない
花と死ねる自由を蝶は持っている
空には空の自由 淡雪ふる四月
自由すぎてもっと手ごわい檻探す

金井文秋

ガタ来ても命まだまだ続きそう
厳しい世に生甲斐持っているやり手
再婚に過去を捨て去る粗大ゴミ
返す気のないのへ貸したことを悔い
欲のある阿呆で詐欺にひっかかる

波多野五楽庵

竹トンボくるりくるりと喪に服す
まほろばの土器は返事もしてくれぬ
賽の河原に再生不能の塔がある
ポトリポトリと雪の振袖着て歩く
オシラ祭文オシラも涙流しつつ

奥谷弘朗

矢面に立つとオツチヨコチオイにされ
弓なりになって耐えてるいい姿
人間も鳥になりたい時もある
喝采を受けるほどには冴えぬ芸
人間はやっぱり愛情だと思ふ

野村太茂津

偽りを見られたような気の記憶
曖昧な話は記憶せぬ記憶
聞いているうちに消えてた記憶メモ
記憶曖昧 頭は模糊になる記憶
瑕がつく確かな記憶ない私

小西雄々

老木の焦りなだめて新芽出る
ハイネの詩集読み終えはつと血は若い
春を追う足元にまで花の私語
ライバルが威張ると僕は縄のれん
母の井戸いくら汲んでも尽きぬ愛

黒川紫香

ホツとしたとこで咲いてるタンポポよ
久し振り逢うて病氣の話など
この町もバチンコだけはよく流行り
何年か預けていない貯金帳
草の名も判らぬ花の美しさ

遠山可住

朝風呂という贅沢な世に出会ふ
かな文字の恋 子育ては済みました
さて売りも捨てるもならぬ蔵の中
辞書を繰る妻といっしょの物忘れ
磨いたら光る素材があくびする

野田素身郎

病人は母親の方親子連れ

居酒屋の肴如きで妻と揉め

馴染みになった病院内の喫茶店

照れもせず初恋語る歳になり

アニメでも見ようか孫も見てるから

松川杜的

ついそのポストへ行きます鍵かけて

花冷えへまたおない年が一人逝く

竹人形おけさを踊る品がよし

あの寺この寺朱印の軸と話す

アドバイスもうだあーれもしてくれぬ

藤村メ女

薬屋根の軒に玉葱ぶらさがり

傾いた軒でも忘れずつばめ来る

衣替え忘れた紐を解いてみる

よい事がありそう茶柱二つ立つ

雨脚を除く小猫の目が深い

恒松町紅

まだ若い気分はいいが磁気バンド

書き損じばかりで筆が疲れたす

ぐうたらとこまめで丁度いい夫婦

うわべでは愚痴に聞こえる子煩悩

許される歳で細胞衰える

正本水客

見かえれば影は私をみすてない

風花のまちを故郷と思うとく

酒の粕焼くなつかしい顔おもう

人づてに自分のやる気聞かされる

根回しが効いてると思う桜散る

小出智子

大根が一本夕暮れの視野の中

連休の薬どっさり貰ってくる

日曜日一緒にテレビ観てあげる

それにしても散髪の顔引き立たず

今はまだふたりで居るさみしさ

西田柳宏子

リサイクル ゴミと山積みされたまま

やがて来る二十一世紀へ歯を治す

妻の鼻ラッシュの移り香さえ咎め

心臓の強さを蚤に笑われる

本名捨て住所も忘れたグルである

高杉鬼遊

いつものとこでいつものように転げない

遅咲きのさくらよわれと愉しまん

日が昏れて夜が明けるまで語りたい

この世からほったらかしの墓にいる

抱きあって玉になりたい春キャベツ

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(65)

橘 高 薫 風

十四日午前七時安東藩、濱屋旅館に入り窓外に高脚踊を観る

無理解な警察人になやまされながら列車は鴨緑江を渡る。流す筏の情緒も何もあつたものでない。次は税関吏に煩わされた。

宿でも不快をかこつていと珍らしい高脚踊が囃子と窓外階下を通る。こんな宿屋に連れこまれていたばかりに、うまく高脚踊が見られたとは何が幸福か、世の中のことは凡俗の予測をゆるさないわけだ。

茗草君の案内で市中見物、阿片小売所や××書館へ

馬車に乗せられ寒い風を肌感じながら、阿片窟へといそいだ。いうまでもなくそこは支那街だった。

路郎先生は、陰惨な感じがしたと表現する部屋で勇敢に阿片の吸引を試みられたが、羽化登仙の気分を避けて、若くて美しい女から早急に通れる。そして××書館へ。書館とは内地の××楼にあたる娼家のことで、阿片窟も書館も、部屋のたえずまいや仕来りを可成

り詳しく紹介しておられる。

夕刻から歓迎句宴、十二三人の会合は川柳より会食に利用される観があつた。夜奉天へ。

安東で時計すられた事を知り

阿片窟身の振り方を頼むやう

十五日午前六時奉天藩、夜行の十一時四十分で新京へ

早く着き過ぎたので奉天の朝は雪にふかぶかと眠っていた。煉瓦造の洋館が押し並んでいる駅の中央の大通りが千代田通りだと判つたので歩いて見た。雪が珍らしかつたのだ。

大阪弁の江戸みつる君の案内で、鉄路総局、満鉄用度、消費組合、大毎支局やヤマトホテルを歴訪、ホテルで大連の大島清明君と会つ。夜は権兵衛という関東煮屋へ案内されたが、大阪あたりといささか趣が違つていた。

路郎先生は関東煮屋ですき焼が食べたいたいと言いたいことを言われる。女将の部屋を片付けてくれ、すき焼で互いの健康を祝福し合つたが、すき焼以上のご馳走は、女将さんが先生句「子沢山僕の枕は何処へいた」の句を

ほめてくれたのはうれしかったとある。うれしく飲んで鉄路新京へ。

みつる君に

君既に箸の長さになれしころ

十六日午前七時新京藩、満洲屋旅館へ

新京は満洲国の首都で中部満洲の最大農産市場であり、付属地その他を合わせて人口十五万、うち内地人が二万とある。そこへ国都建設局が出来て、人口五十万を入れる市街地をでつちあげることになり、広っぱという広っぱへばらばらに大きな建造物を目白押しに押し並べる設計が出来上つてゐる。既にその三分通りは実現したといつていい。

路郎先生は建設局の処長を訪ねた時、銃剣を手にした衛兵が敬礼をして受付まで案内してくれたこと、局の天井の高いこと驚くべきものがあるなど、あけっぱなしの満洲を奇異と批判の眼で眺められる。

満洲協和会の人たちに会い、支那街の張氏二号邸跡も見て、満人の風俗習慣、迷信などについて得るところ多かつたようだ。

翌十七日の朝、先生は宿舎満洲屋の玄関で中野柳陽氏と記念撮影をし、食事を共にして八時四十分のハルピン行の列車に投じられる。

車中の寝台で虫を拾う

南京虫よこ、が新京いうところ

大矢 十郎

東野 大八

「大矢十郎さんと私(薫風)がはじめて出会ったのは、昭和48年3月、新宮の『みかん』と八尾の『菜の花』の合同吟行会だった。この日の様子はNHKのテレビニュースで放映されたことと思いい出も鮮やかだ。

昭和56年、第16回路郎賞を受賞された句、順々に嫁くそれだけを羨まれ
というのであったことから推察できるが、一男五女の子福者で、九人のお孫さんの計一十二人の子福者である。

寝たふりで聞けば妻娘は父思い
さつきから起きてた顔で妻が起き
久しぶり孫はさほどに思つてず
盃は面倒という婿二人

十郎作品の一つの面は情で、ここには温かい家庭川柳、ほのぼの川柳がくりひろげられ

る。だが一転すれば辛辣な批判精神の持ち主で、

恐ろしい顔にここにこと選挙ピラ
白旗が一番安い防衛費
安売りの字は下手なほど安く見え
雑巾がかわいて愛の破局くる

と、これらは知の一面を存分に發揮する。そして全体を通して、十郎作品の底に流れているのは、常にユーモアの味なのである。

それは十郎さんの人柄であり、生きざまの余裕であるのだが、芸にとつて人(にん)が何より大切であるように、川柳人として、うってつけの得難い素質だといえる。(大矢十郎句集『美かん船』序文・橋高薫風『要約』
「十郎さんと私(太茂津)の最初の出会いには、『川柳わかやま』を始めて間もない頃である。

故垂井葵水氏が、新宮に十郎が川柳同好グループを集めているから応援に行こうと、同行して句会を開いたその時からである。(中略)
長女の富子さんのご主人川上大輪氏(高校教諭)は、体操で怪我せねば、おそらくオリンピックに選ばれたであろうベテランで、初めの雅号は「大車輪」で、葵水のアドバイスで「車」を取ったのだが、川柳に頭角を現し、富子夫人と共に面輪の如く十郎を支えている。
ご長男の喜一君(十郎さんには六人の子達で男性はこの方一人)は、羨ましい限りの親しいで、おそらく父君の句集は、姉弟六人のひそやかな相談で実現にこぎつけたが、句集の費用は喜一君が大部分を負担したのであらうと思われる。

まさ子夫人の内助は並大抵なことではないと察する。長女富子を頭に、とよ子、栄子、裕子の四人を立派に嫁がせ、五女のみち子さんが適齢で控えている。

順々に嫁くそれだけを羨まれ
が路郎賞に輝いた通りである。(同跋文・野村太茂津『要約』)

「義父、十郎氏と出会ったのは、長女富子との付き合いが始まってからであるが、最初の出会いで、彼女の親の趣味を勧められたのには驚嘆した。初対面の父親の姿というものは

は口数が少なく、どことなくとりつきにくいのが普通だが、この予想を見事裏切られて、父だけでなく母や妹、家族の寡聞気すべてがまるで十年の知己に会ったような懐かしさ、なごやかさを作り出しているのも、やはり父の人物、人間性がそうさせているのであろう。

大正の末期に生まれ、昭和の動乱、軍国主義一色の世に青春時代を送り、人生の半分を犠牲にし、昭和21年大陸から引き上げた時、荒廃した日本の姿を誰が想像したであろうか。家屋はもちろんのこと、人心は荒み、どん底まで墮落している姿を目にした時、父はそこに地獄を見たのである。そしてそこに一つの疑問がわいたのである。

人間とは何か、人間の本质とは？そして狂乱のこの時代に何をなすべきか。日頃、詩・短歌・俳句といった短詩文学に興味を持っていた父が、あえて川柳の世界に飛び込んでいったきっかけである。

同好の士もなく、柳誌の所在すら知らぬ父にとって、地方紙に載った川柳欄が唯一のやりどころであったことは確かである。孤軍奮闘を続けながらも、世相を厳しく風刺する父の作風の基礎は、この時代に築き上げたものであろう。昭和44年夏、瓦版同人の故浅利太平氏、番傘同人小山峻氏の三人で、新宮に片

山雲雀先生を迎えて時事川柳を結成した。その後、野村茂津、故垂井葵水両先生を迎え本格的な川柳の指導を仰いだ時から、父の作風は流れを変えていったのである。

川柳は人間である。世相である。すべてのものに川柳の心と眼を注げば、如何なる逆境にもめげぬ明るい希望と慈しみの心が芽生えてくる。それが父の人生修養論である。(同・解説・川上大輪『要約』)

赤いチャンチャンコを着せられ、家族一同から「オメデトウ」というより還暦記念に当り「川柳みかん」を主宰する父の大矢十郎に川柳句集『美かん船』を贈ろうと、ひそかに一男五女たちが相談して実現したもの。親たるものその感激ぶりは、

しあわせがこぼれ落ちそうみかん船
の句で十分うかがえよう。

「大矢十郎は、大正13年10月7日十人目の末っ子として新宮市に生れ、本名通りの柳号である。父親は91歳、母親は88歳という長寿の家系であるだけに、本人もそのつもりで長生きするつもりでいただけに、奥さんがあまり丈夫でないため、おれは30年ぐらひ男やもめで暮らすことになるな、と口癖のように言っていた」(小山太一悼文)

昭和21年大陸から復員して、直ちに川柳の

道にのり、同44年から『川柳塔』誌一本にしばって投句を開始した。これは清水白柳・垂井葵水氏に師事したのが縁である。同47年川柳塔同人に推されるや、『川柳しんぐう吟社』を創立、機関誌『みかん』を発行、やがて川柳塔社参事として活躍。昭和56年には路郎賞や各地柳壇賞に輝いたが、子供たちの心意気こもる句集『美かん船』(昭59刊)を唯一の置土産に、平成7年8月18日内臓疾患で死去。享年70、真道柳心居士。この彼の死去により、『川柳しんぐう吟社』の名称を閉じ、小山太一主宰の『はまゆう川柳会』で再生したのは平成8年1月だ。

「十郎さんは、戦後から川柳に明け暮れたため、裏方としての奥さんは大変だった。六人の子供を産み育てた奥さんは、産前産後の養生すら十分できなかったときいている。一緒に行けたのは句会と歯医者ぐらひだった由。趣味も多く麻雀、将棋や相撲観戦には特に力を入れて、薫風先生と大いに張り合っていたが、彼の古銭収集は知る人ぞ識るで、その鑑定眼は、プロ級だったが、これについて奥さんが、古銭も小判の方に凝ってくれたらとは、この方の一つ話だった」(小山太一悼文)

▽次号は「蛭子 省二」

柳籠裏三篇研究 (三十、三十一丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久
西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗
佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

398 五人めで間男を知る馬鹿亭主

葛故

西原 知らぬは亭主ばかり也。

きつとした証拠もないと馬鹿亭主 三九四

間男を生捕つたりと馬鹿亭主 一〇三二五

この度で都合三度の馬鹿亭主 天三信二

佐藤 贊。五人目は首代五両を利かしているわけであらう。

岩田 佐藤氏説贊。五両の利かせであることにふれねば面白がわからない。

五人目のまをとこ運のわるひやつ 拾八三〇

399 薬師からわかれ入髻祐天寺

洗路

西原 蛸薬師の所が品川と祐天寺への分岐点。

蛸薬師とらと律儀の別るとこ 明六仁二

七久保 贊。餅花だけ提げて帰る昔の入髻の

つらさが目にうかぶようだ。

たこ薬師女の参る所でなし 宝十三仁二

たゞでない薬師と母に見ぬかれる 五七三二

脇道へすい込みたがるたこ薬師

岡田 同。他の連中は品川へ。

宝十二宮三

三十一丁

400 其時の雨はいたつて角が立チ 子好

瀬川 意趣をふくんだ雨の意にとれば、

「菅原道真の霊の雨」とも考えられるが、例

えば「寄るつもりはなかったのだが、たまた

ま雨に降りこめられたから、しかたなく寄つ

てやつたんだ」という場面の意にとるのはど

んなものか。あるいは「あの時、雨さえ降らなければ、こんなことにならなかったはずなのだがと、後々まで恨みに思つような雨」の意で、一般的な意に解してはいけませんか。

青木 上五の其と下五の角で其角。三圓稲荷での其角の雨乞いの句「夕立や田を見めぐりの神ならば」。早天の大雨、喜ぶ者もあれば、恨みに思つる者も出て来る。その被害をこうむった方も存外に広範囲にわたつて「いたつて角が立ち」としたのではなからうか。

鈴木 青木説贊。狂句仕立紛々たる句調。

岡田 其角説。贊。狂句臭フンブン。

401 金の無ひつらをさせてハ伊勢屋也 串柿

瀬川 伊勢屋は「俵約家」の別名みたいなもの。それをそのまま、ほんに金のない面をさせては伊勢屋が一番だ。本当はこっそりと貯えて持っているのだから、表面は全くそんな素振りはない。役者でもあはうまくできまい。

鈴木・岡田 贊。「近江泥坊伊勢乞食」などといった。つまりは江戸っ子の負け惜しみ。

402 よしといふ迄出やんと母の詫び 五楽

瀬川 ドラ息子をかばう甘い母親の気持ちがよく出ている。わたしがよくお詫びしてやる

から、いいいうまで、お前は出てはなりませんよ。本当に困ったものと言いながらも、我が子可愛さのあまり、筋の通らぬ託びを情で通そうとする。

青木〓賛。

母親はとかく息子をひわすかり

宝十一仁三

ちつとつと母手伝ってどらひする

安九松二

母親は息子の嘘をたしてやり

安九松三

鈴木〓「出やんな」は遊びに外出しなさんなの意。

岡田〓同。

403 ふりへのニタ立にあひこりはてる 高砂

瀬川〓夕立にあつてず濡れになった場面とも思ふが、實際問題として、子供でもあるまいし、フリチンで出かけて行くなどとは考えられない。たいてい襷ぐらひはしていたはず。「ふりへのこ」というのは、いわゆる「雨につかれた人」とかくその人はよく雨に降られる」の意にでもとれば、少しは分かりやすくなるが。

青木〓礎稿前説賛。ふりへのこは、フリチン。フリチンゆえに尻端折りで駆け出すことが出来ず、ずぶ濡れ、それだから無襷にこりこり

したと言ふのである。

八木〓要するに無襷なので、尻はしよりをしで駆けられないので困つて懲りたということでしょう。

格別に勞す無ふんの雨舎り

四七四

鈴木〓無襷だから尻はしよりでかけられない。ずぶ濡れに成つてこりはてた。八木氏お説の通り。

岡田〓居候でも、独り者でもいいでしょう。あるいは不精者でも。

403 袖下を風呂敷にする村のよめ

如雀

瀬川〓これは実景であらうか。村の嫁が實際に袖下を風呂敷がわりにして、何かを包んで持っているのであらう。

青木〓主題句、貰い物とも贈り物とも取れるが後者であらう。

佐藤〓「袖下」を的確に把握しないといけなわけではないか。この「袖下」は振袖の丈の意らしい。すると、この句、袖留祝儀の句と見た方が妥当か。つまり、江戸では振袖を留袖にする場合、その余分の布地で袱紗を作るという習慣がある。これは袖の派手な部分が、袱紗にふさわしいからであるが、田舎嫁では、柄も地味だし、布地も錦紗というよさうなものは使えぬので、木綿に類するものであ

らうから、袱紗を作るには不似合ひであらう。それで小風呂敷になつてしまふのはなかるうか。次に有力な参考句をあげる。

いなかでとめると小ふろしきかてきる

安八松二

岩田〓佐藤氏の如く考えていた。「江戸の袖留」袱紗」という概念をいかにも田舎らしく具象化した句立てであらう。江戸において振袖で嫁いだことが分かれればそれでいいのであつて、田舎の嫁は振袖か否か、生地は木綿か絹かということはあまり関係ないと思つ。△田舎〓木綿〓はもはや一種の類型であり、約束であり、虚構の領域に突入している。西原〓単に袖で風呂敷の如くにおおつて持つて行くだけ。入れ物などにいちいち入れたりしないのが村の嫁たるどころ。

鈴木〓議論百出、小生も西原氏同様に礎稿を採ります。しかし、佐藤兄説も捨てがたい。このような場合は一つに定めかねます。

岡田〓礎稿説も通るし、佐藤氏の新説は、これたま貴重。そして岩田氏の言つように江戸人の頭で地方を詠んでいる。江戸ならフクサになる袖下も地方なら小風呂敷〓立派に意が通ります。

鈴木氏の言つように、これは両説可能で、一つにはしれない。

秀句鑑賞

同人吟 林 荒介

—5月号から

例年になく春の遅い今年だが、山から鳥たち

が下りてこなくて、庭の赤い実は一粒も欠けることもなくまだ枝にぶら下がっている。

山に異変があったのではと気掛かりだ。

編集部からは段や頁を跨がらないようにとの指示があったが、行を追っての読書だから勝手に二頁を埋めさせていただく。

何冊かの川柳誌が毎月、手元に届く。ばらばらと捲るだけの川柳誌だが、同人吟を通読して主幹の気配りは大変な作業だと知らされた。誰にでも判る句をと言われて久しいが、誰がドナタをさしての誰なのか気掛かりだ。

通読して感じたことは一読明解、説明のしすぎの句が多かった。説明をしすぎると読者の立ち入る余地がない。さりとて舌足らずになれば、難解句になってしまふ。どこまで省略して読者の共感を得ることが出来るか、比喩が適切であるか、自分の胸底にある「念」を大切に表現してこそ的一句。言うのは簡単だが、自分の句はどうかと納得の行かないままに発表している。自戒しきり。

疎外感しきり包丁買い替える

西出 楓 楽

わたくしごとになるが、子供のころには何時もポケットに「肥後守」を入れていた。鉛筆を削ったのも、竹とんぼ・風のヒゴを削ったのも「肥後守」だった。

普段は何気なく暮らしている輪の中だが、ふと立ち止まると無性に一人を意識してしまふ。ひとさまにとやかくされての疎外感ではなく、自分が創りだした自分自身の中の疎外感。自分を取り払わねば行き場がなくなる。疎外感と包丁をびったりと纏められた楓楽さんの感性に脱帽。新しい包丁で何を刻まれるのか、どんな料理が出来るのか楽しみだ。

刃物好きのわたくしで、気に入った刃物に出会ふとつい買い買ってしまう。変な取り合わけだが、数珠がぶら下がっていて、登山ナイフと山刀が軋がっている私の車。

其処で笑うと石垣が崩れだす

故江 原 とみお

積木が崩れだしているひとこま。理路整然

と進められて、まさに結論が出ようとしていた会議も、一つのジョークで壊れてしまふ。石垣が崩れつぱなしの日本なのに、本気になって怒る人はまだだ。みんなが怒らねば日本の将来は見えてこない。お互いに笑われても崩れない石垣を作りたいものだ。

今計報が届き驚いている。惜しい人がまた一人この世から亡くなられた。

ユトリロの壁 黒猫を生み落とす

田中 薫

わたしの好みから言えば凭れた作品には異論がある。ユトリロくらいは常識だと言われればそれまでだが、ユトリロを知らない人には理解が出来ない。1955年没のフランスの画家、青年期からのアルクール中毒症だったが、モンマルトルを中心にパリの風景を描き、白の時代をへて多彩な絵を残している。のち幸福そうな結婚生活を送っていたようだが、それ以来の絵は無いようだ。

白を基調にした(サン・パンサン通り)の壁から生まれた黒猫 アルクールをあおりつけたユトリロと黒猫は妙に納得させる。

父の喉仏と僕の喉仏

小島 蘭 幸

無駄な言葉がない佳作。父には父の価値観があり、子供にも子供のそれがある。絆には

ゆるぎもない父と子の間でも、育った時代の違いによる解釈の相違、意見の衝突があつても父と子の間柄、何歳になつても大切な父の喉仏であり、自己を見つめている喉仏。

ときめいた昨日が耳を出てゆかぬ

澤田 千春

ときめいた昨日があるのは素晴らしいことだ。素晴らしい昨日を大切にしていれば、素晴らしい明日に続く。何時までもときめいていたい人生でありたいし、感動する事もなくなれば川柳も続かない。

伝えてはならぬ言葉を水に書く

木本 朱夏

水に書き、空に言葉を書きつづけている作者。口には出せないものを抱えているのが、生きている人間の姿だと思ふ。「水に書く」がこの句のいのち。水に書くのはやはり女の句。空に書くのは男ではなからうか。水に書きつづけることによつて、自分が見えてくると思ふ。自分を見据えて自分の言葉で川柳をつくりつづけたものだ。

鐘楼に来てから死んだきりぎりす

松本 よしえ

ワープロに向かつてここまで来たときに計報が届いた。お酒の好きな「とおみさん」が死んだ。三月末の鳥取県大会で出会つたばかりで「きりぎりす」のように瘦せた姿が頭から離れない。鐘楼の下に転がっている干からびたきりぎりすの死骸と重なつてしまふ。川柳塔に毎号のように秀句を発表しておられたとおみさんだった。最初この句を採り上げたときには、こんな鑑賞文になるなんて思つてもいなかったが、こんな結果になつた。鐘楼で死んだきりぎりすが目から離れない。

政治家が喋るとでける鉤屑

仁部 四郎

最近こんな川柳が少なくなつた。住専がらみの国会の座り込みは何だったのだろうか。国民の選良のはずの国会議員にしては理念がなさすぎる。鉤屑だからボツと燃えてサツと消えたのかも知れない。

無農薬キュウリは曲がるものなんだ

岩本 笑子

真つ直ぐな胡瓜も曲がつた胡瓜も、胡瓜は胡瓜で味に違いはないのにランクづけされる。人は外見に惑わされる事が多い。キュウリは曲がるものなんだと知れば、惑わされることもなくなる。本質を見つめての生活。

夕陽へとわが前身を問い結める

田中 輝子

落暉に染まつている輝子さんのシルエットが浮かんでくる。茜色に染められて行く景色

は殊更に問いかけてくる。誰もが背負っている過去、その過去があつてこそその生かされている今の自分。問いつづける限り輝子さんの未来はかがやきつづけることだろう。

大太鼓だけは舐で覚えさす

小池 しげお

大太鼓は生き方の指針。舐で覚えてしまえばもう大丈夫。そうありたいと願うのは、しげおさんだけではなく、みんなの願望。この努力があるかぎり間違ひはない。

葉桜の頃もおんなじ樹の下だ

玉井 豊太

大事なおんなじ樹だ。「おんなじ樹の下」で仰ぎ、大樹と話しつづけておられる豊太さんがこの句の中にいられる。しっかりと大地に根を張つた大樹はケヤキだろうか、はたまた桜の古木。素直に句を読むと不満な樹の下のようにも解釈できるが、同じ樹の下で暮らせて頂いているのは有り難いことだ。

風船に乗つた三日月よく光る

高田 博泉

なにか空に浮かんだ三日月が輝いている。糸のような新月からのお月さん、「よく光る」でときめきが伝わってくる。まるで風船に乗っているようなお月さんに、ずーっとの昔から人は様々なお願いをしてきた。

水煙抄

西田柳宏子選

出雲市 川島 和歌子

遅咲きの梅ほころびて名残り雪

尾張旭市 三浦 きぬ

細雪 襟元合わす春彼岸

わだかまりゴミと一緒に灰にする

着ぶくれて三寒四温の続く春

はんやりと帰らぬ亡夫の影を追う

寝屋川市 宮崎 菜月

單身バック一基を送る子の巣立ち

食卓も静かになって母の鬱

子を送り母の素顔に艶がない

元氣出す薬と思う長電話

花あかりいつもの刻に厨立つ

今治市 塩路 よしみ

どのページ開けても悔いのあとがある

遠来の客 連休プラン棒にふる

人間が好きで電話をかけてます

引退の美学 涙がこみあげる

幸せは恩が両手にあり余る

父母の寿命乗り越えなお生きる
私より長生きする木愛でて植え

悩み事聞けば五十歩百歩なり

寝違えた首のまんまで見る桜

大手術重ねしぶとく生きる我

尼崎市 田辺 鹿太

食前の祈りへ孫も掌を合わす

便利さに欠ける暮しが性に合う

喉見せて笑うとことんお人好し

復興の息吹きを告げる風見鶏

ありすぎる余暇 鉛筆がすぐちびる

熊本県 高野 宵草

光る目と握手をすれば竹刀胼胝

久しぶり逢えばジョークが出て安堵

ペンとメモ離した隙の句を忘れ

見苦しと言う靴が好き軽いから

無関心 妻の好みを着てあるく

今治市 越智青園

消ゴムで消せる嘘なら許せそう
無駄話ストレス捨てておりますの
孫連れて鳩と遊んでもらうパン
温かい嘘をカルテはつきたがる
作り笑いの中に野心が見えかくれ

堺市 桜井莊次

予期しない素顔に出会う曲り角
電話口待たせて鍋に水を差す
真つ直ぐな話を曲げて聞く頑固
方便の嘘がつけぬ鼻の汗
野も山も楽しいプラン待つ五月

寝屋川市 森 茜

デリカシーのほんの少しが噛み合わぬ
はしやぎすぎた土踏まずにもお灸する
腰いたみ行書体になり眠る
名古屋あたりで大阪弁になり帰省
ストレスを発散させている元氣

鳥取県 原 みさを

耳たぶに風うたわせて逢いに行く
二十歳を謳う茶色に髪そめて
どの枝も花芽がついていて切れぬ
清水湧く土地戦争の夢のあと
鶴帰る鶴の原っぱひろくする

羽曳野市 安芸田 泰子

椿散る音なき音を聞く独り
同情の言葉にひそむ優越感
尻餅をついて見つけたつくしんぼ
盆栽に小さい春が目覚ます
単純なところが孫と合うらしい

和歌山県 杉山 精子

むかし昔の話が好きで膝まくら
恋文を久しく書いてない小筆
十年日記また甦るあのシーン
目に見えぬ距離が二人にある会話
闇に目が慣れると虹を見失う

鳥取県 山内 芳江

着飾って見ても心は満たされぬ
神前の誓い少しずつ忘れ
晴着など無いが心に着る錦
渦を巻く心静める般若経
人間が気休めをする厄払い

羽曳野市 麻野 幽玄

長電話 受けてる方がよく喋り
手を握り手を振り別れ惜しみたり
かきもちの乾くを待たずもう焼かれ
通夜に行く顔を作り美容院
嵯峨野路は墨絵に暮れる春の雪

鳥取市 岸 本 宏 章

降り続く雪が大地を黙らせる
鶯のブライド高い枝で鳴く
百花咲く春へ万歳したくなる

逆風に耐えた節目が逞しい
土壇場を乗り切る力溜めておく

河内長野市 大 西 文 次

連れ立って素足嬉しい宿の下駄
酒出ると解り文句を引つ込める

春うらら壁画美人に会いに行く
ペテランの余裕 見て見ぬ振りをする

八尾市 村 上 ミツ子

もう一つからだがあれば昼寝する
貧乏の味を楽しむゆとりもつ

泣いている絵馬にさくらの散りかかる
筋の通った理屈ぶつかり合っている

新人に空気入れ替えしてもらおう
和泉市 横 山 捷 也

店じまいの看板 年を越している
花束を抱いて千鳥足が行く

定年を慣れたのれんにも知らせ
父一人住むふるさとの鬼がわら

四方から更地がせまって来る住い

河内長野市 水 谷 笙 子

絵本から和音流れるお留守番(音楽入り絵本)
最中にも偏差値あった昨日 今日

朝顔の双葉の命信じたい
クラス会笑い袋を二つ三つ

今治市 村 上 久美子

円ひとつきれいに描けぬあかんたれ
訳ありへそ知らぬ顔をする情け

進退に迷うと先ずは食べて寝る
だまされた振りして返す四月馬鹿

秋田県 湊 修 水

超氷河 藁一本が見当らず
くる春に期限がむごい仮設小屋

山門に葦酒をゆるす花開く
風物詩 枝垂れ桜の匂うまち

復興をねがい励ます八重桜
成田市 斎 藤 房 子

にぎり拳の中にわたしの虹がある
帰る故郷あるから今を頑張れる

ふるさとの真心ずしり宅配便
春の画布ときめき彩を買い足して

箸袋一句したため旅つづく

和歌山市 木村親路

嫌ならば帰っておいでと嫁に出し

花粉症 一番先に春を知る

幾山河越えて夫婦の顔になる

口紅を誰が引いたか石地藏

暴力も登校拒否もない校歌

河内長野市 木太久 正一

春うらら妻と駄弁古里へ

津和野路は温かった人も気も

旅に出てローカル線で伸ばす足

娘と孫を迎え黄金週間に

菜園の六月畝は賑やかに

鳥取市 福永ひかり

笑い声している方へ寄って行く

子を守る時は鬼にも蛇にもなる

小姑を味方 外堀埋めておく

妻の首 横に振ることだつてある

美味しいものいつも最後に取って置く

尼崎市 的場十四郎

怖いのは妻が無口になったとき

希望もつ男の顔は燃えている

孫の住む階段だけは苦にならず

さりげなく触れて本音を確かめる

春うらら老いの泉も湧いてくる

八尾市 大内朝子

雨の日は花柄の傘パツと差す

息災なからだで春と手をつなぐ

しあわせな火種ふたりに囲む春

シンプルなフアッション個性ひからせる

白米を研ぐしあわせを忘れてる

大阪市 川内 叭笑

肩書きが一人歩きの下駄を履く

世の中をまーるく生きる処世術

身を案じ金釘文字も添えてあり

プロ野球 野茂 イチローで盛り上がり

いじめられ悔しさバネに強く生き

富田林市 藤田泰子

楽天家の土筆ん坊に春の雪

遊び相手 犬から猫に宗旨変え

焼肉は桜の花に似合わない

レッツダンス足が覚えていたタンゴ

ここからがほんとの夫婦下り坂

今治市 中村好恵

それなりの理解度でよむ般若経

音立てて落ちる椿の自己主張

大げさなギブス転んだとも言えず

席ゆずる若者の眉さわやかに

住専の魑魅魍魎のおぞましき

高知県 百田 幸

豊かさの実感はない現代っ子
ライバルの上手な口に気をもめる
願ってもない縁談と親は言う

奥の間に愛着があり住み慣れる

愛媛県 宮本末子

研修と言う名で集う花の下

善人の扉はいつも半開き

飛び越えた溝にも解けぬわかまり

風舞うて春は菜種の色となる

和歌山市 木村初子

春らんまん蝶花に酔い蜜に酔い

ひとり来て野辺の地蔵と日向ぼこ

もう会えぬ友かも知れぬ喜寿の宴(クラス会)

ハロー母さん地球の裏からこんにちは(長女オスロ市在住)

兵庫県 円増純子

ある時はやさしくある日怖い山

優しさに慣れて謀叛を考える

太陽のやさしさマント脱ぎました

屋根の上ペンペン草の嘆き聞く

伊丹市 榎谷郁子

全壊の我が家を夢が建て直す

我が更地 物言いたげに草芽吹く

受験生 無理な願いを絵馬に書く

ワープロで絵馬整理する天神様

豊中市 石川 勝

齡の順には死なぬこの世はあみだくじ
あすを見るメガネをかけて旅に出る
かねも出来た愛想笑いはもうやめた

手の鳴る方へ行かない鬼で生き延びる

横浜 金森徳三

真冬日の石焼いもの声とおる

平成を昭和で通し指を折り

さぎ草を植え替え妻と夏を待つ

意味解るお経で成仏させて欲し

出雲市 園山 かおる

桜咲く孫が歩幅をまた広げ

豆の蔓 空へ大志の夢抱く

角砂糖 心安らぐように溶け

出しゃばりの釘は抜かずに打っておく

和歌山市 古久保 和子

犬の名も記入しておく家族欄

おしゃべりとおやつ一緒にできる口

本物の寿司屋に行ったことがない

怒ったら字まで四角い日記帳

八尾市 鷺見 章

人の愚や未だ戦いの火花散る

春四月までには捨てるぞ車椅子

インパクト河内訛りをブチかます

医の梯子するよな日々の車椅子

鳥取市 倉益一 瑤

グッドバイ気ままな旅に出た亡父よ

浪花節愛した亡父の血が流れ

雪しんしん亡父が熱燗飲みに来る

荒んだ胸へ春雷亡父の一喝か

羽曳野市 徳山みつこ

全自動それから洗濯好きになる

旅の虫なだめて病父の爪を切る

楽勝と思う相手の粘り腰

恐妻家ときいて親しみ湧いてくる

和歌山市 津村武春

捨て切れぬ思いで溜まる粗大ゴミ

恋実るまでは女のしおらしさ

つばみにもあつた蝶との淡い恋

肝臓が怒り出して二日酔い

尼崎市 松下比ろ志

木々の葉も輪廻転生春の風

離流し蒼き潮騒聞くばかり

目覚しも睡魔をあやすだけの春

沈む陽の沈む光に明日を問う

十和田市 阿部喜久江

身だしなみまだ確かなり喜寿の母

渡る世に人の顔した鬼が居る

ストレスが脱毛症のもとになり

頂上に立てば孤独が迫りくる

島根県 三代朝子

降りそそぐ春陽に若芽背伸びする

春うららスキップしてる母子連れ

逢いたいと華やぐ声も春の彩

それからの先が聞きたい日が暮れる

兵庫県 仲井素水

十字架を負うて傘寿の坂陰し

妻命日 太いロウソク立てました

仕来りが世代で変る過疎の里

七曲りしてから人生見えて来る

寝屋川市 後藤黎之助

縦社会からんだ糸はまだ解けぬ

同じ地図 迷わぬ人と迷う人

啓蟄にたまたま孫が這い出した

方言が友をみつけて旨い酒

交野市 山川日出子

いつもより品よく歩く御所の庭

あちこちの訛りとび交う御所の庭

広島島の杓文字も泣いた準優勝

飴一ついだいてからお友達

岸和田市 磯崎弘象

住専へ地価統落のボディープロー

相続税 目白御殿も分割化

四季報は買ったが株はよう買わぬ

長鳴が居るとまわりが暖かい

富田林市 中井アキ

異状なし祝杯あげるほどでなし
春の彩あんずの花に逢いたくて
亡き夫がだんだん偉くなってゆく
傷心に飴ひとつぶが温かい

豊中市 上田圭津子

日溜りの小犬の夢も桜色

見物はさる一匹の山桜

有頂天になって挫折がついてくる

病む犬に粥たく妻を妬く夫

和歌山県 尾田綾子

金婚へ続く空気が澄んでいる

触れるもの信じた蔓を裏切れぬ

春眠へ甘えられない朝の靴

平成の世も高々と泳ぐ鯉

福岡市 井崎ミサ子

ひと休みして人心地取りもどす

長電話トイレだからとやっと切れ

映画館となりの夫も涙ふき

ねえあなた写真は素直に語りかけ

東大阪市 谷口義

駅前のビルに移って暇になり

裏のビル台風よけと思ってる

旅帰りの隣の猫が家に居る

旅の間に儲けそこねたらしい株

大阪市 川久保睦子

一目惚れ母ちゃん居ることつい忘れ
てにをはが抜けたまんまの娘の手紙
突然のリストラ余白埋められず
子が巣立ち老いには広い六畳間

兵庫県 北川とみ子

本腰で男勝りになる喪明け

後戻り出来ぬ子育ていまだ悔い

骨拾う箸に憎さが一寸消え

ゆっくりと参道を踏む古希の坂

熊本県 大川幸子

七転び八起きは生きてゆく証

夕焼けが明日を保証してくれる

病名を作り出してる閑な老い

内視鏡いたくない腹さぐり出す

倉吉市 山本玲子

自慢話かさされ耳が痒くなる

朝市で農婦は句を売っている

ジーパンは破れていても洒落になる

伸びる芽は盆栽作りにはむかぬ

柏市 上鈴木春枝

原色を着て大胆な自己主張

隠し味程度に軽い嘘ひとつ

言い訳のしどろもどろにある誠意

掌に包むワイングラスに吐く本音

新潟県

高野不二

聞けば聞くほど住専に腹が立ち

農外収入でやっとささえる米づくり

へそくりのたまった頃に孫の顔

温泉はいいなふるさと創生費

寝屋川市

太田藍子

旅先で内緒にしたい人に会う

テレビまで調子の悪い春のうつ

飽きるほど寝てから元氣取り戻す

大物が聞いてあきれる私利私欲

羽曳野市

芦田絢子

不足ない年齢と枢に涙する

ここだけの話を詰める壺を買う

無神論も乗せて団参のバスが着く

ゴメンネでコーヒー代の借りが済み

鳥取県

山本正光

目立ちたい男さか立ちくりかえす

何はとも保険が満期飲みにする

桜咲く頃はそわそわして困る

上げ潮にのると天から矢が降りる

鳥取市

徳田ひろ子

父の死をあつけらかんと見てしまふ

神ほとけあったと思う朝がくる

B型のせいかなまんがな暮しする

M寸のわたし友達がいったい

和歌山市

吉村さち子

恥かかぬ程度で並みののし袋

足もとにある幸せが掴めない

やわらかな耳に春雷突きささり

真っ直ぐに生きて来たから怖気ない

寝屋川市

坂上高栄

まあまあ返事が返る大阪弁

踏まれても草 草なりの花が咲き

友情の献血命の灯を繋ぐ

飾る物ないが笑顔と片えくぼ

静岡市

増田扶美

入園児スクラサイトとスキップで

旅終わり余韻の中で番茶くむ

名も告げず去った親切胸にしみ

雨の日は雨の仕事のあった母(母の忌に)

高知市

細木子龍

初デートはりまや橋は避けて路地

立ち読みの客へ二度目の咳払い

手渡しの温もり残す手話の指

バーゲンで気ままな無駄を買って漁り

大阪市

中田あい子

毒ぐもは帰化するつもり冬をこす

春宵の病室 子じまん 孫じまん

明石より釘煮とどいて春の膳

白寿老 妥協三分に自我七分

大阪市 一本 勇 太

ポシエットに稚氣持ち歩く八十路坂
両刃の剣 妻がいつしか身につける
あと味の悪さ良心との対話
競り勝った椅子に味方を見失う

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

不作法なコギヤル車中の長電話
インターネット領くものの判らない
不精髭なのに手入れを褒められる
車椅子乗っても老母は出湯好き

兵庫県 中 野 とよ子

振り出しに戻る計画積木積む
振り出しに戻って話す友がいる
問題をかかえることも生き甲斐か
青空が広がる祈りの掌の中に

熊本県 増 田 一 乗

それまでは元気でいたい医者通い
九十五で社長 恩師老い知らず
入社式 不況無縁の晴れ姿
百武すい星ものすご長い尾を引いて

倉敷市 家 守 政 子

夫臥して心を耕す趣味の道
懐の寒さこらえて看病す
病む夫に歩幅合せて散歩する
介護する妻を怒鳴りて一人ぼっち

高槻市 芦 田 静 江

高御座今年よばれる春の贅
築地堀 御苑の桜みてあきず
炎えて春 老いのキャンパス自負がある
産土の水に余生の明日貰う

唐津市 宗 弘

目の色のどこか澄んでるホームレス
お地蔵の酒も吞まれる桜狩り
余生とは言うてはおれぬ借りがあ
包丁のリズムに妻の心理学

大阪市 川 原 章 久

どぶ板の暮らしのリズムない団地
ええ格好薄着四月の風邪もらい
つんつるてん浴衣に髪がまだ伸びぬ
後悔は後の祭りの土俵際

和歌山市 水 田 秀 男

歯車がずれて走ってきた日本
模索して模索しながら虹を追う
何もかも捨てればアヒル空を飛ぶ
しがらみを逃れて座禅くんでいる

今治市 渡 邊 伊津志

足音を隠す気はない白い砂
生き方の中に未来が生きている
再会の海は昔の色でなし
偏差値の海で揉まれて来た自信

父さんと母さんの矢印が違つてる
結局は妻の筋書通り生き
包装が破れて本音が覗いてる
芽を出さぬなにが不服か花の種

高槻市 傍島克治

罪ひとつ償うだけの時間ある
北むきのキツチン女を強くする
いい話聞いてる猫の目が細い
仏様 嘘一つだけゆるし乞う

米子市 小塩智加恵

羽根ふとん鳥の数などふと思い
靴音を聞いて天ぷら揚げはじめ
桜散る庭で先生泣いてくれ
原発の事故あるまでの安全度

静岡市 大村正雄

昔はとつい愚痴になる彼岸花
体型が流行服を拒絶する
いつの世も税木簡がでる遺跡
不思議なり古い記憶が冴えてくる

泉佐野市 稲葉洋

かくし味教えて主婦の座を譲る
言い訳は眼鏡を拭いてからにする
まっとうに生きて周囲にうとまれる
ほどほどに折れて夫婦の手の温み

兵庫県 西山八重子

残雪を踏んで岩魚に会いに行く
筍に木の芽が春の彩を添え
土筆摘む園児に春の風やさし
孫たちの背が母さんを超えて伸び

愛媛県 安野案山子

一粒が鉢いっぱいの花をつけ
嫁に来てそれから休みなしの妻
割り勘にすると二次会から消える
愛妻が派手なティーシャツ着せたがる

東大阪市 北村賢子

ほめ言葉一つで努力報われる
幾山河越えて寄り添う共しらが
励ましの言葉明日も生きられる
花冷えにつぼみ咲こうか咲くまいか

羽曳野市 山本たけし

来年はどう咲くだろう寒椿
チマチヨゴリ彩鮮やかに春を着て
山草が根付きほころぶ老父の顔
遊び知り人間ちよつと出来ました

倉吉市 田中八太朗

茶柱が立って良いこと期待する
ウサ晴らしお金のかかることばかり
パチンコ屋に時々トイレ借りに行く
百薬の長を飲み過ぎ入院す

吹田市 西岡 豊

情の深さだれにも負けん島育ち

孫五つ根掘り葉掘りの好奇心

星の下歩幅合わせて遠回り

橿原市 西本 保夫

気心の知れるお見舞なら受ける

仏さんのようなお人がだまされる

老いらくの恋はあつさり好きと言う

米子市 猪森 スミエ

車窓より緑の舞台早回り

天国の道 蓮根の穴に聞く

万歩計一步踏みだす今日が明け

高槻市 執行 稲子

八等身に出会うといけずしたくなる

一度だけ傍に座ってみたい彼

モノクロの派手さに負けた赤いシャツ

鳥取市 植田 一京

何の芽かわからぬ芽だが水をやる

無駄でよい無器用でよい愛を積む

恋の目で測ればみんな美しい

阪南市 正橋 正

ハンドルの遊びゆとりがある走り

追い越されようが平常心で往く

老妻はラストラリーのナビゲーター

東大阪市 今岡 貞人

古い義理 足掬われて目がさめる

七人の敵に身内が一人いる

決心が顔を合わせてから崩れ

河内長野市 妹背 尽呂久

寝言癖ついに尻尾をつかまれる

職安でバイトをしてる古い師

莫大な遺産が抱え込む火種

和歌山市 山根 めぐみ

まだ女 博多の帯のきしむ音

春の彩モコモコモコと気がはやる

直視する夕焼小焼軽い飢え

米子市 永井 三津子

白髪抜く母の若い日聞きながら

亡夫へと分からぬ経を今朝も読む

思うように動ける体有り難い

箕面市 木村 天弘

渡米前 関空港で先ず迷う

別姓で夢まで別に追う夫婦

破られる定めをもった花名刺

東大阪市 松山 隆

組板に男を刻む春の音

仏様の頬に似てくる紅木蓮

よい夢を見たさにこりぬ宝くじ

愛媛県 中居善信

矢面に立てる勇気を褒めなくちゃ

空のところで生きたいものと手を合やす

ほととけば庭木は天に伸びたがる

松江市 寺本明子

句帳手に私を探す旅に出る

コーヒーの香りで寝坊起きてくる

イカ焼きの匂い岬に春の風

海南市 谷口義男

意地見せてまさかの時に強い妻

反発をし合う親子の時代ズレ

寝た切りの人も含んだ長寿国

大阪市 池田一男

木々新緑 精一杯の自己主張

正論を吐けば会議が冷えてくる

どの風に乗ろうか鯉の思案顔

尼崎市 長浜澄子

悪役もチャンプもないカゴメの輪

一坪の庭がこころの棘を抜く

輝いていた日を思う父の靴

弘前市 櫻庭順三

怖い雪だったとつらら泣き笑い

虎落笛ひゅうひゅうびゅうと哭いている

啓蟄とにつこり笑う路の臺

唐津市 福島紀一

鳥籠の目白に居心地きいて見る

危ない橋渡る勇気今はない

ぼたん花の蕾に胸をふくらます

宝塚市 黒台伊佐武

花冷えに一分二分咲き通り抜け

とりたてて目出度くもなし賀の祝い

散る花は悲しくもあり美しき

岸和田市 不破仁緑

猫よけのボトル飛び越す発情期

豪快な笑い信じて従いてゆく

泣き笑い済ませた空びん並んでる

島根県 槻谷仲子

カスミ草そえて仏だん春らしく

街の中スター気取りの赤い服

箱庭の葱が吹立ち春を知る

大阪市 尾崎黄紅

制服に付いたまじめも着せられる

齢のこと言わん話の酒旨い

おとなりの奥さんの名を知らなんだ

鳥取市 津村静枝

気楽さのひとり住いを哀れがり

腹割って見せたい想い母ごころ

潮引いて余韻を胸に皿洗う

鳥取県 山本 益子
不景気か案山子のように売り子立つ

丸顔はサバを読むのに都合よい
労働のあかし年金嗅いでみる

和歌山県 中後 清史

四捨五入されたら俺の首が飛ぶ

恥じらいを捨てた気風のいい女

目を入れたダルマ早くもけつまずく

千葉県 大川 晩翠

雨の日も健康器具でウォーキング

プレゼントハガキ一枚夢を見る

ごみ捨て場ここが未来の副都心

出雲県 梅 ミツエ

政界はうそと本音でゆれている

母の膝叱られながらまたすわる

芍薬が咲く度ごとに亡母を思う

滋賀県 中 宗明

人形のように初孫言いふらす

色男 耳鼻口にピアスする

復興の笑顔が戻る鐘の音

鳥取県 吉田 孔美子

鳥が来ぬ朱の実そのまんま春だ

はめられた二の矢が継げぬ粗悪品

解らないからきつと芸術性高い

枚方市 二宮 紫鳳
次代へと嫁に継がせる母の味

退きぎわの見つからぬまま定年に
スキヤンダル渦中であって気がつかぬ

和歌山県 中村 君枝

ふるえてた父の一喝もう飛ばぬ

主導権 妻が握って波しずか

ああ余生これからわたし磨かねば

今治市 野村 清美

凜と咲く水仙生れつきのもの

寝る時に気付く釦の掛け違い

変り種ぶつきらぼうの親思い

鳥取市 山宮 愛恵

偏差値の真ん中辺で迷いぬく

こつこつと胸で生きてる父の音

炎天に堪えた野良着に礼を言う

大山市 早川 盛夫

言葉など要らぬ夫婦にある間合い

困った子困った子だと自慢の子

獅子舞の口に手の出るのし袋

鳥取市 岸本 孝子

新調の服が先頭行きたがる

気に染まぬ言葉そっくり返します

弓に矢をたがえて的を見失う

鳥取市 石上悦子

折り紙にあやとりどれも夫に負け
不足した薬やっぱり飲みすぎた

流行のおやつ召しませ仏様

唐津市 岩崎 實

言わぬだけその本能で生きている

それとなく掴みかけてる筆の先

一点の大ききゲームの陣太鼓

横浜市 荒井 広和

リストラの貨車は支線に押し込まれ

歳を取るたびに我慢を強いられる

形勢が不利で涙と黙秘権

岡山県 土居 ひでの

タンポポの風が後押すランドセル

背信もちょっぴり覗く言葉尻

開発と言う名で森がひとつ消え

枚方市 森 本節子

助走ばかりつづけて終わる一生か

暮れなずむ春の日永を持てあます

すいえんの美形見上げる水間の塔（水間寺にて）

羽曳野市 川 田 晋

古本の気になる旧い仮名遣い

親の背の丸さ目につく里帰り

煙草やめ酒も止めたと寂しそう

八尾市 神原 まさと

生真面目で通り姿勢がくずされず

料亭の味を器が引き立てる

おみやげに選ぶ減塩ローカロリー

兵庫県 森脇 和子

耳よりな話運んだ春の風

ペダル踏む足の軽さよ春たしか

姫鏡 女の素顔へ打ちとける

大阪府 澤田 和重

悪友の情けが光る人間味

どん底に落とされ自分みえてくる

優しさが罪です好きになつてくる

米子市 足立 由美子

前頭葉いつも未来が住んでいる

息抜きをする穴ひとつ開けておく

大海に出るまで妥協せずにおく

八尾市 平川 幸枝

同じ味作れぬ妻の目分量

陽の匂い球根どもが動き出す

母の日の家族団らん孫に酔う

寝屋川市 瀧 本 八十八

あったかい大阪弁で胸算用

大げさで素朴な仕ぐさ壬生狂言

いたずらな煩惱消すや遍路笠

鳥取市 山口 しげる

停年へ奥義極めたかくし芸
白鳥と信じて飛んだ時もある
住専へごまめの抵抗預金下げ

横浜市 清水 潮華

薬局で水を貰った風邪薬
霊園の桜に永遠の住居決め
散るすべを知らず造花の褪せたまま

大阪府 奥野 義夫

偶然に見せかけておく誘い水
おんな四十この十年は早かった
辛抱もこれが限度と飛ぶヒューズ

北海道 中里 つね一

生あくび隣の客がつられてる
行間に私の恋をあそばせる
雪あかり北国だけにあるロマン

島根県 福岡 博利

さざんかが紅をこぼして訴える
旧道に幼いころの足跡が
ぎつちらこ この櫓に合わす妻がおり

島根県 松本 聖子

こんなはずでなかった日々に立ちむかい
この糸が切れたら私は狂うかも
片意地を突っぱり続け肩がこり

松江市 小西 素子

片隅は座り心地のよい所
陽は真上 言いたい事は皆忘れ
好きだった幼い時の珈琲糖

神戸市 向井 泰子

ものを縫うかたちに老いし亡母わたし
落ちこぼれやがて芽の出る風が吹く
無料バス動物園でよく遊び

兵庫県 西井 つや子

嫁ばかり褒めて出番のない姑
熱い茶の話は昔の日に戻る
氣くばりの出来るゆとりの温かさ

静岡市 三浦 つね

トンネルを出ると不思議に安堵感
蝦蟇口に今日の機嫌を入れておく
踏まれても起きる雑草なりきれず

鳥取市 藤 ふうこ

倅せは心許せる友がある
空蒼しもっと素直に生きて行こ
乾杯とあげた腕に闘志秘め

八尾市 村上 剛治

言わないでおいでやるのも愛だろう
母猫の子猫を守るその気迫
両の手を包む恩師の掌が温い

兵庫県 安達 厚

いいことも続くとちよつと怖くなり
朝ご飯おいしく今日も元気です

義理チョコの代わりと長い電話くる

寝屋川市 籠島 恵子

甘口に酔ってしまった花の下

致死量はとくに越えた耐えている

雲行きを睨んでばかりスケジュール

大阪市 福岡 雅子

花吹雪ひとひらとなり白昼夢

人生の花も幾たび長寿国

人生の三叉路あみだ籤に似て

唐津市 山門 幸夫

満開の桜が似合う甲子園

野仏の転居先ない村おこし

うなずいてくれぬ娘がいて困る

唐津市 山門 タミ

株分けて余った苗がよく育ち

まだ老いず心にバラを咲かせてる

この小石その小石にもつまずいた

茨木市 久保田 恵美子

人の死を長々かけて立ち話

おぼろ月 古墳の軒きこえそう

はじめてのパート修業に出たつもり

熊本市 北川 一進

三代目やつと成人式の顔
稿柄が揃う本番もう間近

趣味一つ書いて何時もの年賀来る

兵庫県 大谷 幸次郎

襟元に流行のぞかせ野良仕事

鬼瓦むかし栄えた屋根に哭く

ハミングとカレーの匂い戯れる

富田林市 山原 昭水

自然が好き野鳥と遊ぶ大和川

四国路の宿でなつかし河内弁

口ほどに足が進まぬ歩く会

大阪市 杉澤 汀

烏骨鶏 貌みただけで効いてくる

あれからはおまけの命というものの

ローン済み猫の額の庭いじる

横浜市 保田 絹子

ひと刺しのあからさまなる誉めことば

残り火の炎を立てる春の風

一呼吸待てない性を悔やんでる

豊中市 岸田 知香子

縄電車 終点のない山手線

百武のすい星光る春の宵

芽吹く木々 戸惑い見せる春風

和歌山県 藤井春子

原点に戻して見よういじめの芽
肩書きがとれると相手風いどくる
ガラス張り波の怖さを娘は知らず

池田市 木村一笛

野良犬と懇ろになるボチの恋
口車軽く乗ってるええ話
ほめ言葉 嘘を承知で聞いている

富山県 増田紗弓

苗が好き雑草も好き混んだ庭
それなりの励ましくれる鬼の面
はたるいか漁港に春を呼んでくる

鳥取市 西村半畳

入試すみやと普段の家になる
木喰が彫れば椿木が仏さま
くやしいがいつも鳥が先に食べ

唐津市 浜本治幸

誰にでも尻尾振ってる寺の犬
喜寿間近まだまだ夢は捨て難い
長電話冷めたみそ汁温める

日立市 加藤権悟

不機嫌な時もあります夫婦箸
豪快に笑う男の空財布
ノルマ達成 五時から男風になる

富田林市 欄 智久

病院で待つ忍耐を養えり
徳儀に助けられてる勇み足
花冷えや亡父の遺品整理する

寝屋川市 太田とし子

鯛の刺身 今日を買う気でいわし買う
だあれにも媚は売らない改札機
切餅も焼けば角までやわらかい

沖繩県 杉谷一栄

壊れそうガラスの花をいとおしむ
傘寿見え急に長生きありがたい
家族って老若男女いて楽し

和歌山市 松元三九

虫食わぬ野菜なんかは旨くない
横着な男であるが程がよい
機転きき過ぎて迷惑かけている

唐津市 松本圭

縄張りを必死に守る老いた犬
柱時計 止まったままの資料館
自分の子叱らぬ親をにらみつけ

岡山市 山磨行子

開発へ頭を下げるショベルカー
人様の花が欲しくて花をほめ
散る花を両掌にうけて過疎に住み

大阪市 三浦 千津子

鳥取市 杉本 孝男

桶のたがはずれたような妻の留守
まだ欲があり青い鳥追うている
すんなりと妥協が出来ぬ力瘤

松江市 佐野 木みえ

生かされて気楽な風に乗ってみる
枯葉ふむ互いの傷口ふれぬよう
気ままな身バラは垣根の内に咲き

宝塚市 飯西 ミサヲ

子は巢立ち頼りの犬も老いばれて
口紅の赤いだけではもう古い
同窓会 威張るじやないぞ同い年

出雲市 加藤 スズコ

もてなしをぼんやりしてて出し忘れ
達磨の目 孫の吉報待つ絵筆
早春の伊吹の山に綿帽子

松江市 松本 知恵子

わたくしのプラス思考が増す春だ
意見は問われぬ内堀の水が澄む
白菜も小花咲かせて春の風

岡山市 中嶋 千恵子

好きだとは言えず別れた始発駅
人情が通うと弾む太い指
花鋏 四季の匂いを知りつくし

抜きなさい肩の力が邪魔をする
約束をしてから夜も眠れない
孫あやす顔は減多に見せぬ笑み

静岡市 小木 久子

無人駅 善意の傘が戻らない
面白い顔だからすぐ覚えられ
ポケットにいつも忍ばせてる不満

島根県 武島 ちよえ

疾しくはないが斜めに傘をさす
磯の香を残し行商バスを降り
だんまりが続くと酸素うすくなる

鳥取県 国森 武子

来年の幸を信じて生きてゆく
すぐにごりすぐ澄む小川いとおしむ
命綱干す妻の背はくつろいで

八尾市 山本 宏

うぐいすも声凍らせる春の雪
遮断機のない踏切りは安心だ
消費税一円玉が光り出す

高槻市 乙倉 武史

ガム噛めぬ義歯の哀れが身に染みる
土地神話かわりのない人とする
温泉の旅から帰り我家の湯

鳴門市 八木芳水
草萌える自然淘汰を内に持つ

姫路市 服部一典
目に青葉 昔の人の能弁よ

万歩計使わずにすむ農作業
住専の流れを世論監視する

島根県 岩田三和

読みふける紫式部日記など
天井に煤けた俵つる農家

大阪市 今西静子

立ち読みに遠慮はしないちり払い
旅先の出合いに友が増えてゆく

大阪市 鈴木トヨ子

たどたどしい孫の絵こころ伝えてる
花一輪 空気を変える仮設部屋

大阪市 和田和風

バス旅行 耳はカラオケアレルギー
ホームレス凍死 記事にもならぬ国

大阪市 平井露芳

中年がこけちゃいました自転車で
喫茶店やたら女が出す紫煙

尾宮弘治

頭だけ司馬遼太郎似の白髪
アルプスの雪掬えそう露天風呂

和歌山県 上岡正直
今日一日いいことあって酒旨し

島根県 谷岡婦美

晴れた日に光る湖 鴨の群
春かすみ遠山見えず寺の鐘

徳島県 安宅美代子

悟り得て錆びたナイフがよく光り
めいめいに自分を埋めるゴミを出し

大阪市 島崎孝一

食べ歩きだけ生き甲斐と古稀の妻
住専で目覚めた市民選挙待ち

和歌山県 村中悦男

宿題を電話で孫が教え合い
複雑な気持ちにさせる古希祝

尼崎市 野瀬昌子

蜜蜂の羽音に触れる春の風
息子がくれた花はやさしさ秘めている

尼崎市 河津正治

言い訳を一言多く聞く寒さ
真実をじっと見ていた青い月

鳥取県 権代康女

極楽に行ける善意を積み重ね
意気が合う二人で笑いこけている

和歌山市 福重美子

老夫婦 自然に歩幅合つてくる
足音をボチも一緒に聞きわけける

尼崎市 森安夢之助

朝の挨拶して嫁姑仲がいい
占いに揺れる心に隙がある

鳥取県 奥田信敬

夕餉する老妻の愚痴 今日も出る
経の僧 白足袋裏が破けてる

鳥取市 中澤正恵

はいはいとおだてに弱い腰をもち
心配を好んでしてる損な質

横浜市 菊地政勝

救急車すすめられない乗り心地
良くなると納得させて注射待つ

尼崎市 中澤向西

母招くここは気楽と動かない
希望校外れて少年煙草吸う

河内長野市 印藤智子

名曲を聴けばあくびも上品に
子にかけた望みもバブルと共に消え

東京都 瀬戸きん子

面倒見良すぎ自分が片付かず
バースデー自分で赤飯買って来る

神戸市 船津とみ子

珈琲を飲む習慣に戻るなり
一人旅も二泊三日が物足りぬ

松江市 松浦登志子

ひと言を飲み干すようにコップ酒
昔ならどうでもよかった島ひとつ

泉佐野市 大工静子

親真似て何でも供える孫がいる
鈴なりの金柑に耳打ちされる

香川県 向山治延

山裾の我家もうないダムの月
嫁がせて雪舞う日暮れ娘を思い

富田林市 大橋鐘造

これからのシナリオがない白い画布
頂点に立つて空気の薄さ知る

八尾市 奥田明

備忘録つけることさえ忘れてた
やっと腹出れば瘦せろと医者言う

岸和田市 亀井皎月

ありふれた俵せだけが本物で
声高に啼いているのはほととぎす

鳥取市 福田登美

背一つ叩けば通じる友がいる
山の湯に美し過ぎる花のいろ

尼崎市 軸丸勝巳

メカ音痴 説明書は誰のもの
いかなごのくぎ煮お代り飯が増え

大阪市 亀井円女

足踏みの春も漸く走り出す

ロックにジャズも聞いて孫とも合う話

鳥取市 坂田和歌子

昼の酒うとうとキツネ雨になる

浜茄子へ誘われ海の愚痴を聴く

池田市 藤井計光

新調の背広へ弾む入社式

夕焼けは赤い投網を打ったよう

唐津市 山口ふさ子

同じこと繰り返し話す姑老いし

増え過ぎた植木わたしを縛り出し

岡山市 清水金太郎

高くとも嬉しい孫のアンマ代

若者に昔のギャグが通じない

高知県 桑名孝雄

百武すい星 田舎の空が美しい

小人閑居 不善出来ないままでいる

鳥取県 高尾京

ひっそりと葉蘭の花芽が庭の隅

さだめにはあらず被災の苦の月日

試されているんだ泣いてなるものか
鉛筆の詫び状ほどに詫びてない

旭川市 朝倉大柏

愛犬は酔うた主を無視してる

年毎に心が寒い長い冬

唐津市 江川青琴

里帰り良い話だけ土産籠

幸せはおいしい酒と妻の膳

高槻市 江原秀夫

生活の匂いをさせぬ共稼ぎ

思い切り燃えたら受けてくれますか

和歌山市 森口美羽

ドア越しの音生きてあり回復期

辛夷咲き辛夷指さす空を見る

米子市 林風子

ほめられた子供自信が湧いてくる

散らかった部屋がやっぱり落ち着ける

鳥取市 田中友子

無駄遣いしていませんと亡妻に言う

議事進行 友の冗句が邪魔をする

大阪市 中井正秀

逆風の中でじつくり腰をすえ

春一番ピチピチ童話売りに来る

鳥取県 橋本多哥由

定年の妻にも渡す感謝状

岡山市 藤原一平

荷物にはなるまい今日も竹を踏む

鳥取市 富山雄幸

育苗へ母のやさしい培養土

我が人生 曇り後晴れあればよし

島根県 森茂美

教室に匂い残して子ら巣立つ

畑から妻は帰らず日脚伸ぶ

岡山県 富坂志重

幸せな音が階段おりて来る

しのび泣き私の上だけ雨が降る

唐津市 市丸晴子

お浄土の法話 身近なものと聞く

減点法で夫を見てる倦怠期

唐津市 林公一朗

住専処理 歴史に残す座り込み

日本の平和を信じ桜散る

大阪市 三品征子

桜散り一段落の毛馬の土手

マネキンも歩いてみたい朧月

福岡県 本田忠男

故郷を捨てる旅立ち無人駅

囲い出て芽を吹く春を知った芋

目覚ましは妻の大きな声ひとつ

伊丹市 延寿庵野鶴

角取れてエゴがなくなる丸い墨

豊中市 湯田敦子

窓を開け写真に見せる春の雪

業績の力は縁の下にあり

岡山県 国米きくゑ

いきいきと過ぐす余生の灯を炎やす

爽やかな新人が来て花が咲き

横浜市 斉藤よし一

ライバルを褒めて梯子を取り外し

すり抜けて行く風船の自己主張

寝屋川市 井上すみれ

ワンランク落して無事の年の功

親切を貰って今日も無事終わる

札幌市 三浦強一

スキヤンダル耳活き活きと寄ってくる

ライバルにぴったり着いている余裕

和歌山市 楠見章子

連休は澄んだ空気を浴びに行く

暖かくなったら行こかそれつきり

横浜市 丹下智洋子

嘘多い女の描く細い眉

春うらら昼寝の口が少しあき

横浜市 後藤早智
春そこに雪持ち上げて福寿草
就職が決まり息子に春が来る

鳥取市 森明美
6Bの芯が怒りを許さない

雨降れば雨のおしゃれで逢いに行く

八尾市 生嶋ますみ

ささやかな幸せ煮込むシチュー鍋
かわいい種抱いてタンポポ風に乗る

鳥取県 橋谷静江

雰囲気が良くて持ち歌みな歌う

一歩ずつそれぞれの道進む孫

倉吉市 大下智子

宝くじ億取る夢をみて困る
父親は金出す役と荷物もち

香川県 田中ふみ

金に縁ないが健康を宝とし

迷わずに押せばいいのに岐路にたつ

倉吉市 山中康子

海越えた時差に電話が鳴りひびく

思春期のセーラー服で大人びる

和歌山市 和田美寿子

故里の山は大きく変身し

所得税 申告したいが所得なし

熊本県 岩切康子
桃の花 蕾のうちに差し上げる
ハイキング疲れた者は芹を摘み

羽曳野市 西村りつえ
花粉症 小さな花にしてやられ
母の日に愛を盛りこむ五目ずし

堺市 志田千代

二人三脚とうに結び目ほどこける
鬼の留守 洗濯物はよく乾き

砂川市 武田正美

そよ風が少し散歩をせよと言う

太陽がとても明るい夜勤明け

鳥取市 山本崇

栄転の車と靴がよく光る
暗い夜わが足音にふり返る

鳥取県 藤山弘子

二次会に昔話の花が咲く

白足袋に願いをこめて見合い席

静岡市 中西雅

五十年過ぎて亡夫の夢ほしい

タラちゃんはいつになったら一年生

島根県 菅田かつ子

富山から今年も風船くすり売り

菜の花が膳に乗ってるさりげなく

島根県 児玉 幸子
ピカピカの服で今日から一年生
雪割草 木陰でそーと花を付け

松江市 安食 友子
絵にしよう倒れかかった葎屋根を
幼名で呼ばれて皺が浮かれてる

松江市 浦辺 静江
雑草に急かされて咲く野水仙
休肝は以ての外と耳貸さず

西宮市 古谷 ひろ子
おだてられホップステップ足捻挫
雑草の小さき花の健気さよ

大阪市 立蔵 信子
旅に出て飽きるまで海ながめてる
スニーカーみやげ話を知っている

静岡市 佐藤 次枝
二人ずつ夜具にもぐって子沢山
面白い薬味の効いた法話聞く

和歌山県 久保 ふみえ
手の内にもそつと握らす思いやり
どの子にも惜しまず愛をやった母

藤井寺市 鴨谷 瑠美子
花だより心はどこか不安定
好きですか「はい」と答えたアンケート

鳥取市 近藤 秋星
春らんまん猫も浮かれて出たつきり
去年来た桜の下にまた集い

出雲市 浜圭 三
方言で訪ねる道を教えてる
道草を食ってきたのに成功者

大阪府 原 みえこ
合格の喜び胸に子が巣立ち
合格通知 先立つものを急かされる

兵庫県 高見 末野
在りし日の亡母の匂い沈丁花
春の旅 我が着る服を嫁に聞き

川 柳 塔 (追加)

寝屋川市 北岡 波留吉

古株に引導渡す不況風
息切れせず稼ぎ通した父の貨車
背伸びせず質素に暮す凡夫婦

羽咋市 三宅 ろ亭
荒交渉ポケットにつぶてしのばせる
冒頭に先ず笑わせて引き寄せる

五郎島の芋せめてもと子に送る

沙湖抄

小出智子選

けだものの気配を包む春の闇

蠟燭とそして私を揺する風

風呂敷が解けわがまま零れ出る

息子たちよ鶴の離陸をみにゆこう

昨日よりいい顔をして水を飲む

菜の花の黄色に染まる電話口

身の内の鶴よ 光の中に翔べ

老後のために一円玉を拾う

花屋の花はちよつと自信を持ちすぎる

昨日から真面目になった鳩時計

公園のトイレの前の雪も消え

温かい湯吞みが二つ置いてある

お世辞など言わないうちのお父さん

長いときが過ぎてしまった花結び

川にごる女の嘘を呑みこんで

二十五時影がなかなか戻らない

花ぐもり鏡の中は晴天だ

大切なことを話さぬまま訣れ

笑い声たえない部屋で眠る猫

辛口のカレーを吹いて子と同居

宝塚市 永田 暁風

和歌山市 岩本美智子

鳥取県故江原とみお

島根県 松本 文子

米子市 林 荒介

米子市 澤田 千春

鳥取県 新家 完司

大阪市 西出 楓楽

松原市 小池しげお

青森県 田中 叶

藤井寺市 田中 透太

出雲市 吉岡きみえ

出雲市 石倉美佐子

八戸市 佐治千加子

美祿市 安平次弘道

八尾市 高橋 夕花

藤井寺市 高田美代子

寝屋川市 江口 度

八尾市 生嶋ますみ

通りゃんせ昔の路地が忘れず

あと少し私の心象画をえがく

友達がつつかい棒になっている

狂えない私を森の奥へ奥へ

いつとなし仲間ができた始発駅

万葉の心も知らぬ花見酒

温室の花の嘆きを聞いている

月見草バズルの解けた夢を見た

咲くチャンスあれば咲く私のさくら

みぞおちへ届く言葉を選っている

乗り換えのできぬ切符を渡される

こよみ剥ぐその指先に嘘がある

幾度かの節目を越えて来た自信

腹の立つ時には花とはなしする

内側の灯はどなたにも覗かせぬ

鬼の面外せば治る不眠症

三面鏡磨き抜かれた古稀の部屋

株分けが咲いて里親にも電話

ぬかるみに青空湧く日じっと待つ

城下町に立つイメーজが湧いてくる

大脳はからっぽ 今日日は曜日

レモン一滴ひとりよがりのわたくしに

高窓に夜更けの月をひとりじめ

ここんとこ妙に静かな群雀

不覚にも鉛筆尖りすぎていた

たのしい夢悲しい夢もみた落花

青森市 工藤 甲吉

米子市 青戸 田鶴

大阪市 筒井 式美

富田林市 池 森子

今治市 矢野 佳雲

和歌山市 池永 正雄

西宮市 西口いわゑ

豊中市 石川 勝

芦屋市 黒田 能子

鳥取県 石谷美恵子

倉敷市 小野 克枝

砂川市 大橋 政良

鳥取県 西川 和子

鳥取県 土橋はるお

和歌山市 桜井 千秀

鳥取県 田村きみ子

寝屋川市 堀江 光子

弘前市 齊藤 劔

鳥取市 石上 悦子

米子市 金山 夕子

横浜市 川島 良子

大阪市 三浦千津子

堺市 山本 半銭

和歌山市 田中 みね

米子市 石垣 花子

岡山市 川端 柳子

種も播かずに花ばかり欲しがって

三日分まとめ書きする日記 懺悔

苔の花見つけた朝のうまいお茶

春愁や定価を割った新刊書

キューピッドの弓をも一度信じよう

輪の中で普通サイズを身にまとう

空間を大切にして永らえる

ライバルに何処まで続く青信号

花冷えがつづくロマンを温めてる

じたばたはしない行き着くところまで

春なのに私の花はまだ咲かぬ

妻でなく母でもないという部分

手放して泣ける岬がひとつある

金婚式焦げない鍋と共に生き

神さまは見えていて見ない振りなざる

慌てると写楽の戯画に叱られる

でこぼこの鍋がわたしを物語る

めぐり逢い花の疲れをハンガーに

モジリアーニの絵と淋しさから抜ける

ハッケヨイ同じ土俵の友だちだ

再来年になればなんとかめどがつく

悩む娘と二人三脚して春に

お医者さんが混んで信用されている

太陽と握手のできる園児の絵

百姓にそう簡単になれますか

コマーシャルやっぱりわたしのする

西宮市 奥田みつ子

高槻市 守先 伸子

大阪市 北 勝美

堺市 桜沢あかり

米子市 寺澤みどり

吹田市 山本希久子

今治市 越智 一水

和歌山市 木本 朱夏

八尾市 宮西 弥生

富田林市 藤田 泰子

大阪市 鍛原 千里

八尾市 村上ミツ子

鳥取市 小谷美ツ千

豊中市 江口 明光

八尾市 村上 剛治

米子市 小西 雄々

大阪市 日阪 秋子

貝塚市 池田寿美子

尼崎市 長浜 澄子

米子市 林 瑞枝

米子市 光井 玲子

寝屋川市 森 茜

和歌山市 松崎 幸子

大阪府 榎山 隆

岡山県 小林 妻子

米子市 木村富美子

一病息災 庇うた石に蹴踠く

境界線隣も六法繰っている

瓶詰め船に吃水線がない

数珠を繰る仏と心通わせて

煎餅を噛んで禁酒の孤に耐える

大切にされてる犬にない自由

仮の世は生まれながらに上中下

痕跡を残さぬように歳をとる

おかめひよつとこひと刻狂う花の下

爽やかな嘘で訣れた芦屋駅

ユーモアのある老人で受けている

ストレスを一杯溜めたスケジュール

若草よ遠くの孫の背が伸びる

責任がないと分かってから多弁

詮索はまだ脈のある愛なのか

いつまでも続くお寒いごあいさつ

癌術後十一年なり彼岸の日

雨水は気ままに流れ恵み産む

フェスティバルへ行く日のための医者通い

病床へ飾る言葉が見つからぬ

灯油一缶買い足している春の変

俺よりも先に死ぬなと見舞われる

満期まで生きた保険にある不満

両親を見てから娘気が変わり

良い方にとって忘れることにする

読み返す裏も表もセピア色

大阪市 津守 柳伸

出雲市 板垣 夢酔

海南市 三宅 保州

岡山県 山本 玉恵

今治市 月原 宵明

旭川市 朝倉 大柏

和歌山市 山田 高夫

和歌山市 古久保和子

羽曳野市 吉川 寿美

西宮市 亀岡 哲子

守口市 結城 君子

和歌山市 福重 美子

大阪市 渡部さと美

箕面市 岩津ようじ

大山市 早川 盛夫

尼崎市 春城 年代

鳥取県 高尾 京

鳥取県 谷口 次男

和歌山市 福本 英子

鳥取県 山内 芳子

西宮市 牧渕富喜子

羽曳野市 麻野 幽玄

横浜市 菱田 満秋

横浜市 長島亜希子

出雲市 竹治ちかし

寝屋川市 平松かすみ

杵つきの草餅友に父ありき
お茶でもと思うお人と目が合わぬ

学歴のない父の背に教えられ

夜桜や今年は酒を禁じられ

われ農夫土の甘さを知っている

まなざしへひよいとその気にさそわれる

落魄のころろを包む仏の手

電話口借りがあゝるのか低姿勢

登頂の望みは捨てぬ俺の靴

水っぽい味噌汁これも妻の愛

譲られて一寸淋しい席につき

この私世界に一つのオリジナル

おおい雲よー声かけているアドバルン

子の目覚めまでに作った雪だるま

幼児の瞳の色は空の色

花の前で春と冬とがこぜりあう

恋猫が音立てて水飲んでいる

花のないくらし想像でできますか

甲子園で歌えばこんないい校歌

ハイテクの冬を知らずに咲く名花

雪山で倒れた亡父の杉木立

二十四時凡夫の域を抜け切れず

マラソンの応援いつも炬燵から

辛酸をなめて味わいぶかい人

七回忌ころろにゆとり少し持ち

やんわりと気休めを吐くおんな面

神戸市 船津とみ子

鳥取市 美田 旋風

和歌山市 青枝 鉄治

八尾市 神原まさと

唐津市 浜本久仁於

八尾市 大内 朝子

今治市 中村 好恵

横濱市 後藤 早智

香川県 木村あきら

尼崎市 田辺 鹿太

熊本県 高野 宵草

大阪市 松尾柳右子

倉吉市 野口 節子

茨木市 藤井 正雄

唐津市 岩崎 實

大阪市 藤田頂留子

今治市 渡邊伊津志

八尾市 吉村 一風

鳥取県 上田 俊路

唐津市 宗 弘

岡山県 土居ひでの

和泉市 西岡 洛醉

唐津市 市丸 晴子

東大阪市 北村 賢子

枚方市 森本 節子

兵庫県 北川とみ子

合鍵を渡して北叟笑んでいる

お裾分け里の暮しもちらつかせ

ほこらしげに満腹曝すこいのぼり

控え目の紅に喪服が美しい

家計簿に明暗を見る赤と黒

腕白の中で芽生える可能性

しきたりに喜怒哀楽のからみつき

曾孫と庭の芝生に童話まく

流行を追う年金が軽すぎる

赤い服着れば心が燃えてくる

とりあえず鉛で自信をつけさせる

図に乗って言つてはならぬことを言う

最上の手相で運はこれっぽち

強引におやりなさいと風が押す

堰止めていい話聞く水温む

粉乳と母乳知ってる哺乳瓶

ふたり卒業ひとり入学文化塾

大阪府 澤田 和重

和歌山県 中後 清史

東大阪市 安永 暁子

箕面市 椎江 清芳

岸和田市 田中 文時

今治市 塩路よしみ

岡山市 井上柳五郎

岡山県 富坂 志重

鳥取県 前田 一枝

鳥取県 権代 康女

大阪市 大河未佐子

仙台市 川村 映輝

岡山県 池田 半仙

吹田市 西岡 豊

出雲市 園山かおる

東大阪市 松山 隆

鳥根県 岩田 三和

暁風さんの句。春の闇はけだものうこめきを包み込んでい

ようなと、深い思いを、氏独得の修辞がなされています。次の句

は、蠟燭を揺らす風は心を揺ると言われる。ご高齢にして、

これほどの思いを身に落ませて心象を書き続けておられる姿に敬

服するばかりです。課題吟より雑詠に固執されているのが、これ

らの作品によっても窺うことができます。美智子さんの句。自分

自身の恥ずかしい部分をこのように詠う謙虚さを見せて頂きました。

「風呂敷が解け」とはよい発見だと思えます。とみおさん

の句。突然の計報をお聞きしたのですが、この弾んだ思いは何だ

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 5月号から

瀬戸 まさよ

風みどり空気の軽さ身の軽さ

三浦 千津子

リズム感・季節感を感じます。「お母さんスキップしようよ」子供にせつかれ、一緒に跳ぶ。こんなに浮き浮きするのも久しぶり。

ブランドーの情けに溶けてゆく氷

藤田 泰子

てのひらの温みで飲むブランドー。頑なな心も温かさに触れれば素直さを取り戻すでしょう。情け・溶ける・氷の三接点の融合。

泣いたあと前より生きた目をしてる

立蔵 信子

ストレス解消には泣くのが一番。心も体もすっきりさせる妙薬―それは泣くこと。

雪のせて山を越えれば春の海

松浦 登志子

残雪の地から山一つ越えれば眩いばかりの春の光。川端康成のトンネルを抜けると雪国

：蕪村の春の海が頭に浮かびました。単身赴任いわし上手に焼けて春

石川 勝

春は人事異動の時期。もうそろそろと心は期待と不安の交錯。ま、いいか、料理もそこそこ、こなせるようになったし。

主婦業に勲章はなし終い風呂

水谷 笙子

まだまだ男性上位のお国柄。家事・雑用と主婦の仕事はきりがありません。湯船でほっとする気持ち分かります。

大地の子わが身重ねて三度見る

木太久 正一

山崎豊子原作『大地の子』の放映に日本全国泣きました。戦争の傷あとの大きさを忘れないために、この句の値打ちがあると思います。三度見るに共感を覚えました。

後輩の芽が伸びすぎて怖くなる

木村 天弘

先輩はいつもびくびく。例えばパソコン、ワープロの類もこちらより上。先輩が教える乞う事態がやってくるやも。

宇宙から見れば日本はさくらいろ

吉村 さち子

宇宙とは大きいですね。この季節、彼岸桜に始まって遅咲きの八重まで人々は花を愛で

楽しめます。さくらいろとは言いで得た妙。寝転んで野に雑草の声を聞く

池田 一男

いい気分ですね。目をつむれば天地人一体。雑草の声にひかれました。

わたくしの夢のひとつに無人島

中井 アキ

島一つ買って暮らせば涼しから。橘高薫風の句を思い出しました。沢山の夢をお持ちであろうアキさまに万歳！

呱呱の声無限の未来握りしめ

野村 清美

二十一世紀はあなたの世界。住みよい社会をどうぞお頼み申します。

無記名にすればすんなり出る答え

一本 勇太

すんなり出るのは本音。生きていく防衛本能。みんな持っています。

願い事多くて絵馬に簡条書

大西 文次

つい、あれもこれもお願ひしてしまいませ。神様お許しを。簡条書が面白いですね。

裏切りの日もあるだろう児の寝息

武田 正美

子の反抗も成長の一過程。と割り切っても淋しい。翔び立つ子に幸あれ！

尚香のむ

八木千代選

沈黙の箱に乗り込む地階まで
一度出た蟬は穴には帰れない
他人には普通の日です私の死
椿の朱 奪い尽くして知らず
アリバイはない雑踏の中にいる
美しい嘘つらぬいて地獄まで
ひと握りの塩を味方につけておく
よく軋む門扉と人の好き嫌い
許すとき許されたこと思い出す
鉦穴飛びたい空が高すぎる
四月某日何かが狂う雪景色
月の砂漠の噂話もう聞かぬ
歳時記よ少し気ままにしてごらん
働いた足 近道などしない
アドリブが負担になって来た喜劇
独りいて独りの業をもて余す
冬の森ひとつ沈めて辛夷咲く
封書の中に甘い空気が入ってた
直筆の延長線にある桜
不揃いのコロッケ中身で勝負する

西宮市 牧瀬富喜子
米子市 菅井とも子
鳥取市 石上 悦子
和歌山市 木本 朱夏
今治市 野村 京子
西宮市 奥田みつ子
米子市 寺澤みどり
和歌山市 福本 英子
鳥取県 岩崎みさ江
和歌山市 古久保和子
藤井寺市 高田美代子
島根県 松本 文子
米子市 野坂 なみ
八尾市 宮西 弥生
大阪市 三浦千津子
米子市 青戸 田鶴
和歌山市 野々 圭子
八尾市 高橋 夕花
和歌山県 小倉 アサ
横浜市 清水 潮華

憑かれたように夜更けの手紙書いている

冥土の入り口に桃源郷ありや

殺し文句口に出したら負けになる

足首をまわす総ての始発点

印籠のように手紙を抱いている

やっぱりと思う乳歯がついている

産んでくれて生まれてくれてありがとう

乾杯のカチリカチリと妥協音

嘘という空間のありなごませる

ちりちりに散って山茶花明日も咲く

猫の視線ときつちり合うてゴミを出す

雑木林をかけ抜けてくる風 噂

猿の芸うしろに深い森がある

誤解受けそう語尾はつきりときつちりと

てのひらの深い線路を走る貨車

さくらさくら紛うことなく今を生き

きれいごと盛つてあるのは浅い皿

掛け違った鉦の重み今さらに

亡母さんの場所だーれも座らせぬ

ははにつながる景色に菜の花が揺れる

つくづくと掌にのせてみる蝸牛

ビックリ箱はこわい 音立てずに開く

追い出した鬼の行き先突きとめず

関係ないとは吾気やな国のこと

散りたくて造花は首を振ってみる

唐津市 浜本 ちよ
倉敷市 小野 克枝
和歌山市 桜井 千秀
米子市 政岡日枝子
和歌山市 福井 桂香
倉吉市 野口 節子
米子市 木村富美子
熊本市 永田 俊子
西宮市 西口いわゑ
米子市 茂理 高代
富田林市 片岡智恵子
八戸市 佐治千加子
米子市 澤田 千春
尼崎市 春城 年代
米子市 林 瑞枝
和歌山市 堀畑 靖子
富田林市 藤田 泰子
大阪市 鍛原 千里
寝屋川市 坂上 高栄
寝屋川市 森 茜
米子市 林 風子
岡山県 富坂 志重
横浜市 秋元和歌子
大阪市 本間満津子
鳥取県 石谷美恵子
米子市 金山 夕子

花風 武士の二言を聞き飽きる

さくららははらきつと優しくなっている

スマートにはいかん訣れる日のふたり

交友のバランスとっている尻尾

足ぶみの花へひと声かけてやる

道化師の孤独に誰も気付かない

いやな事あとの良い事雲にのる

ぬくめ風呂どうせ自分の垢だもの

花むしろこの娘もいつか蝶になる

落し穴から青空を呼んでいる

結んで開いても一度結ぶ夢がない

菜畑に酷使した目を休ませる

哀しみを鶴が運んだロシヤより

あの人の指紋も失せた白椿

花冷えや友との電話長くなる

二十四時間一人占めして生きている

パン生地へ昨日の悔いを叩き捏ね

ジャンボです 夢が器に納まらぬ

君の声だけを頼りの視界ゼロ

偶に先手打てば路線変えられる

こんもりと森のながめや春の旅

ほんとうの顔を鏡に映される

特別な日になりそうよコンパクト

耐え抜いて母しなやかな弓に似る

水仙の凜々しさ迷いなど見せぬ

繰り返すミニとロングに惑わない

大阪市 津守 柳伸

米子市 白根 ふみ

和歌山市 宮口 克子

和歌山市 山根めぐみ

鳥取県 さえきやえ

鳥取市 小谷美ツ千

大阪市 渡部さと美

寝屋川市 岸野あやめ

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 中井 ゆき

岡山県 矢内寿恵子

枚方市 森本 節子

鳥取市 坂田和歌子

岡山県 山本 玉恵

大阪市 神夏磯典子

大阪市 日阪 秋子

横浜市 保田 絹子

倉吉市 米田 幸子

柏市 上鈴木春枝

出雲市 石倉美佐子

吹田市 栗谷 春子

寝屋川市 堀江 光子

八尾市 大内 朝子

鳥取県 西原 艶子

今治市 野村 清美

出雲市 園山多賀子

少し窓あけて世間の音も聞く

大淀に大根の花ひと咲き

飯の世でボタンのずれがままならず

風船を飛ばす黄砂の降る街で

乗り過ぎて待つてる駅を通過する

散るまでは女でいたい髪染める

お願いが多くて神に嫌われる

いい話 そつと置いてく曲がり角

煮つまった鍋に思案はまだつきず

色いろといろいろあつて薔薇の棘

私に一番似合う作業帽

豆もやし花を咲かせてやりたいな

大阪市 大河未佐子

守口市 結城 君子

今治市 村上久美子

堺市 桜沢あかり

河内長野市 植村 喜代

米子市 石垣 花子

鳥取市 植田 一京

横浜市 川島 良子

鳥取県 塔 寛子

大阪市 筒井 式美

鳥取県 西川 和子

大阪市 藤田頂留子

牧淵富喜子さんの沈黙の箱は心理を衝いています。乗り慣れて

いるエレベーターながら不思議に緊張してしまう中の空気でも

のね。それに乗る前にはらんぶも見落とすほど饒舌に立ち話など

したりして、いざ乗り込むと笑顔も消え、妙に孤独な気になりま

す。それも地階まで降りるかすかな風の動きは、まるで孤の旅立

ちです。文句なしの巻頭でした。菅井とも子さんの蟬の穴の深さ

哀しさ。人間の旅路、とくに女の一生などを考えますと、日々こ

の覚悟を反芻しつづけて暮らさねばと教えて貰うのです。改めて

言葉のいのちというものに触れました。今の時を愛しむことで、

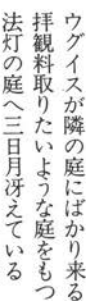
空蟬になっても悔いは無いという強さがあります。石上悦子さん

の普通の日にはあたりまえの事があたりまえに書かれて印象の

度は大きいです。判つてはいながら寂しい訣れを自分にとつても

普通の日だと思えるように念じていても、そこまで辿りつけるの

寺澤みどり選



希久子
雄々
子龍

 $\sim$

浅田隆樹選



風紋の真似は出来ない庭簾
庭付きの顔で冷やかす植木市
庭石はバブル時代の置き土産
お別れは客間の前の庭でした
焚火する庭で噂の煙立つ
ちっばけな庭も心の友になる
鹿威し静寂にリズム絶やさない
庭の隅くなく氣になれぬ 螢草
玉砂利の下からタンポポ顔を出す
深夜見る庭は不気味な顔をする
ペランダのミニガーデンも春百花
豪邸の庭に追徴税が来る
仏より花で名高い寺の庭
庭の松敷かせている三代目
一坪の庭に仏の花咲かす
使者を待つ庭の石にも水を打つ
わがままを許してくれる母の庭
石庭の石と禅問答をする
紫陽花が見事に咲いている空き家
雪月花 庭には四季の貌があり
原発の庭の桜も美しい
伸び悩みなんで知らない庭の草

(海) ひかり 久仁松 保州 俊子 ちかし 京子 照子 喬水 佳雲 帆雀
(稲) 次男 あきら 和歌山 和枝 旋風 愛論 三芳 清治 鉄栄

お隣の庭の芝生が青すぎる
庭の草萌えて野性が動き出す
お庭番のようにあなたを見張ってる
お喋りがとつてあなたも好きな庭ばうき
お隣の庭が気になる万年青の実
売って出る庭の桜の六分咲き
この庭の花で隣は気にすまい
小さいながらもレンゲ畑につづく庭

佳

しぐれても晴れても無口 苔の庭
記念樹が庭一番の顔してる
幸せな絵馬がとび立つ神の庭
素晴らしい借景 庭は飾らない
箱庭に鯉飼う池を掘っている

人

むかしからその庭石はそこにある
地 地下水をしっかり抱いている庭だ
天 庭で聞くあれば仏の息づかい
軸 風止んで庭も素顔を取り戻す

政

志重 紀一 富美代子 図美代子 あやめ 富美子 たもつ めぐみ 智加恵 寿恵子 多賀子 満秋 螢 荒介 岡日枝子

履き物が家の風景映し出し
宿の下駄ストレス捨ててくれそうだが
踊りだす慰安旅行の宿の下駄
ニ履いて過疎が都会の風に酔い
高下駄を履けば世間が広く見え
新聞を斜めに読んで靴を履く
履き慣れた靴にも似てる老いた妻
夢に描く女に下駄がよく似合い
我が娘とは思わぬ娘が履くブーツ
アルパスへ履く靴捨てて母安堵
胎動へ氣遣う低い靴を履く
ハイヒール履いて女教師転任し
ハイヒール履いて焼芋追っかける
マンションで下駄履く響きお正月
入学へ靴を畳で履いてみる
小さい足自分で履いたみぎひだり
玄関に履物散らし孫が来た
座敷まで十歩スリッパ履かされる
婿が履く靴を磨いて居候
下駄履きのままで遊びにいらっしやい
突っ掛けで行ける小さな店がある

善隆 照満悦清幸正一四さち洞山ひ(南)権宏子清孝次
信隆 子秋男美郎雄風郎子庵久で洋悟章龍史子男

もぐら叩きにあうから低い靴を履く

靴履いてから行く先を考える

履物を揃える小さな手の微笑

足袋を履く妻に残っていたおんな

肩書きに時々そつと下駄履かせ

重ね履きゆつくりと剥ぐかたつむり

喪がつづく草履をそつと閉じ込める

父の轍踏まぬと決めた靴を履く

履物を揃えて首尾を待っている

スリッパの片方残す電話口

鍵の鈴確かめて履く古い靴

泣きながら母に履かせる白い足袋

左遷とはまだ言っていない靴を履く

二度の職しつかり結ぶ靴の紐

お隣の前まで履いた茶がうまい

住

履きなれた靴で妥協をくり返す

花吹雪木靴を履いて来た葉書

妻の愚痴背中で聞いて靴を履く

哀しみの足袋のこはぜが留まらない

履き変えた靴に笑われまいとする

人

竹馬を履けば渡れる川ですか

地

木蓮の香り庭下駄借りて履く

天

きつと履く日の靴がある車椅子

軸

重たからわが子に履かす父の靴

マンガ

内海幸生選



華やかなマンガを見る披露宴

大学の教材になる嗚呼マンガ

立ち読みが出来ないマンガ袋入り

座り込みマンガを読んで手当つき

塾通いこつそり読んでるマンガ本

終着駅マンガを捨てる新幹線

終電車四こまマンガ置き去りに

ママが描くマンガはボクが主役です

マンガ本手に鍵っ子の急ぎ足

自画像はどう描いてもマンガだな

マンガチック世渡り上手な達人で

来し方がマンガだったと笑う妻

父さんもマンガが好きで叱れない

清水昆の河童奇麗に酔っている

文庫にはだしのゲンを真ん中に

ひとコマのマンガは小気味よくつき

辞令書に踊らされてるのもマンガ

筋書はマンガで知った太平記

靴からマンガを出したのはおとな

俺に似たマンガに笑い冷えていく

ビデオマンガ見せとくだけの孫の守り

一コマへ喝采朝の茶がうまい

息抜きに読んだマンガに教えられ

四次元の世界へマンガ住まわせる

生きている限りマンガを繰り返す

下車駅を慌てて降りたマンガ本

読み捨てのマンガお前も失語症

似顔絵のマンガはツボをよく掴み

四コマを見てゆつくりと読みはじめ

マンガならここらですつこけたいところ

笑わない紳士が読んでるマンガ

酸欠の街でマンガがよく売れる

寝てるふりしようかマンガ読んでよか

マンガ好き趣味は読書とある釣書

雄弁に語るマンガに文字はない

桃の花大人が読んでるマンガ

住

身に覚えあってマンガへ苦笑い

大賞のマンガの意味がわからない

ノラクロは第九条で退役し

夢のようなアメリカだったアロンディー

掌の中でマンガを演じ続けている

人

懐にマンガ一冊花遍路

地

古書店でのらくろに逢い小半日

天

漫画にはならないように顔洗う 小池しげお

軸

外は雪部屋でマンガと春を待つ

ひで

満秋

よし津

静子

多賀子

白光子

重人

あすき

宵明

あやめ

久美子

勝巳

荒介

佳雲

保夫

四郎

あずま

日枝子

雄々

鉄治

みつこ

洋

大柏

庸佑

シマ子

善信

一風

たもつ

正剣

初歩教室

題 一 散 る

吐 田 公 一

今月号から「初歩教室」を担当することに
なりましたハンタキンイチと申します。

大先輩の方々が担当して来られた初心者の方の指針ともなる選句、添削であるだけに、
一歩間違えばとてつもない方向へ走り出すの
ではと案じ、危惧している次第です。ともか
くお引き受けていただき、渾身の力をふりし
ばって作品を見せていただき、初心に還って共
に学んでゆきたいと思ひますのでよろしく。

「散る」これだと思ひ出しますのは、特攻隊
員の方が詠まれた句と聞きますよぶ

散る桜残る桜も散る桜

願わくば、このような一句を残したいもの。

添削句

○散らかしているのに馴れた客がくる 美子
この句意は、多分気のおけない間柄のこと
でしょうからいいそのこと

▽気のおけぬ友で散らけたまま通し

○地味だった母の終幕花吹雪

きん子

終幕など硬い言葉を使わずに、もつと素直
に詠まれるとよいのでは

▽花吹雪母の別れを惜しむよう

○命散る悪魔のいじめ正せない

トヨ子

随分気負っておられるが、肩の力を抜けば

▽心ないいじめに若いいのち散る

○花の散る道で言わねばならぬ事

志重

言わねばならぬ事を具体的に表現されては

▽好きですと花散る道でそつと告げ

○散り急ぐ桜の花にある慕情

君枝

桜花で重複を避ける。川柳は省略の文芸

▽散り急ぐ桜へこころ惹かされる

○花冷えの葉桜寒い独り酒

雄幸

川柳は短詩型の中に広がりを持つ文芸作品

▽散る花を酒の肴の都落ち

○散る花の一ひらグツと呑む宴

高栄

グツと呑むは冗長

▽一輪を受けて飲み干す花の宴

○桜散る下で極楽浄土みる

早智

言葉節約されたい。浄土で極楽の意

▽桜散る浄土はかくもあろうかと

○ぶたないで下さい花の散る宵に

八重子

句意は解りますが、ぶたないでの表現方法

は如何 趣旨は異なるが面白い句として

▽ひとときを花散る宵の夫婦酒

○花の散る前に告白しておこう

春枝

▽告白は花散る前と決めてある

○雑念を一気に散らす春一番

ふゆ子

できるだけ下五は守っていたきたい。

▽雑念を一気に散らす春風

○花も見ずあわてて散った傘寿春

睦子

傘寿春の文言には相当の無理があります。

▽春浅し花見もせずに散った亡母

○春雨の降る庭に散る花のかず

タツエ

少し情感を出されてはどうですか。

▽春雨に濡れてはかなく散る桜

○散る涙想い出深く忍ぶ宵

ふみえ

忍ぶの内容を具体的に述べれば――

▽散る涙想い出深い一周忌

○玉串川ばんばりに映え花筏

ミツ子

川と雪洞と花筏だけで人間が詠めていない

▽花筏春雨句うふたりづれ

○散り際の美学笑顔を忘れまい

絢子

句意は異なるが、詩はある意味で創作

▽散り際に笑顔残した亡母の旅

○散りざわを知って桜の満開日

捷也

満開日では下五に迫力がない。

▽散りざわを知ってか桜絢爛と

○いじめずに小さき花はな散り急ぐ

寛子

初心の時はできるだけ五七五にとのえて

▽いじめられ小さき花の散り急ぎ

○散る桜風情があると若い人 黎之助

とけ込んでゆく人の情けを入れると

▽散る桜風情にとける二人連れ

○東大へ背伸びの努力さくら散る 明美

やっぱりとするか実力とするか迷いますが

▽サクラ散るやっぱり無理と知る二浪

○花吹雪妻と二人でありがとう 三郎

ありがとうを眺めるとすれば過去が浮ぶ。

▽老婆と共に眺める花吹雪

○花吹雪風の誘いについてゆく 柳静子

川柳は人間を詠む。擬人的に詠むと

▽花吹雪風の吹くまま身をまかせ

○花吹雪土にまみれてごみとなり まさと

下五が推敲不足

▽花吹雪やがては土となる運命

○花吹雪出会い別れを知るように 悦子

花吹雪により以合つのは別れの方では

▽花吹雪別れを惜しむかのように

○散り急ぎ一輪の花惜しまれる 隆

▽散り急ぐ一輪にある美しさ

○落ちたメモ風に舞い散り老の足 因静子

老いの足が遊離。追いで老いの足が生きる

▽老いの足風に舞い散るメモを追ひ

○散る球児青春を詰め砂を詰め 勝巳

この句では砂を詰めがしんになるのでは

▽選抜に散った球児の砂袋

○散る時は奇麗に咲いてゆきたいな とよ子

願望は解るが、このままでは説明句

▽美しく咲いて散り際いさぎよし

○花は毎年人の散るの一度だけ 芳水

破調句は可能な限り避ける。中七下五は当然のこと。今少し情緒が欲しい。

▽年毎に散る花びらの変りなく

○たんぽぽの子離れ一瞬風に散る 幸次郎

見付け良し。本来なら乗るとしたいのだが

▽たんぽぽの子離れみごと風に散る

○散る時も奇麗でいたいと思つ日々 てる代

中八は駄目。下五が弱い。

▽散る時も奇麗でいたい女です

○美しく散らせて欲しい花風

▽着飾って火花散つる葉指 りつえ

散らすとした方が無理がないのでは――

▽着飾って火花を散らす葉指

○我よりも若き命が先に散る 真一

川柳の言葉はできるだけ口語体で

▽急かすともよいのに若い命散る

○憲法が散り散りにする核家族 一典

憲法の罪ではなく各家庭の事情によるもの

▽祖父母との縁を散らす核家族

○桜散った日あなたも散った忽然と 弘子

五七五を守っていたきたい。

▽花散ったあの日あなたも散り急ぎ

○散財の理由は後からこじつける 方子

推敲時、上下を並べ変えるのも一つの方法

▽こじつけている散財の後始末

○メダカの群勢いつけてパツと散る 玲子

勢いつけてをもう一度考えてみては――

▽パツと散るメダカの群の敏捷さ

○散る前に残す一句を日々えがき 一乗

▽散る前に残す一句を身をけずり

○散る花の下から見上げ明日思ふ 信子

▽明日想う散る花びらを見上げつつ

佳句

寝たきりの母に木の芽のちらし寿司 君江

散らし見てベダルが弾む春の風 行子

散り急ぐ桜の声を聞き漏らす ひでの

散つてこそ花だと人は言うけれど トキ

夜桜の散るもまたよし屋台そば ますみ

シャンソンを歌うと枯葉散ってくる 宏章

散り急ぐ桜未練はないという

私の句

咲いてよし散るもなおよし花見酒



題「恥」 6月15日締切（8月号発表）

添削を受ける原稿は、川柳塔社事務所へお

送りください。

お世なお世

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

母の日に母の音する台所
卒業へ私服の二人波受けず
雛壇にはつしやき過ぎる官女達
古雛と昔を語るあねいもと
雛かざり老女も童女の顔をする
縦横の線で絵になるビルディング
まっすぐな線路ばかりでない果立ち
目線さえ変れば広い空がある
世の中の最前線から遠く住む
好きな人と対角線に鍋煮える
ライバルの線がだんだん高くなる

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

点滴のシズクの動きみて耐える
サア出番胸の鼓動が高くなり
欲一つ捨てると動き楽になる
平穏な老後を狙う神詣で
澄み切った声でウグイス春を呼ぶ
目に入った地球のカケラに悩まされ

清芳 留吉 弘直
シマ子 欣史子 千枝子
能子 田実子 香住
喜美子 あずき

孫の手が黙って聞いて動かない
咲く時が来ると信じて耐えた冬
ヒナ壇を一巡売り娘寄ってくる
落ちてまた夢に酔って紅椿
早起きの手持無沙汰な休刊日
世辞覚え少し奥歯がゆるみだす
年金で少し見栄張る熨斗袋
透析の命をつなぐ赤い糸
赤チャンが目を輝かす動くもの
五ツ六ツ山路のぼって横峰寺
知らずとも縁の糸で結ばれる

川柳東大阪(前月分)

森下

年金は小さいけれど福の神
神棚の榊と枯れる無神論
死神もあいそをつかさ楽天家
春風に花粉を飛ばす神の杉
ひらがなの愛で親子の坂のぼる
のぼり坂笑い袋は忘れまい
陽だまりの坂で時間を見失う
人間くさい音で屋台が軋む
終電へはつばつ屋台灯を落とす
不器用に生きて屋台の灯になじむ
結局はひとり騒いでいたフアイト
風花の舞う自主トレへ白い息
白鳥のフアイト海越え山を越え
人がひと裁くいたみの鉄格子
良心の疼きへ神にひざますく
裁く神赦す仏へ業を抱く

愛論報

シマ子 雅文 文秋 勝美 朝子
元紀 白兔 真柳 信治 恒明
柳伸 晋吾 湖隆 志風

裁くのも裁かれるのも人と人
パレットに虚栄を裁く色がない
溝口町川柳会(前月分) 小西 雄々報
白足袋に願いをこめた見合い席
白足袋で拝む宮司が神に見え
桐下駄の感触足袋は忘れない
父の計へこはぜをひとつ掛け違え
白足袋に鼻緒の彩が映える春
白足袋に女心を引きしめる
座禅組む足袋のはころび気にかかる
火も風も溜めて悲しい足袋を履く
福助の足袋履いた頃若かった

南大阪川柳会

金井

文秋報

トッパ走る快感知ってから孤独
並でない証拠を見せる土俵際
悪質な金に染まった手の汚れ
策略に溺れ己を見失う
世間並ぐらいいへ背伸びする挙式
退けば本当の的見えてくる
退却にも潮時があり座を外す
老いの身に小春日和の日向ぼこ
三人の知恵策略を切り抜ける
退却をして静かに胸の内想う
退却のラッパを知らぬ兵の墓
いじめにも快感エスカレートする
貧乏神と別れる策がおまへんか
ピケ以外策略がないとは情けない

弘直 愛論 弘子 信敬 鈴枝 豊枝 静江 久子 智恵子
正光 雄々 楓楽 庸佑 章久 憲太郎 柳伸 千里 萬的 文秋 恒明 真砂 秋子 柳宏子
重人 直子

顔見ると話を止めた不快感
ゆっくりと退却余力残してる
度がすぎて居ると本気で怒り出す
散策の快感に酔う春の風

退却へ駝鳥の足が欲しくなる
すぐボアと並の神経ではないな
老練な策略リズム狂わされ
人並の妻で半生生かされる

明日咲くと待っていたのに花盗人
快感を覚えてペンの勇み足
悪質でない腕白は目をつぶる

快感は鏡の顔も笑ってる
快感は亡母極楽で知り給う
快感は花鳥風月京の春

久世柳クラブ (前月迄) 二宗
メス入れるおなか痛ます夢が覚め
一生を飾る余韻の花咲かせ

春つらら美味い空気を腹一杯
つくからまたいで百寿の祝い酒
柳会に誘われ生き甲斐倍になり

雪どけの雫に春の匂いする
不信心困った時の神頼み
強引に進めた後は神だのみ

神様に困った時だけ手を合わす
神様も笑ってござる無理言うて
水ぬるみ草木の色もかえて春

山を越し愁眉を開く春の風
若人の血の湧く春の甲子園

東雲 正博 頂留子 志華子 度 良 悟郎 久峰 咲 文江 三男 シメ子 公一 日出子

吟平報 亜矢 種子 梁山 禅心 久子 きくゑ 伊久栄 智恵子 知世 善代 千代女 吟平 光水

お水取りすんでいよいよ春が来る
授かってやつとあの娘も春が来た
春の陽に誘われ土筆顔を出す

球児の声舒となって春を呼ぶ
遅い春虫も与作もまだ起きぬ
喜んで仕事に向かう楽しさよ

師を迎え喜びあふる部屋あふる
挨拶の言葉につまる今の幸
生きる喜びかみしめている傘寿

新しい命がお腹蹴っている
竹原川柳会 時広 一路報

星たちは昔に出した光です
好きなのは光る笑顔を持つあなた
太陽をあげると眠くなる春だ

一年生がみんな光っている朝だ
春の日にあつげらんチューリップ
チームワークの中で若葉が伸びてくる

目の手術みんな善人みな美人
へそくりは妻の特技としておこ
宝物妻が元気で居てくれる

国宝を今日まで守ってきた家系
三歳の宝廊下を突っ走る
宝物孫の手にある石一つ

考古学的な宝が他愛なし
鍵一つ財布の中で遊んでる
玉手箱の鍵はまだまだ渡されぬ

渡された鍵のささやき握りしめ
私の鍵を受け取る人がひとり居る

秀香 旭泉 富士野 甫正 のぶ子 美恵子 志重 すみれ 女

高晴美 高史子 中千枝 蘭幸 淑子 比呂子 夏喜 節夫 笹舟 房子 規代 薊居 喜久恵 栄恵 喜美子 臣子

雪のおんな来そうな鍵はかけずおく
鍵の束我が家の秘密みなつかむ
自閉症の心を聞く鍵探す

迂闊にもハートの鍵を忘れ
太陽の光もつれし今日も生き
幾つもの光を秘めて巣立つ子よ

土を割る芽も柔らかに春光る
高槻川柳サークル卯の花 川島楓云児報

素顔晒してまーるい輪に溶ける
野仏に素顔のままで会いに行く
作業服の父の素顔にある魅力

悪いとは知って流れに乗る弱さ
縁の下で老母は悪役力持ち
裏切りの悪い予感と春の乱

稲子 秀夫 波留吉 節子 伸子 素顔晒してまーるい輪に溶ける
野仏に素顔のままで会いに行く
作業服の父の素顔にある魅力

悪いとは知って流れに乗る弱さ
縁の下で老母は悪役力持ち
裏切りの悪い予感と春の乱

佳句地十選 (5月号から)

平松 かすみ

あつさりどくれた葉がおそろしい
ブレーキを踏み合い夫婦しています
名刺などおまへん僕を見てほしい

宇宙という舞台をもっている若さ
お見事と言われ調子が狂い出す
太陽の塔よりはるか太郎逝く

柱の傷みんな巣立って行きました
紙袋かき私を持ち歩く
風の日には両手に重い荷を下げる

安いのていいよ最後に入る箱

完司 鬼遊 義江 トミエ 年子 政己 丹吉 稲子 芳子

破天荒サリン一年目も覚めぬ
一番のワルが表に出てこない
父よりも頼り甲斐ある母の腕
腕力の強さが危機を招かせる
腕も勘もさすがと思ふ血の流れ
片腕に妻がなつてゐる小商人
辣腕と言われて味方が減つてゆく
お嫁さんの腕と太さをくらべるな
エリートも時々コースから外れ
エリートに辞書で情けの文字を消す
エリートもおんなじように風邪を引く
ポカポカの陽気柳の芽も青い
一本の綱を渡つてゐる夫婦
春なのに友のひとりの名が消える
定年の駅から緩い坂になる
会者定離椿無常の色で散る
見て見てと言わんばかりのニールック
耳鳴りが止まぬ夜汽車で病母憶う
買い上手今日の特価は忘れない
金婚のこれというドラマ無いままに
春の海さびしがり屋の指を持つ
ほんとは泣き虫なんだ肩パット
良心が母より怖い顔をする
ロスタイムばかりが増えてきた余生

岸和田川柳会

田中

文時報

静江 重人 克治 二南 澄子 東雲 求芽 石舟 白溪子 あきら マツエ スミ子 英一 め女 艶子 紫香 庸佑 杜的 薰 惠美子 しげお 風云児

弘象 敏光 盛之

任せると聞いて油断も隙も無い
どん底のくらしに見得の妻の紅
大見得を切つて沸き立つ大拍手
目をむいて見得切る姿や團十郎
悪女ぶる態度少女の見得だらう
ミーティングから抜き言葉で見得を切り
タイトルを無傷で守るやわらちゃん
あぶく銭無傷で終るはずがない
味噌汁の湯気が平和が良いと言ひ
ぬるま湯に無傷で暮す平社員
敵を知り己を知つて傷付かず
トラックの下から無傷で這い出した
一人だけ無傷へ強い風当り
七冠の名声奪取へ夢の棋譜
名声がなくとも尊敬できる父
名声を売る代償となる裸
目的があつて無しに衝動買い
目的は言えないきつと笑うから
目的のノルマ果せず重い靴
目的は核廃棄と言う地球
目的に夢を持つてゐるボランティア

三幸川柳教室

三宅

保州報

場面変えたと行方不明になる私
白を切る方がよさそうこの場面
風白態菩薩と鬼が同居する
終焉の場面へ笑みを溜めておく
生も死も長い歴史の一場面
伝統を舞う子まだいる山の里

二南 路子 朝一 ひで 富志子 昭二 信博 一斎 文時 東雲 柳宏子 辰郎 さよ子 白光子 けい子 甚一 通彦 ダン吉 狸村 初子 めぐみ 高夫 和子

風花を舞い散る中を行く決意
男にはやはり剣舞の眼の光
掛けまい舞う気で先手切つて出る
リストラが男の舞を狂わせる
急がねばひとり舞台の灯が消える
お相手は話とかなり違ふ顔
大好きな相手に似てるモンタージュ
氷河期を相手に粘る外はない
住専の鬼を相手に豆をまく
神韻として響き合うシテとワキ
目に見えぬ相手が俺を走らせる
嫁ぐ娘にビックリ水を覚えさせ
大切な秘密一滴から漏れる
水くきの封書開けば果たし状
水かえて仏の母と会話する
泥水を浴びてゐるのはいつも雑魚
心にも水を与える散歩道
水鏡女たしなみ忘れない
煮つまつた話横から水をさす
漱いで下さい緊張解ける歯科の椅子
止水栓緩んでもれていく噂
水がある限り生きとし生くるもの
流せない話が水を流ませる
迫真の演技女優は脱いで振る

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

老いの手さび竹細工喜々として
たまに逢う亡夫黙つて笑うのみ
若者がなせ散り急ぐ車事故

みね 正雄 芙美子 靖子 百合子 正一 章子 公子 町子 朱夏 秀男 かず子 桂香 鉄治 貞子 孝子 親路 美子 和代 三千子 当代 保州 千秀 健三郎

ちよ ふさ子 治幸

一足の草鞋が知ってるながい旅
 啓蟄で目を覚ましたか腹の虫
 親子孫笑い声あるうさぎ小屋
 住専も何処吹く風ぞ天下り
 秋晴れて富士は我が家の庭つづき
 国籍不明のカボチャが映える唐津焼
 表面をつくらうことを先ずおぼえ
 麒麟児も裏目に出れば反逆児
 サングラスつけたままなら照れもせず
 子報三〇%傘を持ってなく律義者
 雪見酒妖艶に酔い紅乱れ
 想い出の校舎花壇に別れ言う
 高い鼻ばかり集まるクラス会
 椿からもらう優しさ美しさ
 パンタロン妻いきいきと旅仕度

ほたる川柳同好会

井上

直次報

紀一 青琴 幸夫 久仁 晴子 虹汀 圭 あき 公一朗 高明 四郎 タミ 正剣 明光 祥風 竹二 清史 英子 博史 純次 直次 方郎 敞子 昭子 まみ子

新一年卒業するのは新世紀
 土のにおい 炎のにおい 窯があく
 土と気が合つて真つ赤な万年青の実
 リストラの悔しさ混せて粘土捏ね
 土掘りがまた始まった年度末
 大都会土から買って葱を植え
 プランター 古里の土入れて蒔き
 土くれた親父の拳まだ痛い
 土地下落まだまだ遠いマイホーム
 鯛のあら買ってそれから土牛蒡
 万葉の謎とロマンの出土品
 荒れて来た土蔵を妻とささえてる
 壁土のにおいも無くて家が建つ
 指ひとつ遊ばせてない仏師の眼
 足るを知り年金で日日遊んでる
 ままごとですでに実権女の子
 入選は遊び心で活けた花

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

郁子 螢柳 眞郎 馬洗 正安 正三郎 つよし よしろう たけお 保子 恭子 瀧小 久子 だし 吉太郎 善守 喜美子 佳秋 萬的 杜一 源一 春蘭 文 鹿太 涼子 求芽

負けと知るあるいは救いかも知れぬ
 救われるたんびに水がうまくなる
 温かいその一言に救われる
 十センチ外れた奇跡に救われる
 空の青 突然叫んでみたくなる
 突然に泣くのも笑うのも女
 春の雷 別れの言葉突然に
 非常ベル誤作動だった日曜日
 突然に家が暇でくれと言う
 突然ですがと妻の知らない請求書
 私好みの人が突然現われる
 突然の出逢いに声が裏返る
 小修理 眼科 耳鼻科とはしごする
 さからわす川の流れに沿うて行く
 脱ぎ方で解る家族の晴れ曇
 念を押す釘は一本あればよい
 輸入バラ地下の花屋で花束に
 ブルーシートも四月栄転花見かな
 風の私語さかぬふりする花の芯
 人生の余白に似合う夢を抱く

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

はつ絵 しげお 江美 能子 いわゑ 透太 義子 房子 たず子 佐江子 哲子 正坊 キク子 澄子 諷云児 泰子 まさお トミエ 晶子 すみえ 保子 八重子 玲子 紫布 春枝

爆発だと向こう岸でも芸術家

米寿を祝う母に笑顔の芸がある

チマチマと手芸なんかは大嫌いな

うやむやに丸めたおむすの芸のうち

幕のめからサーカスの猛練習

芸のない馬がジンタを聞いている

芸を継ぐどれほどの血をにじませて

お惚けの芸に喝采鳴り止まず

熟年をすぎて覚えた呆けの芸

柔らかくつつむ芸もつかすみ草

暮らし乏しく芸が磨かれていく

父の背に芸をききんだ跡がある

満たされた猿は立派な芸をする

軽い芸を見せて「じゃあな」消えてゆく

ラストには紙吹雪という紙の芸

突風が教えてくれた一人芸

頂上の芸から水が漏れてくる

友達は一人も居ない芸の猿

芸のない男について来た結果

城北川柳会

吐田

公一報

うぐいすも鳴かせてやりたい自然保護

脱ぎなはれ人気薄らぐ清純派

方円の器にめげぬ水もある

スキップで春の便りが飛んでくる

一刻を争うでもないポケ電話

腰抜けになるほど酔った勇気づけ

吹雪く夜は果てなく沈みゆく如し

青天に震う裸木凜として

弘子

より子

寿々子

てい子

天雀

ゆき

富美子

瑞枝

蘭

千春

ふみ

亜弥

恵子

夕子

花子

なみ

千代

荒介

日枝子

怒り顔残し別れたあの苦味

国会に学びましたといじめつ子

吉報の意気が薄らぐ留守電話

今日もまた手抜きしてます老いの膳

イギリスの女王悩ます子の離婚

定期便のように米屋へ鳩の群

にっこりとうぐいすを聞く道祖神

バーゲンの掘出し物に無駄を買う

酒の席十八番決まって黒田節

エンゲル係数今でも高い医者知らず

我がものにあらぬレンズで読んでいる

出稼ぎの目に見違える子の育ち

日めくりの一枚毎に水ぬるむ

HIV訴訟薄らぐ命生きてこそ

清濁を入れる器を持つ男

子ら巢立ち夫婦で回す風車

うやむやにされて合点の行かぬ老い

薄かった縁をつなぎに花手桶

三月の雲手袋をまた忘れ

旅先の想い出つまる箸袋

東風吹くと天神さまの絵馬さわぐ

春だけと浮きつきできぬ仮設の灯

川柳岩出

小倉

アサ報

初恋の貴方と生きたる夢芝居

望郷を老母の電話が後押しし

日暮れにはさせぬ余生に咲かす花

しまいまで話さなくともいい夫婦

恋ごころ生む青春の始発駅

佐津乃

秀夫

トヨ子

あき子

あい子

美代子

達子

八重

睦子

満津子

登美子

静子

白峰

義江

昭子

典子

久留美

ただし

扇帆

寿美子

一枝

公一

昌子

良一

精子

悦男

綾子

誰にでも話したくなる嬉しい日

日暮れから変わる男の未来地図

燃えつきる恋に釣り鐘魚がされる

花ひらき恋を待つてる花の私語

日暮れ空悲しい女の舞台裏

身に付いた日暮れの好きは万歩計

あの人と渡れぬまんま恋の橋

恋知らぬ幸せ夫婦仲が好い

怖いのに怖い話を聞きたがり

木枯しが吹いて日暮れの灯が潤む

もっ少し遊べる春の日暮れ時

話などいらぬ家族で囲む鍋

呼ぶ母に子ら散りてゆく日暮れどき

振り向かず理想もとめる恋病

焼き魚母の姿の日暮れ知る

口下手というそのわりによく喋り

話さえずれば素直ないい親父

京都塔の会

松川

杜的報

模様替えしても変らぬ僕の部屋

雨模様去った男の傘がある

試着室派手な模様が苦にもたらず

人間模様織りなす糸はもつれがち

青春の夢を探しに湖畔まで

弥陀の慈悲探す遍路の鈴の音

ゆさぶりを掛けて打つ手を探してる

嫁姑ほどよい距離を探してる

六法の抜け穴探す虫眼鏡

何色にしようか余生の色探す

智恵子

アサ

和子

春子

幸子

重子

愛子

英子

紳一郎

ふみえ

千鶴子

正義

正直

保子

哲雄

忠雄

与呂志

紫香

磔

白溪子

百合子

豊次

風云児

メ女

葉子

圭坊

杜的

絶版を探して歩く古本市

重い荷を背負う総理のいかり肩

花冷えに日当りのよい席を選ぶ

日当りで温めています冷えた恋

日当りを避けておんなを待っている

ほんとかな ボケの防止に恋が効く

愛犬も連れて二男の里がえり

ご近所の年頃カナタで華式する

残る夢探す目覚しかけておく

春を待つことしきりなりふきのとう

日の光どきと落ちし屋根の雪

余寒なお今しばらくの仮住まい

陽の沈む海が見たくて窓あける

日当りでごろりと寝たい地藏さん

定年後妻の荷物になっている

胃薬も入れて赴任の荷を造り

もう少し娑婆に居る日の書を探す

バーゲンに同じ模様が売れ残り

風紋はゆうべの風の筆の冴え

川柳ささやま

酒井

靖子報

山鳴りを亡父の言葉と受けている

屋根覆う雪にとさされ人を恋う

野に咲いた花のやさしさ信じよう

巡り来る老いの末路を嫁に詫び

巡り来た幸せ背負うランドセル

尻尾振る目玉は横を向いたまま

曾孫の絵目玉バッチリママの顔
みぞれ傘回せば過去の一回り

栄

芳子

正坊

波留吉

薫

てる

笑女

達子

武庫坊

年代

春蘭

美穂

水客

龍小

英一

飛鳥

源一

求芽

修水

とよ子

純子

恵美

芳の

美智子

多美子

すず子
末野

一言のチャンス逃がし秋巡る

ささやかな幸せ嫁と梅を漬け

目玉焼き慣れてヤモメの半生記

雑草の意地が舗装を割って出る

四季巡る峠に思い出置いてある

それなりの演技に芽吹く春の土

芽吹くものみんな弾んだ春の土手

いたずらを一つ憶えて芽が伸びる

空の未知あしたの未知へ芽が覗く

切なさが心めぐるって詩になる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

おおらかにすごそう春の花ごよみ

元旦や元氣な夢を見て明ける

あるときは苦言もそれる昼の月

輪くぐりのお尻がいつも引つかり

みんなの輪崩さぬ努力しています

年重ね輪くぐり上手に抜けて生き

輪ゴムさえずすなおになれぬ時もあり

次の世に期待大にし欠伸する

おおらかに茜の空が明け初める

踏まれてもきらきら光る水溜り

二人とも元氣でお医者へ通っている

おおかさだけが取柄で今傘寿

輪の中にいる安らぎでめしを食い

川柳後楽吟社

従野 健一報

銭を数えてから人のために泣く

てのひらに行き先不明の道がある

市三

八重子

素水

とみ子

つや子

ヒサ子

和子

富美

可住

靖子

はるみ

鈴江

民子

かつ子

聖子

好栄

ちよえ

恵美子

英子

歳栄

博利

清泉

白汀

道博

義親

年寄りの知恵なんでもない理屈

許されぬ愛へ二人の影法師

茜雲まだ燃えている力こぶ

嘘つきの背中に白い蝶とまる

ポリプを取ってこんなうまい酒

さざんかの宿を唄って黄昏れる

花析る峠で見つけた惜春賦

健診で弛む身体の不吉を締め

溜息をついてシャネルの値札触れ

春の午後とろりと夢をみる

地球の輪郭溶かす酸性雨

酔いしれた父に少年の冷たい目

少年の直球受ける父の胸

ホラ見てと言わんばかりにミニが行く

散歩す大の歩幅にあわせられ

無人駅元駅長が花を活け

二人暮らしになって我慢が溶けてくる

きんきんと大に満足感はない

便利だが孫の白タク高くてき

ネギの束担いでラーメン屋の拘り

川柳塔鹿野みか月

土橋

友情の仲を守る子口固い

温い輪の仲間について暮している

眼でもが言える夫婦で仲がよい

仲人が苦勞重ねた種あかし

別姓名夫婦の仲は覗けない

共通点あって仲よい夫婦です
仲人と喧嘩したので駄目になる

浄美

桃風

正秀

健一

秋月

青銅

博友

金吾

邦季

幸子

吉則

拓治

哲郎

まさお

柳五郎

照路

進

吟平

佐加恵

草風

螢報

きみゑ

久枝

美恵子

孝男

節子

くに子
はるお

花の下おしどり休む暇がない
幸せな汗なら拭かずこのままに
折角の花見を散らすスピードから
わくわくとする漢方薬を飲んでみる
わくわくと春の野山へせられる
いのちの樹わくわく天を抱いている
心整え身をととのえて鳥がゆく
整えたら冷たい部屋になるだろう
軌道修正したらどうだと風がいう
整頓が上手な弟下手な姉
整えたはずの言葉が出てこない
整えてみても気付いてもらえない
胃の調子整えてから医者へ行く
どっこいしよ身を整えるかけ声だ
子も孫も翼ひろげて飛ぶがよい
代ゆずりしようか翼重くなる
一翼をにない家紋に花咲かす
標的に翼ぶつけた若鷺よ
主翼磨いてばくお嫁さんもらう
逞しい翼になって春を翔ぶ
朱鷺という翼で悲しみがつる
折り鶴の翼に祈る文字があり

サークル檸檬

小林

一夫報

神さまをあてにしない日 ジャムを煮る
鏡みるジキルとハイドまだ居てる
春うらら一人あそびが好きになる
気がつくときヒロの列に並んでた

野草 八重子 実満 忠良 正恵 かつ乃 諷人 汲香 富久江 三千代 公子 隆風 和子 くに子 きみ子 武子 智恵子 大漁 喜与志 孔姜子 睦子 盛桜 茂

ベビー靴 無性に買ってみたくなる
鈍痛に堪え激痛を誘い出す
思ひ上がりに気づく階段の途中
幼子の石に折れば石笑う
花散れば海に満ちたる祈りかな
祈るだけのり安心して眠る
子を産んだ日から祈らぬ時のなし
祈っても祈っても無に近づけぬ
シクラメンの咽のあたりに棲むいのり
ちよっとお祈りをして箸を持つ

ローズ川柳会

山崎

君子報

法要も花見に併せ繰り上げる
種時いて法事の花も手作りで
回忌ごとに思い出は若返る
亡父の書架に佇んでいる法事客
母の忌の母とおなじ五目寿司
その顔でやさしさ故に嘘をつく
人間を嫌いにさせるニュースショー
自分史の嘘が気になる罪と罰
嘘という空間のありなごませる
クレヨンで画く母の顔には嘘はない
恋多き姉の法事や落ち椿
嘘だって神のくださることもある
筋道の通って反論出来ぬ嘘
法事きていとこはこの顔揃う
七回忌時効だがねと言う話
つい軽くついた嘘から仲間割れ
酒好きの仏でしたと酒供養

みつ子 房子 希久子 一夫 薫 いわゑ あずき 楓 千代 智子

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

ひつぱると愛がちぎれてしまひそう
家族風呂愛は身近なとこにあり
愛されてふる里遠く根をおろす
空っぽの財布ばかりじゃ愛枯れる
三世代愛に囲まれ古希の春
愛情で結ばれ不一致で別れ
夕陽今主役の顔で降りてくる
人間が主役で山も海も病む
まだ主役父の場がある花万朵
引き出さしへ主役の夢を詰めておく
季節ごと主役が光る花の径
主役にも負けぬヒロの芸達者
痛ましや煽てに乗った付けばくろ
煽てられ鏡見なおす自画自讃
煽てられ登った木から降りられず
少々の煽てに乗らぬ蝸牛
さり気なく煽て酔わせて夜の蝶
煽てられ少女は少し気を許す
早合点して引受けた荷が重い
花ことばひかれて早い汽車に乗る
早いもの勝ちバーゲンの品選び
早春の香りを入れて手巻すし
早過ぎた会合おじぎばかりする
早発ちに深い訳あり風の駅
隣の子顔合わす度アイサイン
初孫の足にサインの札をつけ
友情のサインいつでもポケットに

茂美 房子 義良 登美子 鶴丸 寿美子 知恵子 日出子 雄々 邦代 友子 明子 早苗 陽子 静恵 清子 満江 桂子 嘉寿子 みえ 太泡 佳江 与根一 静江 米子 畔

サイン帳血氣に逸る少女趣味
転動の色紙に添えるサインペン
日の丸のサインに燃えたその昔

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

多賀子

ひふみ
叮紅

欲のない汗はまぶしいほど光る
バランスの吃水線が守れない

高夫

擬餌鉤の仕掛け明かさぬ釣り仲間
蛇皮線の暗いリズムにある怒り

太茂津

日々変わる四季の山にもあるリズム
生きてゆくリズムしつかり決めている

君枝

振り出しへ戻ると明日が光り出す
これも人生光届かぬ縁の下

三男

信じよと言った貴男の目の光
乳呑み児の光る瞳に陰はない

紀久子

鈍くとも子の逃げ道に光りたい
幸せのふたりに光るくすり指

めぐみ

野も山も春の光に起こされる
花嫁のお土産一つ光る笑み

美子

恵まれぬ仲間へ漕いだ助け舟
死線越え共に今まで来た仲間

富美子

躓いて仲間の風に起こされる
終章で耐えぬいた日々光り出す

誠子

悪友でいいライバルでいい仲間
仲間にはなったが僕は言うつもり

三枝子

人間が好きで仲間をぬけられぬ
仲間外れにされても自殺せぬように

由美子

薬にも毒にも時になる仲間
黙秘権仲間があると見てる母

重治

輝子

千寿子

リストラへバランスをとる肩叩き
金色のバランスとれた披露宴
一病を持つてバランス取る余生
バランスがくずれ心の揺れを見る
やじろべえ妻に味方の子の重み
ラブゲームシソーゲームのバランスよ

柳宏子
豊太
紀美女
年子
好笑
克子

富柳会

池

森子報

カラオケ大会俺の出番はこれからだ
これからの旅路へ妻と靴をはき

紅月

人恋し無色の日々に彩をさす
ご破算にしたい絆がひとつある

紅紫朗

花冷えにクシヤミが一つふえました
庭の草春にもなればよく目立ち

文子

花冷えを紛らす焼酎のみ過ぎた
惨めさを隠す笑いは透けて見え

アキ

ふる里の川にメダカがいる誇り
千枚田月を映せぬ田が一つ

登子

花冷えに戦の傷が未だ疼く
恋人と別れわかれの花の春

宗一

花冷えに春ふりかえり振り返り
これからは聖書に抱かれ生きてゆく

昭昭

猫抱いて心温める花の冷え
これからも無言の声援しています

昭水

無言劇を演じる花冷えの切手
春を待つ川は静かに蛇行する

昭造

一本の命削っていく戦
一滴の水は懺悔をして流れ

昭久

再会と言う名の店にあるときめき

智久

いずも川柳会

園山多賀子報

これからは川の流れに逆らわず

森子

ライバルが加速で迫る靴の音
加速する老いを絆が温める

きみえ

雪月花老いはいとんどん加速する
助走路が長くて慕情加速する

寿美

妻元氣笑い袋を持ち歩き
ユーモアを袋に詰めて朝を出る

満江

欲の皮詰めた袋の糸を切る
箒袋句箋代りに春を詠む

多賀子

女一人堪忍袋抱いて老い
袋帯母の香りを娘が結ぶ

ちかし

効能は本人だけが知る薬
明日のことわからぬままに飲む薬

房子

継ぎ足しの命へ薬欠かせない
忘却が薬になると言う時も

おしえ

気がつけば薬と縁が切れていた
子防薬だから時々飲み忘れ

草丘

画布に描く縁のうすい父と母
野仏に頭巾を縫うて母の冬

陽子

加速する老いの孤独に桜散る
有終の画布を飾ろう西雲

治代

古傷を包んだ布が乾かない
何時までもつきまよって過去の罪

愛子

過去は過去今あなたを信じたい
その度に過去にこだわる倦怠期

清子

過去はみなバラ色にして老いの春
Uターン過去を生かした故郷の虹

多喜

蘭水

昌枝

過去の傷掩ひ隠して黄砂降る

川柳大坂

坊農

柳弘報

ちえ

末坊

多香

太元

良花

河南子

醉照

青道

醉舟

呖笑

美子

美花

柳昌

信醉

かよこ

川童

まつお

まつお

司

希久志

洛醉

ダン吉

一歩

鉄心

敏

美津留

しげお

笑風

弥陀の掌は過去を一切問いません
蛇はゆつくり明るい方にきつてゐる
もう過去のことです尾灯遠ざかる
自惚れが己の川で溺れてる

はびきの市川柳会

榎本

吐来報

病室の壁に冥土の地図を書き
時候見舞川柳一句で締め括り
巢立つ娘にふつと寂しい父の背な
新聞の知識をつめて靴をはく
座つて俸給があるよい国会
村芝居大見得切りつつ開く幕
かたくなな心開いた思いやり
病む母の唇読んで腰さすり
終焉のドラマ唇だけ動き
唇をからからにした四面楚歌
唇の薄い人には近寄らぬ
あの色は盗んで欲しい唇だ
夢を抱く僕の唇まだ赤い
道草もちよつと覚えたランドセル
年金が化けたピカピカランドセル
ランドセルどんなシリアル描くやら
蝶になったキャベツ畑のランドセル
惨劇の跡を富士山悲しそう
惨めから発奮しての立志伝
番号で呼ばれその日の職を得る
僕よりも豪華なおかず犬のポチ
惨めさへどこかやさしい春の風
窓際のブライド惨めさに触れず

金太

智子

重人

柳弘

清美

四三郎

さとみ

聡

利武

利之

泰平

昭子

絢子

六点

一壺

重人

ダン吉

辰子

志洋

かつみ

みつこ

敏

洞庵

和風

敏子

一屯

吐来

優しさの中で惨めになつてゆく
参加してほしい彼女の顔がない
義理だけの参加に熱い握手され
オキナワの叫びへ僕も参加する
ときめきを少し信じて参加する
参加費が高いとすこしこねておく
残り火を煽つて参加したレース

翠洋会

米田 恭昌報

オンザロック男の涙知つてゐる
合の手に芝居の熱気盛り上がる
芝居はねて余韻ひきずりティールーム
薬害の涙の訴え下座さす
ふりむけば数限りない涙あと
正直な人で芝居も通じない
花冷えに一人芝居がまだ続く
別姓もラ抜き言葉も慣らされる
オフィスラブ二人で芝居しています
幸せ芝居に疲れて歎異抄をよむ
見ぬ振りの芝居上手になる同居
抜け道は作つてあつた悪だくみ
サン格拉斯あなたの心まで見えぬ
今泣けば下手な芝居と笑われる
手抜きした末っ子早い親離れ
一本のぬけ毛も拾うサスペンス
抜けるぬけるアートネイチャーだけ味方
お芝居が下手で信用されてます
親と子の絆戻したのは涙
萌える野にふさぎの虫を解き放つ

扶美代

晋

りつて

金太

敦子

美津留

たけし

宣司

久峰

真砂

東雲

凡子

春子

正坊

源一

恭昌

楓楽

みずき

志華子

さと美

蛙

ひろ子

絹子

千梢

希久子

佳秋

みつ子

涙ためて海棠さくらゆれている
短冊も花に酔うて通る通り抜け
再会のタイムスリップ頼もぬれ
飴買わず只見が出来た紙芝居
草萌えて再会の日を心待ち
草萌える逆立ちしたくなる芝生
沖繩の涙は腹の底にある

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

花だより明日行く山はまだ蕾
人も恋鳩も恋する花時計
頂いたエプロン便利しています
便利過ぎ使いこなせぬメカ音痴
便利屋でいつも他人に使われる
一番の便利主人の料理好き
全国の土産を地下で買う便利
花蓆 飲めない酒を飲まされる
春が来て汚れの目立つガラス拭く
春風の誘いを待っている手足
春風が旅に出ようと吹いてくる
一言が何時までも尾を引いている
新しい話題を添えて酌をする
寡黙だがこころはのほの夫の背
吟行に合せてくれた桜花

川柳塔打吹

奥谷

弘朗報

考えて見たがやっぱり好きは好き
見事なる技に作者のくらしみる
補聴器にまだ鶯が来てくれぬ

英壬子 綾子 照子 兼治郎 光子 正雄 鬼遊
まさ 六浦 江美 勇次郎 十四郎 歌子 紫香 鹿太 澄子 昌子 夢之助 正治 弘治 いわお
明治 信子 よし江

卒業の少女見事な蝶になる
政治家が見事に泳ぐ法の裏
考えるポーズだけでもしていよう
雪が降る音を静かに聞いて寝る
命乞いお寺の前で聞かされる
地球は青いよと宇宙船から聞いたよ
感性が見事で雑魚を寄せつけず
女医さんが僕に聴診器をあてた
でっかくて夢が器に盛り切れぬ
暇さえあればお寺に行つて話聞く
鬼瓦見事な家に一人住む
素足から聞える春の動く音
鮮やかなおしどりカメラふるえ出す
蒔かぬ種見事に生えて手におえぬ
考えてもわからぬ物は壺に入れ
耳に栓しても聞こえる母の声
考えが三途の川でゆきづまる
肝心なところ見事にばかして

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

一浪 仙岳 孝恵 きみ子 睦子 喜与志 博芳 秀芳 幸子 節子 螢 よしえ 和枝 宗光 玲子 雄々 勝見 弘朗 故とみお
白漢子 比呂志 武庫坊 光穂 鹿太 伊三郎 弘治 華

猫きらいの膝に仔猫が乗りたがる
胃カメラで活断層を探します
バラの花萎れて少し胃が痛む
近頃のニュース胃薬飲みながら
越えてきた冬を語らずさくら咲く
やつと咲いた桜に雨よ降らないで
丹精が菰の温みで咲く牡丹
一人は一人の暮し沈丁花
思い人に咲きます二度とない命
父の背やモクレン天を向いて咲く
ピアス揺れて小さな愛が咲きました
みんなにはわからないよう咲いてます
騒めきの中で咲かせている野心
ヨードン一年生が勢揃い
無理矢理に聞いているお世辞上の空
柳芽吹いてお不動さんは坂の径
散る花へ声なき魚は深く沈む
わが穴の深まりゆくさくら散るとき
花冷えに友を見舞いて独り酌む
八十路すぎ一筋紅をさしてみる
陽が落ちる破れた軍手無口なり
また一つ灯油買い足す戻り寒

川柳ねやがわ

江口

紫香 正治 萬的 キク子 ハツエ 正子 瀧小 杜的 諷云児 正坊 澄子 磯 歌子 昌子 一笛 年代 芳子 薫 まさお 千恵 夢之助 すみ 度報 朝子 たもつ 権太 庸佑 日出子

お隣の灯がついている安堵
菜園の情け貰って住みなれる

恵子
静江

その背なにとツップの孤独見してしまう

光子

人減らしとツップのころ泣いている

一風

ライバルがまた新しくなるツップ

とし子

団らんになるとタバコは追い出され

博泉

ふぐの肝意慮をさせてもらいます

シマ子

敬遠されているなと思つ目に出会ふ

磯

敬遠が嫌いで向こう傷ばかり

勇太郎

急用で敬遠されている誘い

頂留子

シルバーストを今も敬遠しています

冬葉

敬遠とこあいつは口がうま過ぎる

文秋

花道を避けてタンポポ今日も咲く

黎之助

敬遠をされても天狗分からない

時弘

税金の戻りで甘い酒を酌む

薫風

愛乾くバラバラと音がする

波留吉

レースに疲れ亀と話してみたくなる

亜成

愚痴っぱ妻か消えたのも淋し

洋洋

十歳も老けて見とお若いネ

小一路

大工さん茶髪の弟子を連れてくる

一途

御礼参りでまた授かつて来たらしい

かすみ

医の進歩命継ぎ足す無影灯

藍子

金のある人には楽し大都会

高栄

ライバルが一番うまい笛を吹く

英王子

度

度

川柳塔みちのく

小寺

動くもの動く桜咲きははじめ

花峯報

妻と子の軒の中に身を溶かし

五葉庵

花峯

花峯

不始末を母が小声で問いただし

一花

會長が動く尻尾も動き出す

井蛙

素姓確かめてから開く自動ドア

生恵子

叱れた猫が拭いている足の裏

ツネ

放漫の付けにむかつく予算案

雅城

なり振りもかまわず動く軍手です

花匠

耳打ちが政官界を曇らせる

正徳

交渉が破れ時計の動く音

順三

一ヶ条を添えて妥協が動き出し

北歩

裏金が動いて世間まるくなり

柳々

影法師二つひそひそ話する

しげる

金賞の白菜だから味見する

銀波

スーパにある白菜の一夜漬け

隼人

太陽を孕み白菜葉を重ね

隆樹

こそこそがワイドになつて飛ぶ噂

龍人

とつとり川柳会

帆雀報

裏道に天才画家が住んでいた

雅女

裏道が好きで太陽拝めない

美恵子

裏道で狼煙を上げる準備する

和枝

裏道に回ってポチとしっこする

輪多朗

裏道で花に見とれて穴に落ち

一枝

裏道でツンテルシャンと鳴らしてる

喜与志

裏道の地蔵なんでも見てござる

信子

裏道で祭り囃子を聞いている

悦子

裏道に利休ぬすみの雨が降る

明美

裏道に見事な桃が成っている

よしえ

土筆の芽天に向かって覇を競う

睦子

芽吹くまでじつと耐えますタイガース

和歌子

浮気の芽春になつたら膨らんだ

喬水

悪の芽が親の死角で伸びている

孝男

腋芽には花を咲かせぬようにする

昭恵

木の芽立ち時どき変なに出合う

正和

一番芽お師匠さんが摘んでしまふ

石花菜

千年も出番を運の芽は待った

多哥由

図太い芽出しているのは零れ種

玲子

嘘をつく時堂々とするがよい

故とみお

堂々と愛は私が貰います

忠良

堂々の生涯だった父が逝く

正恵

堂々としていて不幸など見せず

一京

壇上で堂々敵に塩を撒く

粗粒

堂々と女はきついことを言う

帆雀

堂々と受けて立ちます更年期

一瑤

堂々とお金を借りに来る憎さ

大漁

堂々と名前乗って出ています

きみ子

堂々と生きて句集に花がある

主一郎

川柳藤井寺

螢

紅梅の色香に踊る蜂の群れ

高田美代子報

阿波踊り好きで社長も阿呆になる

鐘造

青い空ぐらいて胸は踊らない

智久

酔って候 舞うか踊るか歌おうか

扶美代

踊ってる狼が主役を主張する

一屯

束の間を踊って水滴が消える

美房

病床で午後になすねる母を待つ

美代子

キャンセルに望みを継ぐ午後の便

キミ子

ゆつくりと疑問符を解く雨の午後

史郎

政代

政代

春あらし午後のドラマを書き換える
ネクタイをぐっと緩める午後三時
ティータム今日の気分はレモンティ
春の花活けて豊かな午後にする
黒豆が美味しく煮えて午後になる
午後五時へなかなか進まない時計
ストレスを吐き出す五時のターミナル
午後からの陽に古傷を干している
午後に行く理髪の椅子でつい眠り
スポーツ紙見ている午後の消防署
午後の足に合わせる靴を買いに行く
筍の灰汁抜きをする午後は雨
本店へ謝りにゆく午後のバス
ときどきはぼんやりしたい子沢山
独り居てぼんやりしては居れませんが
国会の廊下ぼんやりかすむ読書会
年のせいかぼんやりかすむ読書会
悪口らしきものが聞こえる夢うつつ
藤の花 ここは五番の葛井寺
決心を鈍らす春の甘い風

川柳塔おとしり

上田

俊路報

傘寿まで生きたい望みもっている
世の波を庇った母の傘を出る
失って親父の傘の広さ知る
自己主張しすぎて傘がたためない
生きているうちに自分の椅子作る
したたかな作り笑いで逃げられる
しあわせは自分で作るものとする

絹子 修六 悦子 アキ 敦子 六子 治子 花梢 宗一 正一 昭子 透太 しげお 昭水 昭三 利武 三郎 みよ子 和子 春蘭 志洋 敬之介 風花 俊路 雄々 真一 由多香 ひかり

思い出の砂丘へ孫を連れて来る
思い出のひとつひとつに詩がある
初恋の思い出今も胸の底
玉音を泣き聞いた日のくらしい雲
幾山河越えて思い出風化する
思い出はいつもきれいな星になる
熱燭に父の思い出湧いてくる
シャボン玉にがい思い出入れて飛べ
思い出の消す術もなし弾丸の傷
思い出のおもちゃに会えたわらべ館
いつまでも花見が出来る寒い春
川柳も酒にうかれて横にそれ
寒い春いまだ名残りの桜桜
青島の桜長者也眺めてる
春寒に花が命をながらえる
子雀に都会のことは告げないで
今朝もまた寒い挨拶交わされる
湖山池長者の涙溜めである
日本に惚れて帰れぬ鴨がいる
花びえが花の命を長くする
山桜ここにいますと咲いている
春風が外してくる主婦の枷
梨の花咲いて野良着も動きだす

倉吉川柳会

谷口

次男報

招待の場所であくびを噛みこころす
見合いた場所と離婚のお話を
現実と袂間に座る場所
大山が見え隠岐が見えいい場所だ

舎人 宏章 余志身 清子 銀嶺 一穂 愛恵 半疊 千秋 孝子 ゆき代 道子 静枝 伝住 幸次郎 しげる 崇 登美 みさを 悦子 艶子 芳子 友子 和歌子 螢 秋女

鮭帰る場所へ非情な網が待ち
死に場所は弥陀に委ねて善を積む
ばらばらの夫婦に出来るよい子供
場所とらぬ電化CM花ざかり
旅先でケンカした場所忘れな
場所柄を気にしないのは猫の恋
ズル休み人目に立たぬ場所歩く
出来物がベルトの位置で難儀した
かめむしが招く冬陽の当たる場所
兄弟子のうしろに從いて岡場所へ
場所柄を考えない高笑い
反対の署名の印を強く押す
何事も反対をする夫です
ライバルが反対すれば燃えてくる
反対の意見正論かも知れぬ
賛成も反対もせず酒は飲む

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

小包の男むすびが気にかかる
お使いで来た子におはぎ包む母
家族愛何時も包まれ気がつかず
お天気はどうあろうともボランティ
それそれに誘いがかるよい天気
アメダスは天気晴朗春の風
うとうとと油断をさせる象の耳
うとうとと講義の音が遠去かる
ひとり暮しうとうとしようと笑おうと
悲しさが抜けたらうとうと眠くなる
住専にうとうと気分ふつとばす

雄々 黙光 小枝 一生 一夫 秋草 玲子 康志 石花菜 御前 日枝子 智子 秀峰 かつみ 次男 龍小 博史 恭子 きく子 紫香 一笛 澄子 庸佑 求芽 悟朗

うとうとして極楽へ行ってきた
遊びから出た交際が運のつき
道草の途中で本物をつかむ
同じ血が流れ息子も遊び下手
青雲を掴みに崖をよじ登る
水仙の黄に落け込んでゐる仏
疑えばかりない深みTBSです
娘の自立 安堵不安の交差点
似顔絵を貼って平和な交番所
禁酒して女河童にわらわれる
近ごろは妻がときどき意見する
造花にもそれなりの意地バラの棘
言うことは何もない平寿の顔眠る
相性は合わぬが飯を炊いている

川柳東大阪

森下

愛論報

英子 一枚ずつ一枚ずつ脱いで春
登代子 しがらみを脱いで本当の春を知る
いわゑ みそ汁が恋しくなったバスポート
重人 豊かさの群れ笑われるバスポート
源一 バスポート企業戦士の靴光る
つえ子
吉太郎
知香子
明光
路児
正坊
ただし
杜的
しげお

川柳クラブわたの花 吉村

用意せんでも僕が一本さげてゆく
新人を灰色にする赤じゅうたん
叱られて廊下半分日が落ちる
知恩院の廊下おしやべり忘れてる
意図的に送り続けるバラの花
今日もまた下手な弁解聞いている
意図通りいくかどうかは腕しだい
頼る子もなくても今は泣きもせず
弁解のしらしに耳凍る
恋人も空気になった銀婚で
廊下までさぶとん並べ花が咲く
クラス替え渡り廊下で親友と
ベルが鳴る廊下を遅刻走らされ
キリギリス張りの廊下がうちにある
マンネリの我が家の味をほめる客
箱庭に似合うわが家もニューメデア
ドクターが狐期の趣味をやめられず
ほめす言葉へ意図の見えかくれ
一服のタバコにふつと変わる意図
外人も下駄履きで行く旅の街
弁解をするわ罰金取られるわ
税務署の廊下で恐い話聞く

一風報

恭昌 参観日廊下のママに手をあげる
朝子 久世川柳クラブ
孤舟 二宗
隆 吟平報
湖風 秀香
一風 シマ子
幸枝 伊知世
春子 伊久栄
君江 光水
ミツ子 甫正
剛治 のぶ子
春江 禅心
宏 すみれ
美代子 吟平
知佐子 女
けい子 善代
明子 弘子
まさト 鈴枝
トシエ 信敬
泰成 久女
幸子 康女
朝子 豊枝
ますみ 智恵子
友甫 正光
隆 雄々
美津留

参観日廊下のママに手をあげる
久世川柳クラブ
二宗
吟平報
秀香
富士野
久子
ただし
伊知世
伊久栄
光水
甫正
のぶ子
禅心
すみれ
吟平
女
善代
弘子
鈴枝
信敬
久女
康女
豊枝
智恵子
正光
雄々

溝口町川柳会

小西 雄々報

タイムカード一番に押す管理職
ウォーキング友の早さへ追いつけず
一年の早さに齢も忘れゆき
農作業パワー全開早出す
万歩計足の早さに息はずむ
幸せと思う花見の輪で歌う
幸せな暦は逃げるのが早い
貧しさに耐えて流行など知らず
栄進が早すぎ風の棘に遭つ

路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成八年一月号～四月号

路郎賞候補作品

小島 蘭 幸

午後六時タヌキぞろぞろ居酒屋に

ごきぶりは恥ずかしがり屋だと思っ
高須賀金太

三宅 保州

この街が好きで自転車漕いでいる 金山夕子
笑いころけて昨日も今日も旅の中 田中亜弥
初恋のひとつと今でも住んでいる 春木圭一郎
無欲でも男一つの的はある 田口 虹汀

大丈夫 肩に大きな手がのった 宮口 克子
葉をみんな落としてブライドを守る 池森子
世渡りのバランスとっている尻尾

そばを打つ婆さまと石臼びったんこ
放江原とみお

ぎんなんを炒りぎんなんの夜となり
舟渡 杏花

老いひとり手酌に寒し肘枕
桑原 道夫
森下 愛論

みんなころんで大人になった膝小僧

雑踏という保護色を身にまとう
松本 文字
大橋 政良

河内 天 笑

松活けて言うてはならぬこと多し 稲葉冬葉
石橋をたたいて悪を重ねてる 樹本 露児

一人旅さほど淋しいものでなし 大河未佐子
少年よどんな靴を履き潰せ 新家 完司

トラックの豚と眼の合う秋日和 田中 薫
この街が好きで自転車漕いでいる 金山夕子

雪催い 遠くで茶碗割れる音 舟渡 杏花
助かった命だんだん欲が付き 西口いわゑ

古いねと言われて黙るほかはなし 北山好笑
フルートの響きが好きて目をつむる 田村

あらうれし万年筆が出てきたよ 池内かみ子
きつちりと蓋をしたがる大人たち 池 森子

ひる時の箸割る音の楽しさよ 池永 正雄
遠まわりのたにハガキ入れ忘れ 吉田笑女

まだ死ぬぬ何を食べても美味いから
小砂 白汀

小池 しげお

少年よどんな靴を履き潰せ 新家 完司
七人の敵に美人が混じつて 田中紀美代

世界一おいしい米を食べている 土橋 螢
抽斗に空き箱のあるあたたかさ 桑原 道夫

風花のやさしい母の忌が近い 門谷たず子
父の木にいつも追いつけかけている

二代目をじつと見守る鬼瓦 土橋はるお
世渡りのバランスとっている尻尾 中島 志洋

わたしの袋毒も薬も入れてある 放江原とみお
知らんふりするのに丁度よい雪だ 田中 亜弥

運のない手相拳にして眠る 鈴木公弘
味方にも敵にも見えてカスミ草 高瀬 霜石

顔見せにおいでと母の大きな字 尼 れいじ
堀 良江

板尾 岳 人

繰り返す喜劇で明日をまた信じ 小寺 花峯
姦淫する勿れとポスト立っている 桑原道夫

百の指切りいくつ裏切る風車 吉川 寿美
投げてまた拾う一冊の聖書 小野 克枝

世紀末されど柘榴の実がはじけ 樹本 露児
沈む日の輝く果てを明日と言っ 牧淵富喜子

りんご拭く罪の句を確かめて 木本 朱夏
冥利得て二ヶ月無事に福寿草 山海 友照

双六の上がりにこざるお釈迦さま
放江原とみお

雨垂れが性善説をばつり説く 高瀬 霜石
紅いバラに竹つきさらぎの軽い飢え

舟渡 杏花

雪ひらひらまた美しいうそを言う 松本文子
雪しんしん春のかおして桜餅 堀江 正朗

吉岡美房

主義主張あるからカニも横にはう

酔っているときがほんとの俺である 川崎ひかり

またたかぬ依怙地な星がボアに遭つ 山田 高夫

節曲げて摺んだ椅子は放さない 久保 正剣
黄昏れて夫婦が同じ彩になる 井上 直次

リング拭く罪の匂を確かめて 伊藤 寿美
にんげんの貌をしている裸の木 木本 朱夏

寒気団ガンバレなどと言わないで 新家 完治
冬の天 有無を言わさぬものを持つ 松本文子

棒切れがあると素振りしがたくなる 西口いわゑ

若い日はその気になった死が怖い 三宅 保州
善人と呼ばれて仮面脱ぎにくい 上田俊路

かすがいの錆は涙の跡だろう 小林 妻子
老姉妹母の思い出くい違い 田辺 灸六

アリパイどころか今日のことさえ忘れてる 吉田あずき

堀端 三男

川柳塔賞候補作品

福本英子

協調が妥協か一歩ずつさがる

取り巻きになるには骨が硬すぎる 中村 好恵
トビの子をタカにしようとした誤算 一本勇太

しまい風呂 首の骨からまず弛め 村上久美子

長生きの国 長生きをもてあまし 古久保和子
食後とは夫婦でくすり飲む時間 湊 修水

吸い溜めをして乗り込んだ禁煙車 高野 宵草

所詮歩はと金までらし窓際で 立石勇次郎
こたつから出ないと何も始まらぬ 和田 和風

ワープロという置物を子に貰う 藤田泰子
おしゃべりも入れて母さん多事多忙 藤田 芳郎

心が寒い春の楽譜を買いにゆく 藤井 春子
年金がバンクしそにサクラ咲く 石川 勝

回転木馬みな先頭と思う馬 齋藤房子
面接のマナーばかりがうまくなる 三浦 強一

大谷幸次郎

榎本吐来

子離れの儀式とおもう華燭の日 中村 好恵
正座した反省しびれだけ残り 稲葉 洋

取り巻きになるには骨が硬すぎる 一本勇太
百歳が天罰ですと笑わせる 乙倉 武史
絵画かともこう尼僧が落ち葉掃く

塩路よしみ
あやふやな答弁しかと身を守る 中田あい子
済みません言う眼は睨みかえしてる 保田 絹子

ドクターの言葉の裏へ気がまわり 松本聖子
聞かれたい項目のないアンケート 清水潮華
垣根越し小鉢が往き来して温い 村上久美子

女関に今日の気分が脱いである 木村 天弘
返答をせぬのが母の答です 傍島 克治

やっと古稀まだまだ入る道具箱 山本 正光
上野駅 大志抱いた貌で降り 三浦 強一

削られたところに本音あったのに 西村半畳

川島 諷云児

君子にはなおほど遠い爪の伸び 長浜 澄子
悪女が菩薩が妻の正体わからない 植田 一京

野心もつとくに捨てた無精髭 山根めぐみ
一億のひとりと添って半世紀 大西 文次

お辞儀する形で母が老いて行く 齊藤 房子
嘘を盛る皿を一枚また増やす 足立由美子

父に似た器で蓋がしまらない 藤原 一平
思慮深い孔雀は羽を広げない 山口しげる

少年の笑いを消した塾の風 杉山 精子
捨てたはず又も拾って抱く未練 高多 博文

駅裏に通せんぼうの灯が点る 山門 タミ
森 茂美

パチンコにのぼせて明日の飯がない

森安夢之助

定年のカンバスに描く虹の橋

三浦 強一

しあわせが行ったり来たりラムネ玉

石上 悦子

宮口笛生

子離れの儀式とおもつ華燭の日
不揃いの器で食べる妻の留守

中村 好恵
高田美代子

妻というつかい棒は外されぬ

山本 正光

善人で答がすぐに顔に出る

塩路よしみ

食後とは夫婦でくすり飲む時間

高野 宵草

済みません言う眼は睨みかえして

保田 絹子

もらい物値段をつけてみたくなる

村上ミツ子

金借りて大きな話して帰る

谷口 義

こたつから出ないと何も始まらぬ

藤田泰子

満足をしたら眠たくなって来る

渡辺 南幸

だとしても嘘をつくのも思いやり

一本勇太

豆腐屋さん豆腐の角を大切に

後藤黎之助

百歳の笑う顔には神がいる

福永ひかり

節目には急に信心深くなる

徳田ひろ子

気前よい妻はへそくりきつと持つ

小塩智加恵

小林 由多香

幸せの予約みんなのシャツたむ
反論もせずには笑って聞くゆとり

山宮愛恵
井崎ミサ子

付添いの眠れぬ夜と眠い夜

高野 不二

打たれても直球だけを投げて生き

安達 厚

添削をされて私が消えて行く

越智 青園

似なくてもいいところが似て親子なり

早川 盛夫

無理のない歩幅やさしい風に会う

芦田絢子

洗うてもまた洗うても軍手なり

倉垣 恵美

負けたふりするのが母はつまかった

石川 勝

神さまにお礼を言うてまた頼み

村上ミツ子

はしゃいだりしよげたり影もついて来る

市丸 晴子

幸せな人許り来る同期会

和田美寿子

やりくりが下手でリズムが掴めない

田辺 鹿太

コップ酒明日のことは考えず

大西 文次

小春日に非常袋を出してみる

浜 圭三

大阪川柳の会

とき 6月4日(火)午後5時開場

ところ サンケイビル本館302号室

宿題と選者(各題2句・午後6時締切)

「群れ」 西川 景子 選

「道連れ」 玉置 重人 選

「雑音」 中川 一選

「しみじみ」連記 磯野 いさむ 選

「正本水客とその仲間」 発刊記念誌上川柳大会

川柳塔社相談役正本水客氏のお見舞と
卒寿を祝つて、句集「正本水客とその仲
間」を皆様の協賛により発刊いたしたい
と存じます。協賛金は一人三千円で、同
句集に自選句五句を掲載するとともに、
句集を贈呈いたします。

さらに句集発刊を記念して左記により
川柳塔社の後援で誌上川柳大会を開催い
たします。

課題と選者(各題2句・2名共選)

「汽車」 中尾 飛鳥・阿萬 萬的

「縁」 小出 智子・西田柳宏子

「二人」 黒川 紫香・正本 水客

会費 1500円(句集・発表誌呈)

締切 6月30日(日)

投句先 〒600 京都市下京区諏訪町通り

用紙 松原下る弁財天町 都倉 求芽

所定用紙または同様の用紙

◎句集刊行は9月末を予定しています
「正本水客とその仲間」刊行委員会

嘘も混ぜ関西弁が笑わせる
補聴器をはずして笑いまだ続く

笑わない赤ちゃん泣かせてしまつ
仁王さんちよつと笑つてみませんか
笑い皺老母は昔を語らない

笑えない男をひとり胸に飼う

どうにでもとれる笑いで切り抜ける
咲いて散るさだめ泣くより笑い合う

ひとり泣けても一人では笑えない
お笑いのポイントずれる三世代

笑われたあの日をバネにしたという
微笑みがこころを洗う聖マリア

子沢山玄関の靴笑いあい
頑固さはどっちもどっちだと笑い

無器用な私を笑っているらしい
笑いたくなくて苦虫噛みつぶす

保育器の神のはほえみ覗きこむ
ほほえみを少し残して死にたいな

歩き始めを囲む家族の泣き笑い
笑い出した妻へ喧嘩を売りまくる

よく笑う野菜を焼肉に添える
この辺で笑つた方がよさそうだ

心から笑える友と笑いあふ
にぎにぎの手からこぼれてくる笑い

ライバルの笑い秘策がありそうで
ライバルのうすら笑いが気にかかる

笑いじわ夜叉も仏も棲んでいる
鬼と蛇が意気投合の高笑い

武庫坊

典子

正坊

たず子

桂香

寿美

正坊

欣史子

ダン吉

澄子

弘直

頂留子

稚代

二南

みつ子

希久子

たもつ

しげお

美子

吐来

風云児

澄子

吐来

朝子

千秀

樹木医の熱意にはほほ笑んでる桜
人

笑いなさんなあんたかてもうじき判る
地

恍惚の母の笑顔の悲しすぎ
天

錯覚に気付き笑いが凍りつく
軸

米朝の笑いに 人間国宝

兼題「進む」 吉村一風選

我が道を進む子背なを押してやる
進むしかなかった兵の破れ靴

退く事を知らぬ男のちびた靴
矢印に進めば罪は消えますか

進化論 わたしは猿でいたかった
前進にこころ炎と燃えたざる

ロボットの進化に職を奪われる
住専処理 議事が進まぬ民主主義

進んでる友を眺めてばかりいる
母の巻く時計は五分進んでる

毛糸針ゆっくり愛を編み進める
有事には進む安保にある不安

猛進の真つ只中で知る孤独
怒涛の響きで老齢化が進む

黙秘権時計が遅々と進まない
二十一世紀へ時計ばかりが進みだす

人よりも半歩進めている自信
矢印を進むと鬼が切符切る

萬的

満津子

洋

美代子

冬葉

洞庵

柳宏子

寿美

澄子

義子

悟郎

風云児

勝美

源一

いわゑ

源一

かすみ

千秀

三男

勇太

希久子

たもつ

源一

少しずつ進んで蟻は塔上がる
進むしか知らない歩にもある任務

金婚へ進め進めと応援歌
負けないぞ老いの時計を進ませる

過疎進む故郷帰って来いという
真っ直ぐに進めば光る明日がある

世渡りが下手で一步ずつ進む
あるものがないので話進まない

遍路みち進むと弥陀の掌にとどく
社訓には前進のみと書いてある

根回しが効きスラスラと進む議事
金策へとはと進む重い靴

進んでも進まなくても陽は沈む
進みすぎ味方が誰もついて来ぬ

蛇口全開進むほかないのです
佳

子の進路親は願くだけでよい
とんとんと進んで虹の橋渡る

文化進んで妻は手抜きがうまくなり
行くあてがなくて時計が進まない

家事分担進んでしるる定年後
一本の白髪女に老い進む

一步下がって進む力を溜めている
天

ハイテクが進んで情けうすくなる
軸

前向きに進むと決めたいい出会い
一風

房子

庸佑

狸村

典子

笛生

しげお

重人

隆

欣史子

正坊

美津留

度

冬葉

洋

佳秋

森子

寿美

美代子

満州

弥生

美子

朝子

一風

兼題「直線」

山下 美津留選

目標へ一直線の瞳が若い
直線を信じていますランドセル
直線を海図に引いて救難機
張りつめた直線いとも切れやすい
直線を歩めば妻も従いてくる
直線の上がなかなかぞれない
クラス委員の辛さで直線歩く
直線で馬は謀反を考える
一直線邪心許さぬ改札機
一直線に人をも襲う街鴉
直線を引けぬ心を見透かされ
一直線に風が抜けた静かな夜だ
直線の朱に真意を伏せておく
役人の引く直線は冷たすぎ
直線を歩んだ友が若く逝く
直線を引けば嘉手納も岩国も
直線で来る球なのに打たせない
北帰行みな直線に飛んでゆく
真つ直ぐに父の目を見る子を信じ
直線に物言う人の目がきれい
直線にかかつてからの悪あがき
直線コースつい気が緩むドライバ―
直線の主張ともに風当る
涙さえ直線のに竹人形
決断へ一直線に伸びる影
北山に一直線が並び伸び
直線をなぞる生き方しか出来ぬ

重人 吐来 千秀 三郎 美代子 美代子 佳秋 柳弘 満州 欣史子 白兎 澄子 たもつ 鹿太 柳弘 文秋 落児 女 弘直 千秀 典子 萬的 鹿太 洞庵 冬葉

直線でつまずき迂回してしまつ
直線に夢のせているヒコ―雲
直線になると迷つてばかりいる
直線で区切つてからは水臭い
直線 佳
直線を歩いて出世しなかった
直線で追抜く力溜めておく
直線で喋るゝ笑えない落語
直線に人は責めない茶の心
直線のままに私の道を往く
人
言い勝つて直線書けぬ手の震え
地
直線に生きる少年の顔が好き
天
直線にうけとる愛が美しい
軸
改憲へ一直線はゆるせない
兼題「あだ名」 田中正坊選

房子 一風 グン吉 しげお 金太 三男 桂香 弥生 正坊 英子 狸村 狸村 美津留 美津留 一歩 希久子 武庫坊 章久 萬的 一步 隆

戎橋古いあだ名で呼ばれたり
黒ちゃんのあだ名で病氣知らぬ妻
慕われる先生ぬくいあだ名持つ
あだ名しか知らぬ恩師と出会う街
ドクターにあだ名をつける快復期
看護婦のあだ名覚えた頃に出る
新任へもう付けられているあだ名
なる程と思うあだ名で忘れない
名前よりあだ名がお人柄
あだ名をつくり本名に失くなる
弔電も渾名で読まれ惜しがられ
本人も得心あだ名に惚れている
敵ながら急所をついてくるあだ名
赴任する前にあだ名が知れわたり
顔見れば直ぐに浮かんでくるあだ名
目の前で口滑らせて出たあだ名
妻よりも古い絆のあるあだ名
無意識に話すあだ名ころげ出る
自己紹介ニックネームも添えておく
打ち解けるきっかけくれたいあだ名
ニックネームで覚えた青い眼の選手
絶品のニックネームに金竹小
佳

薫 典子 あやめ たもつ 美代子 グン吉 紫香 章久 狸村 太茂津 愛論 柳宏子 房子 三男 志洋 庸佑 希久子 正雄 金太 武庫坊 隆 美代子 重人 諷云 朝子 一風

人

本名知らずイチローだけは知っている

東雲

地

あだ名呼び声詰まらせて読む弔辞

三郎

天

新任の教師あだ名つく五月

稚代

軸

赴任地へとつくに着いていたあだ名

正坊

兼題「すべて」

橋高薫風選

すべてをみな忘れなさいと波の音

萬の

私のすべてに酒がからんでる

笛生

思うことすべて言うたら空しがる

寿美子

千年の営みすべてタムの底

隆

すべてを任す人は自分で見つめます

昭子

身の上をすべて話したわた毛です

朝子

好きだから表も裏も見てもらう

美代子

好きだからお金以外はすべてあげ

東雲

落書きに貴方すべてと書いてある

たもつ

すべて委して歯痒い事も見ていよう

太茂津

顔色ですべて察している仲間

あやめ

健康がすべてと気付く歳となり

一歩

喜寿控え行先すべてで弥陀まかせ

武庫坊

世の中は金がすべてと病んでいる

射月芳

財産をはたいて夢を買う男

洞庵

貸金庫全財産が入れてある

落児

遺書に書く資産全てを母さんに

太茂津

ご名算すべてにけりがついて暗れ

満津子

すべてで打明けようやく風いだ海の色

たず子

愛すべて貴方にあげて自己破産

シマ子

夫婦田満すべて許したワケじゃない

柳弘

父帰る母はすべてを許してる

一風

背く子も良い子もすべて私の子

英子

すべてではないが大事なものはいのち

正坊

金になる話へ音をすべて消す

英王

てのひらに蟻のすべてを委ねられ

桂香

無に還る一生人も虫けらも

文秋

嗚呼地球五十五億のピラニアだ

美津留

核ボタンすべての音を握る位置にある

重人

花の下すべての音がかり消され

いわゑ

剥落のすべての音に勝りける

蕉

飛驒の国すべて少女の祭り笛

満州

住

大臣がすべて悪いと言わないが

金太

面目を失いすべて黙秘権

冬葉

バイブルをすべて読んでるわけじゃない

洞庵

情熱のすべて会社においてくる

弥生

満月にすべて告白させられる

いわゑ

人

ぐつりと眠るすべてはそのあとで

英王

屑籠に捨てられた一枚がすべて

森子

地

総て話して灰皿を捨てにやる

しげお

天

菜の花へ欲のすべてを捨ててくる

蕉風

軸

菜の花へ欲のすべてを捨ててくる

蕉風

第51回 尼崎市文芸祭

募集作品

短歌 近詠1人1首

俳句 雑詠1人1句

川柳 雑詠1人1句

未発表作品に限る

規定

1 所定葉書または官製葉書

2 葉書1枚に1部門に限る

3 5月5日～6月10日

応募期間

応募先 尼崎市東七松町1丁目23-1

尼崎市国際文化室文芸祭係

尼崎川柳大会

とき 7月20日(土) 正午開場

ところ サンシビック尼崎

課題と選者 (各題2句・午後1時締切)

「草」 三好進平・萩原金之助共選

「天」 田中 薫・黒川 紫香共選

「海」 河瀬芳子選

「許す」 田頭良子選

「窓」 森田栄一選

会費 1000円

主催 尼崎川柳協会

句集紹介

『西尾 栗句集』を読む

小 出 智 子

ずっしりと重い『定本西尾栗句集』を掌にしますと、平成六年一月十六日の川柳塔八〇〇号記念大会の日、演壇に上がられる栗先生の介添えをさせて頂いた、お手の重みを思い出します。

布製の表紙は、写真のお召物と同じ茶系統で、栗先生のお好みの色調ではないかと思われませんが、落ち着いた風格をもっています。

元旦や我泰山の如く座す

元日の一步国旗を掲げに出る

牛の瞳に人間何をあわてとる

ご結婚されるその以前の、昭和六年から川柳をなさっておられたそうで、その長い間には随分と川柳界に貢献して来られ、また、川柳

塔の名主幹であられたことは、どなたも口を揃えて語られることです。先生は、元旦または元日の句をよくお書きになっていますが、一年の初めの日の感慨を特に大切になさったようで、これらの句を拝見しただけで、先生のお姿が彷彿といえます。

植木市妻は咲いてる方を買ひ

約束を破る電話は妻にさせ

腕組んだ思案を妻に見つめられ

栗先生は昭和四十五年に句集『水鶏笛』を出版されています。その序文に麻生霞乃先生は「幸福はその人の心にありとハッキリ言い切りたい心境を持っている。そのかけには、いつもにこやかに融和してこられた奥様のあることを忘れてはならない。この似合いの驚愕夫婦に未来永劫に幸福よ、続けかし」と書かれています。あの先生にしてこの奥様と何時も理想の夫婦像として尊敬していました。

一步出すれば吾れ旅人となる心

人恋し人煩わし波の音

初旅や伊豆は菜の花豆の花
旅枕雨にしあれば雨の詩

旅がお好きであっただけに、旅の佳句が多く「一步出すれば」の句は、昭和五十五年五月に八尾市の太子堂勝壽寺に、高さ二二幅九十センチの高さ約一メートルの立派な句碑が建立されています。華やかな当日のことを思い出しても胸が熱くなります。また、旅先では郵便局を探して、千円の預金をなさると言うユニークな楽しみを持っておられました。随分と旅行をされているのですから、どれほどの地名の印を集められたことでしょう。

応接間の金魚逆立ちしてくれる

つゆ草をコップにさしてパンの朝

会果てて本屋へ回る連れがあり

シヨベルカー童の花をすくいあげ

お身の丈と言ひ、恰幅と言ひ、堂々たるお姿でいられる先生の、洒脱とばかり言い切れな細やかな一面を拝見することができます。てっちりや路郎門下の生き残り

路郎門下と言われる方が、現在何人残っておられるでしょう。この句によっても、路郎門下であった誇りを持ち続けておられたことが窺えます。今頃は皆さんと再会されて、あのにこやかなお顔で、語りあっておられるのではないかと思います。

浄土への手紙

波多野 五楽庵

らあかんて」

古稀とかや一步退く事に慣れ

私への御叱声でございます。

ユーモアたっぷりにご挨拶なされ、にぎやかなことがお好きだった先生。しかし、その反面を見ることもなく過ごした私が恥ずしくなりました。

何か言っていないと淋しい生れつき

御長寿の陰には、私どもの憶測できない沢山の悲しみがあることを知りました。

孟蘭盆会幸せうすき次女なりし

このお嬢様を詠んだ句には、私も娘を浄土へ旅立たせた一人として涙が止まりません。悲しみが生まれ、悲しみが去り、いつのまにか私も七十が近くなりました。

八十五点という人生でありしよな

いいえ、八十五点どころではありません。二百点の御生涯だったと私どもは思っております。不肖の弟子であります私と先生とのめぐり合ひは、今年で丁度十五年となりました。

かにかくにトレードマークとなりし髭

先生のお髭はまさにトレードマークでありました。その御温顔と温かいお人柄が、多くの会員を魅了してしまつたのです。いつおいでになつても、会員は先生の側を離れようとしません。

落葉掃くもつ人間にあきました

あるいはそういうのが原因で、この句が生まれたのでしょうか。

人恋し人煩わし波の音

さつさと薫風様に主幹をおゆずりになつてしまつた先生、人が恋しく、人が煩わしいこのような名句は、生まれようとしても生まれるものではありません。

定本句集の中に、奥様を詠まれた句が実に五十九の多きにわたります。奥様をいとおしみ、いかに奥様を頼られていたかが、今ひしひしと胸を打ちます。

低血圧の妻の朝寝を咎めまじ

豊明殿妻と伺候の菊日和

お二人で参内した折の句に、臣菜とございました。昭和天皇を御尊敬申し上げている御様子がしのばれてなりません。

そして奥様との最後に移行いたします。

最後の最後の味方は妻なりき

もう先生とお目にかかれることもできません。せめて「定本句集」を座右に勉強して参ります。早かれ遅かれ高野山でお目にかかることになろうかと思ひます。しかし、先生の御叱責が欲しくてなまけるかもしれません。ごきげんよう。先生。

再拝

元旦や我泰山の如く座す

を床の間に掛けさせていただきました。泰山の如く、羅漢様の如く、先生の御教示は脈々と私の胸に伝わっております。今また先生の句集を手にあたしますと、先生のお声が聞えるような気がいたします。

「五楽庵さん、きばりなさんな。きばった



江原とみおさんが 亡くなられました

司完家新

今年の春は寒い日が多くて、山陰地方の桜の開花も大幅に遅れました。

その桜もようやく満開になった四月十六日の夜のことです。夕食を済ませた私は二階の自室で野球中継を観ていました。電話のベルが鳴って、しばらくして階下から「おしんちゃんから電話ですヨ」という家内の大きな声が聞こえました。「おしん」というのは私の行きつけのスナックの名前です。

受話器を取ると、おしんのママさんの声でした。「とみおさんが来られています。一人で寂しいからつき合ってくれんかと言っておられますが…」と言う話でした。とみおさんから呼び出しを受けるのは初めてのことなので、珍しいこともあるものだ、と思っただけで、承知しました。午後八時頃のことです。

「おしん」は私の家のすぐ近く、ほんの五十メートルほどの所にありますので一分もかかりません。とみおさんはカウンターの隅に

しょんぼり座っておられました。

「とみさんどうしたんや」と私が声をかけますと、「どういふ訳か妙に寂しいんや、ちよっとつき合ってくれや」と、本当に寂しそうな顔でした。

飲みながら話をしていくうちにだんだんととみおさんの気分も良くなって来たようになり、飲んだ時の饒舌で元氣ハツラツの怪人トミーになって行きました。私がカラオケで歌うのとみおさんも歌いました。とみおさんが歌ったのは、ディック・ミネの「或る雨の午後」とバーブ・佐竹の「ネオン川」でした。

とみおさんが笑い、私も笑って楽しい春の宴になりました。残り少なかった私のボトルが空になったので、ママさんに新しいのを出すように言いましたら、とみおさんがボケットから一万円札を出して「これで完ちゃんにボトル出したって」と、ママさんのオデコに貼りつけてカラカラと笑いました。

新しいボトルが来ましたので、とみおさんに記念に一句書いてくれ、と頼みましたら、すぐに「春や春 人が恋しくなりました」と書いてくれました。それから、とみおさんはスナックのドアの近くにあるトイレに行きました。トイレから出て席に戻ると思っていたのに「完ちゃん先に帰るわ」と軽く右手を上げて出て行かれました。十時を五分か十分ほど過ぎた頃だったと思います。

それが永遠の別れになってしまいました。とみおさんはスナックを出てから私の家の前を通り、私の家から五十メートルほどの所の用水路に転落して亡くなりました。

とみおさんは肩書きや役職、権力というものには恬淡として、誠に爽やかな人でした。八十歳とは思えないシヤンとした体と頭脳で、高齢者にありがちな愚痴や繰り言は全く言わない人でした。親子ほど歳の違う私を親友のように扱ってくれました。とみおさんに強く勧められた朝の散歩は、私の楽しい日課になっています。

十月十三日には追悼川柳大会を開き、遺作集も発刊します。とみおさんは素晴らしい句をいっぱい遺されました。同人・誌友の皆様のご支援を心からお願ひ申し上げます。



三宅 一郎さんを悼む

桜井 千 秀

当教室から七名も揃って川柳塔社同人として紹介されたのは、昭和六十二年の八月号でした。その中に三宅 一郎さんのお名前があります。同人は一緒にとお誘いしたのが私、一郎さんは東南ロータリークラブ会長、日本折紙協会の講師、ひまわり保育園理事長などを歴任し、とてもお忙しい方だとは聞いてはいたものの、やはり是非お誘いしたいお一人だったのです。

「私はあくまでも趣味として楽しみ、余り気張らず続けて行きたいので、皆さんのような秀吟はとても詠めません。でもその時、その時の感想句の程度でよかったら、お仲間入りをさせて頂きましょう」とのお返事。いかにも一郎さんらしい紳士的なおっしゃり方だったと、今でも鮮明に覚えています。

一郎さんが当三幸川柳教室へ投句を始められたのは昭和五十九年。以来、毎月の投句は休まず続けられ、それこそ何が何でもと焦る

ような作句態度ではなく、句会も都合次第でひよっこり出席するという自分のペースを崩されず、作句を本当に楽しんでる様子が伝わって来て、好感の持てる方でした。そして句会の後の雑談には、ポケットの色紙を取り出し、いろんな折り紙を披露なさるのも、お楽しみの一つだったようです。

肩を張り独りで杜運しよつてる気
善行もせず竜宮へ行きたがる
全身で園児は保母に話しかけ
ガラガラと患部にひびく義理見舞
万年後地球を掘ればゴミの山

だが、これらの数々の句にはちくりと社会諷刺、また、思わず吹き出す滑稽味も溢れ、川柳眼はしっかり身につけておられました。

四十年平和かみしめ月の宴

は、第二十五回和歌山城観月句会（昭和六十年）で二席に入賞、「おめでと〜」と声をかけた私に、「青天の霹靂ですなあ〜」と頭をかきながら、やはり嬉しきは隠さず、これもご指導いただいた先生方のお陰ですと言っておりました。

去る四月十日、心筋梗塞で満七十五歳の生涯を閉じられましたが、告別式で奥さまにお悔み申し上げると、「余り急でしたので、まだこの方々の中にいるような気がします」と言われ、会場を埋め尽くす参列者、そして延々と続く弔電で交際が如何に広がったかを知りました。和時代代の同級生、林正吉さんをはじめ、古久保和子さん、堂脇満洲子さんともども、それぞれの思い出を胸にお別れしました。

輪の中の目立ちたがりに崩される

この新年句会の出席投句が絶筆となり、あの時の温顔が忘れられず、残念でなりません。心からご冥福をお祈りいたします。

追悼句

合掌

花冷えの桜散る日に友が逝く 正吉
満開の春に旅立つ紙の鶴 和子
満開の花と昇華の旅に立ち 満洲子
散る花に想い託して偲びたし 千秀

柳界展望

鹿太④長浜澄子⑤春城武庫坊⑥古川正子⑦松川杜的・春城年代⑨倉田正一⑩谷口光穂・河津正治

★第1回尼崎桜まつり川柳大会は4月14日、立花地区会館で開かれたが、宿題の「桜」共選による得点上位者は次のとおり。

①玉村幸子②三好進平③児玉歌子

雑詠秀句は岩城義芳氏

★川柳えんぴつ社は、第1回木村喜見城賞の大賞に山崎美和子、準賞に久場征子・水見千代子の各氏を決定。

★小樽川柳社は、平成7年度冬眠子賞に朝倉大柏、準賞に府榮野香京、齋藤はる香の各氏を決定した。

★川柳噴煙吟社は、平成7年度ふんえん賞を決めた。

一席は田尻美孝、二席は松田京美、三席は高瀬邦一、準賞は長塚道子の各氏で、特別賞は大震災を詠んだ神戸市の船津とみ子さんに贈られた。

★いくしま川柳会は平成7年度のベスト10を次のとおり決定した。

①河瀬芳子②田中薫③田辺

★川柳塔社参予で汐風川柳社会長の月原宵明氏の4基目の句碑が今治市桜井の法華寺境内に建立され、4月

7日、除幕と記念句会が開かれた。句碑は高さ1・5メートルの青石に「明け暮れをやすらぎの鐘法華寺」と刻まれている。

★川柳塔社参予で汐風川柳社会長の月原宵明氏の4基目の句碑が今治市桜井の法華寺境内に建立され、4月

7日、除幕と記念句会が開かれた。句碑は高さ1・5メートルの青石に「明け暮れをやすらぎの鐘法華寺」と刻まれている。



▽出版△

■『定本西尾葉句集』(B6判248頁・クロス装) 製本・川柳塔社刊・3000円) 橘高薫風・東野大八序文、1周忌にあたって新旧の作品1054句を収録した決定版

■『自選作品集「吉備団子」』46集(A5判120頁・川柳ますかつと臨時増刊・川柳岡山社刊・2000円) 巻頭に大森風来子・よしえ夫婦の結婚記念作品を収録

■『久場征子川柳集「雪片」』(B6判136頁・ゆめ書房刊・1000円) 天根夢草序文

▽訂正△

■5月号P36下段5行目「思い切り…」→「思い切り」▽P53上段14行目「八尾市の將軍寺」→「勝軍寺」



6 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	6日(木)午後1時から 増える・練習(共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西口西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から 膝・築く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 わかやま	9日(日)午後1時から 苗・プロ・求める	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後1時から 雫・替える・なるほど・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
川 柳 塔 まつえ	11日(火)午後1時から 狂う・流れる・立話	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
ほ たる 川 柳 同 好 会	11日(火)午後1時から 流れる・濡れる・ときどき	豊中市立蜷池公民館 阪急宝塚線蜷池駅西へ150米 〒560 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	11日(火)午後6時から 虹・消える・ピンチ・午後	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から 見る・無視・面会・目算	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正 午 から 説得・口紅・油断・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 街角・食う・親しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 正 午 から 断つ・毒・たんまり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
南 大 阪 川 柳 会	21日(金)午後6時から 日暮し・未完・色刷り・リード	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
東 大 阪 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から 若者・おだてる・残る・虹	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳	23日(日)午後1時から 印鑑・パー・割る・芝居	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
富 柳 会	27日(木)午後1時から 前・濁る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京 都 塔 の 会	27日(木)午後1時から 泥・乏しい・手元	ラポール京都 阪急西院駅東へ400米 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

数年来、観光客が急増したという。まず立ち寄ったのが石原裕次郎記念館という

★ゴールデン・ウィーク直

前の四月下旬、道南三日間のツアーに参加した。北海道はこれまでに三回訪れているが、今回は今まで行

たことのない小樽へ回るというのが魅力でもあった。さて第一日は、函館空港に着いて五稜郭、函館山から

の夜景観賞というおきまりのコースだったが、この夜景はナポリ、香港と並ぶ世界の三大夜景の一つだとい

うガイドさんの解説。★第二日は、函館から長万部―昭和新山―洞爺湖―中山峠を経て札幌に向かったが、山間部の林には積雪が残り、スッポリと雪におお

われた羊蹄山（えぞ富士）が美しかった。第三日は、いよいよ小樽。以前は訪れる人が少なかったが、ここ

でガツクリ。オルゴール堂、北一クリスタル館、銀の鐘を一巡して運河へ。★くろぐろとした河の流れに沿って、古びた赤煉瓦の倉庫群がひっそりと立ち並ぶという風景が長く私のイメージにあったが、今は遊歩道が整備されて公園の一角のように美しく、ヤング

好みの名所となっている。★さてもう一つのお目当は「小林多喜二」、その面影を求めて小樽文学館を訪れた。美術館と同居する貧弱な施設で、多喜二コーナーにはわずかな蔵書、書類類とデスマスクのコピーが展示されているに過ぎなかった。なお、石川啄木、伊藤

整らとともに、新興川柳の田中五呂八のコーナーも設けられていた。

（正）

○水ようかんの美味しい季節になると、蔑乃先生を思い出す。昭和四十六年、句集を出す義母に付添い、挨拶と選句のお願いに先生を訪ねたのは、ちょうどそんな季節だったようだ。すでに路郎先生は他界され、奈良の生駒でバイオリンの先生をなさっているご子息と同居されていた。

○八十近いお歳で、お孫さんに英語を教えていらつしやるという先生は、二階の下に閉きつつご馳走になつた。四男五女を育てられたのに、とても静かなたたずまいで、毎日三人の息子に振り回されていた私は、一目で圧倒されたものである。○しばらくして、お料理の先生の姪御さんが、手製のおいしい水ようかんを出して下さった。折からご子息のレッスンが始まり、お世

れす”は誕生した。（ふ）

名字から

ひとこと

「蒔苗」と書いて、私の名字は（まかなえ）と読みます。

何故（まかなえ）でないのかと西尾前主幹にお目にかかった折、話題にのぼり、「アイヌ語にかかわりのあるような気がする。調べて見る価値がある」と謎をいただきました。

機会を作つて弘前市立図書館へ行き、「アイヌ語方言辞典」（服部

四郎著）を借り出しました。アイヌ語の（まか）は、「開ける」「開く」の意、（なえ）は「川」「沢」などで、「沢を開く」「水辺を開拓する」に相当すると、分かりました。

これだけでも名字のことですので、とても貴重なことと思います。ありがとうございました。西尾先生の心靈にご報告申し上げます。

蒔苗 果林

辞にも上手と言えないお弟子さんの奏でる音色を、階下に閉きつつご馳走になつた。そして、路郎先生の一

族がひとりひとり、違った才能をものにして居られるのを「さすが」と、感じ入った記憶がある。

○もちろんお願いの件については快諾下さり、その年十月十日、義母が六十九歳になった日、句集「ねつく

れす”は誕生した。（ふ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（8月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

8月号発表(6月15日締切)

初歩教室 「恥」(3句) 吐田公一担当	課題吟 (3句) 「河童」 弘津柳慶選	「遅れる」 中原比呂志選	「炎」 宮口克子選	茴香の花(3句) 八木千代選	渺湖抄(3句) 小出智子選	水煙抄(8句) 西田柳宏子選	川柳塔(8句) 橋高薫風選
---------------------------	------------------------------	-----------------	--------------	-------------------	------------------	-------------------	------------------

9月号

課題吟 「夜」「みがく」
「気まぐし」
初歩教室「困る」

本社6月句会

とき 6月7日(金) 午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

兼題 「悪口」 岩佐ダン吉選	「奥」 福本英子選	「マンネリ」 江口度選	「風」 春城武庫坊選	「歩く」 橋高薫風選	席題 1題 当日発表 各題2句以内	会費 500円
----------------------	--------------	----------------	---------------	---------------	----------------------	------------

本社7月句会 8日(月) 予定

兼題 「港」「人間」「俺」
「招待」「丸い」

夜市川柳募集

第1回「煙」高杉鬼遊選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「昔(むかし)」森中恵美子選
ハガキに3句 6月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 6月22日(土) 午前11時5分
からラジオ第1放送(予定)

〒545

定価 六百元(送料76円)
半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成八年六月一日発行

編集兼 橋高薫
発行人 藤原心社
印刷所 藤原心社
大阪市阿倍野区三好町二丁目一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-1496
振替 〇〇九八〇一五三三六八番

「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- ②渺湖抄・茴香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本 社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊 津 店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006(代)

FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6886



本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928